

逢 いた か っ た

戦後六十五年を迎え

逢 いた か っ た

戦後六十五年を迎え



春爛漫



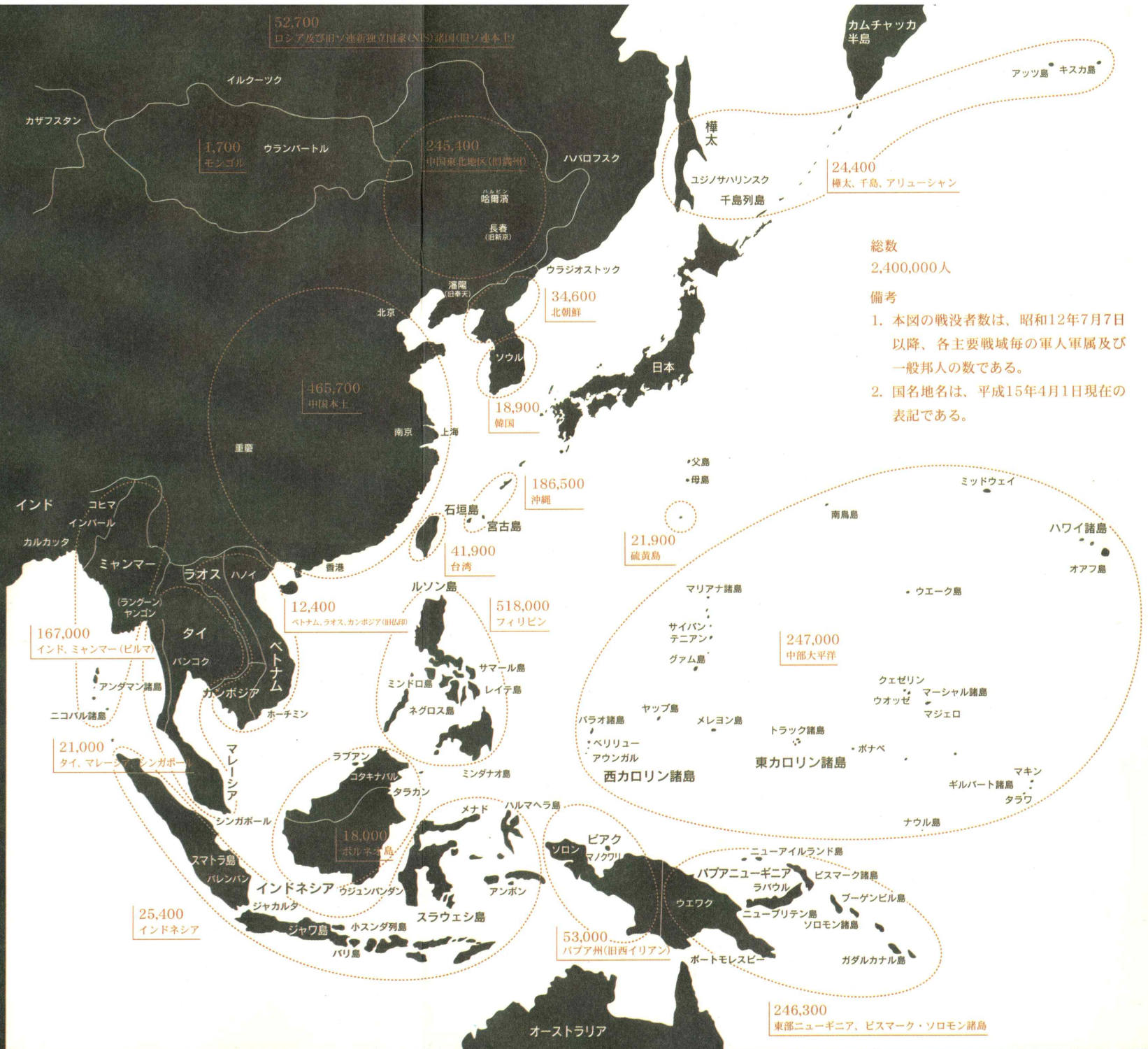
初夏の慰霊堂



慰霊堂裏庭の秋



山門の雪化粧



戦後六十五年記念誌発刊にあたって

財団法人 神奈川県遺族会

会長 小菅 寅一

このたび、女性部と事業委員会の合議により、戦後六十五年記念事業として、お母さん達のご主人との思い出、戦後の子育てのご苦労などの証言や、遺児達の父や母への思い、などの内容を中心とした記念誌を発刊されますことを心からお慶び申し上げます。

振り返れば、二十世紀の時代は科学的には目覚ましい進歩した世紀でもありました。

そうした中、我が国は幾多の戦いにより、多数の尊い人命がその犠牲となり、国民に深刻な精神的、物質的打撃を与えました。

更に、戦争のつめ跡は、国難に殉じられた方々の、とりわけ、残された弱い立場の人たち（妻や子供達）におよびました。悲しみと寂しさ、辛い社会での経験等々、私達はそれらの経験などを風化させることなく、次世代へと伝えてゆく必要性を痛感するものであります。

今回の記念誌には、様々な方々から、多数の貴重な投稿をいただいたとお聞きしております。『わが身をつねって人の痛みを知る』が如く、戦争を知らない世代の人達が、その体験をご理解していただき、恒久平和への道へと続き繋がる貴重な資料となりますことを願っております。

最後に、多くの会員各位のご協力に感謝を申し上げ、女性部ならびに事業委員会の皆様には深く敬意を表し、発刊のご挨拶と致します。

目次

悲しきかな、戦争の思い出	石川 映子	1
戦後六十五年を顧みる	石塚 喜代子	4
なにをするにも一生懸命	伊東 昭子	8
思い出の数々	大澤 春子	10
夫の出征	大八木 淑子	13
昭和二十二年の秋	小川 君子	16
恐かった横浜大空襲に想う	金子 スエ	22
もう一つの戦い	金子 三好	25
あなたまだ頑張っていますよ	川村 文子	29
主人の思い出	北島 カツミ	30
主人の分まで長生きして	工藤 京子	32
海軍軍属の出張により戦死の思い出	小峰 ミサ	34
一生懸命に生きて	斎藤 フデ	37
戦地からの帰りを待つ妻	坂本 ふじ子	38
我が家の戦後を振り返る	柴田 ユキエ	40

思い出は遠くにありて	白山	ユキ	43
戦中・戦後と	杉浦	徳子	46
会いたかった	角田	フミ子	49
戦後六十五年を迎えて	袖田	キク	51
終戦六十五周年を迎え	曾根	八千代	54
洋裁を修業し子供を育てる	高根	まさ子	57
懐かしい人々	佃	馨	60
遺族なればこそ	轟	アサ子	62
別れ	中村	志げ子	66
終戦八年後	橋本	綾子	69
終戦六十五年目を迎えて想うこと	府川	みつ枝	73
忘れられない	星	ヤスヨ	75
今は幸せ	松井	ヨシエ	78
苦難の多き十年	松下	みわ	80
親子三人生き抜いて	宮森	育子	84
あなたのそばへ	村上	まり子	88
戦時中の思い出	山口	正子	91

父への想い	青木 康浩
お父さんへ	池亀 恵子
鎮魂	石井 昭男
父の最期の地で	石川 初代
六十五年目の残像	市島 和子
軍靴の響きかまびすし	遠藤 陽子
転校にあけくれた小学生時代	大久保 初枝
父母を語る	大越 幸雄
戦争―そして別れ	小熊 紀久子
六十五年を振り返って	柏木 允
母の思い	加藤 浩之
もう誰も恨みません	金松 美恵
父の戦死と母	北村 岑雄
遺児によるフィリピン慰霊友好親善訪問に参加して	串田 明久
平和の代償	久保田 昌司
父への思い出	小宮 義昭

苦勞の人生	栄	貴代
私の戦争体験	澤村	裕幸
家族で渡った満州での悲しみと別れ	篠田	欽次
海岸通りと横浜国民学校	島崎	利二
天国の父母へ想うこと	清水	妙子
短歌 我が家の戦中戦後史	須賀	一枝
みんな元気です お母さん	鈴木	マサ
亡き母の詠める	鈴木	勝
親父 おやじ どの	清野	道郎
三枚のハガキが語るもの	関根	伸一
父亡き後の戦後の生活体験	瀬戸	恵子
日中友好訪問に参加して	田野井	信行
悲しみを乗り越えて	田村	美智代
飛ばない竹トンボ	内藤	剛
祈り	永井	由美子
父の戦死 家族 そして今思う事	中村	ヤスヨ
面会した父は雄々しかった	野崎	逸郎

短歌・・・・・・・・・・・・・・・・	野澤 とみえ・・・・・・・・	186
次世代に引き継ぐこと・・・・・・・・	野田頭 佑・・・・・・・・	187
戦争に思う・・・・・・・・・・・・・・・・	秦 範子・・・・・・・・	190
積年の思いよ届け・・・・・・・・	広瀬 文子・・・・・・・・	192
私の戦争体験・・・・・・・・	溝口 愛子・・・・・・・・	195
母を偲ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・	村上 保子・・・・・・・・	198
戦争責任・・・・・・・・・・・・・・・・	村山 矩子・・・・・・・・	201
館林・・・・・・・・・・・・・・・・	森田 和夫・・・・・・・・	204
終戦六十五年を迎えて・・・・・・・・	山崎 都里子・・・・・・・・	207
父・・・・・・・・・・・・・・・・	吉澤 庸子・・・・・・・・	209
私の戦争の記憶・・・・・・・・	渡辺 キヨ・・・・・・・・	211
ヒマワリの咲いていた日から・・・・・・・・	渡邊 玉見・・・・・・・・	214
戦争は二度と起こすまじ・・・・・・・・	伊藤 文治・・・・・・・・	218
遺族会・・・・・・・・・・・・・・・・	小川 英子・・・・・・・・	222
祖母の涙・・・・・・・・・・・・・・・・	坂本 松男・・・・・・・・	224
私の戦争体験記・・・・・・・・	高橋 春吉・・・・・・・・	226

学徒勤労働員……………	中村とし子……………	231
心ばいしたよ、おじいちゃん……………	野口聖菜……………	235
戦死がなければ……………	福井恵美子……………	238
未来に向かって……………	山田和子……………	240
鎮魂、報恩、感謝の念をもって……………	譲原武彦……………	242

題 字
写真
図 画

協坂 宜志（寒川町支部）
財団法人 神奈川県遺族会所蔵より
千鳥ヶ淵戦没者墓苑パンフレットより転載

悲しきかな、戦争の思い出

中郡支部 石川 映子（妻）

戦没者 石川 勇

戦没地 レイテ島

戦後六十五年、忘れる事の出来ない辛い事ばかりでした。

私は東京北千住で生まれ、父が行商で母は二人目を産み産後の肥立ちが悪く、私が三歳の時他界しました。勿論、父の商売も左前で家売り払い仕事の都合で神奈川にと父がよく話していました。

私は学校卒業後、ある工場に世話してくれる人がいて、そこで主人と出会いました。そして、「自分は一人っ子ゆえ戦地に行ったら親の事が心配なので嫁に来てくれないか」と、言われました。私はまだ早いと思いましたが、実家の父親も病弱で兄弟はまだ小さいし、よく考え思案の末結婚を決めました。

その頃会社は目の廻る様な忙しさで、夜勤夜勤、徹夜徹夜の毎日でした。実家の父に比べ何て良く働く人、この様な人に恵まれ良かった、と思いました。間もなく長女出産、主人は平塚のある場所に徴用で行ったきり一ヶ月に一度位しか帰りませんでした。

昭和十九年（一九四四）三月、いよいよ出征の日が近づきました。

主人は両親の前にひざまずき、「西も東も分からない子を宜しく頼む」、私には、「両親を頼む」、と言いつ残し出征、行き先は寒い寒い満州方面と聞きました。

その年の秋頃でしょうか、関東軍を乗せた軍用列車が国府津駅に四、五分停車する事を一色の人知らせに來てくれました。

早速時間に遅れない様、子どもを背負い国府津駅まで歩いて行きました。もう夕暮れで回りも薄暗く、せめて子どもを一目でも見せようとあわてました。

差し入れはいけないものと思い、あえて持たずに行きました。ホームに着いたら、「手分けして待とう」と言われ、義父は列車の前方に、義母は中央で、私は後方にいましたが逢えませんでした。中央にいた義母だけが主人らしい人を見たと言っていました。母の愛でしょうか、神様のおかげかも知れません。

帰り道も勿論歩いて帰るのですが足が進まず涙がとまりませんでした。

やがて歳月が過ぎ、満州ハルビンより軍事郵便が來ました。ハガキが来る度、書き出しに、子どもと私の名前が書いてあるので姑が私に辛く当たり、泣くばかりでした。該地は氷雪も消えてインチュウホウ（草花）が咲き始めた様です。

ソ連・満州の国境にいましたが、それもつかの間すぐ上海、フィリピンに転用され、レイテ島にて玉砕、帰らぬ人となりました。

玉砕と知らされても、自分が見た訳でもないので信じられません。

いよいよ昭和二十年（一九四五）七月十六日夜半から翌朝にかけてアメリカのコロネット作戦（九州・関東上陸進攻作戦）が始まり二宮町も列車の運行を妨害され、B29が二宮駅を機銃掃射、私たちは防空壕に逃げましたが、駅の待合室や駅付近では数名の方が亡くなられました。飛行機は駅と旧神保醬油屋（現相模信用金庫）の上を通過し南に向かって飛んで行きました

そうして八月十五日終戦を迎え、その頃新聞で何月何日に長崎・呉港に引揚げ船が入ることを知り、行きたかったのですが、もし乗っていなかったらどうする、と言われて涙を吞んで諦めました。岸壁の母ではないけれど、もしやもしやと心引かされました。

私も何か働かねばと、種々内職をしましたが大した収入にはならないので六十日ヒナ（ヒナ鶏を六十日育てて売買すること）をしました。が、しばらくして、昭和三十六年（一九六一）に学校給食が始まり、私も調理員として長い間勤めさせて頂きました。

都会では大きな空襲や学童疎開がありましたし、或いは着物を持って農家へ食料の買い出しに行っており、たけのこ族と言っていた様です。

それを思うとこの辺の人たちは幸せだと思い、感謝しております。私たちは戦争で家族をバラバラにされました。今の時代の方たちはもう少し家族を大切にしてくださいものです。

国のため命を捧げて亡くなって逝った英霊の平和への思いを大切にしてくださいものです。

戦後六十五年を顧みる

港北区支部 石塚 喜代子（妻）

戦没者 石塚 清一郎

戦没地 フィリピン

「二十日の敬老会たのむね」「先約があるから無理、無理」「何とかならない」この数日こんなやり取りの電話ばかりだ。七十歳を期に仕事をやめ老人会に入会した。老人会で民謡や踊り、三味線と若い頃習い覚えた芸を披露したところ思いのほか大好評。踊りの師匠依頼まで話が及んだ。その昔、生活に追われながらも大好きな歌と踊りと三味線を極めたくて寸暇を借しんではお稽古に励んだ。その甲斐あってコンクールでも何度か優勝できた。その経験を試す絶好の機会とばかり師匠役を引き受けた。

踊りの小道具として買い求めた銭太鼓をもとに振り付けを考案した。

銭太鼓を上下左右と振り回して舞うことで、威勢と景気の良さが感じられお客さんの受けも良かった。好き者同士が集い、私が師匠、愛好者が弟子となって踊りの会が誕生した。この太鼓が【銭太鼓踊りの会】と命名される基にもなっている。

「銭太鼓踊りの会は何流ですか？」「いい加減流」受け答えもいい加減。

常に笑いがモットーである。お誘いがあればどこへでも出向き披露している。老人会、介護施設、ケアプラザ等々、みんなの笑顔がうれしくてボランティア活動に燃えている。

「あの民謡の振り付けは？」「司会の語りはどうしよう」考えることは山ほどある。気がついたら九十二歳といった具合だ。ケガが元で足に多少の不自由さはあるが、大勢のお弟子さんが入れ替わり立ち替わり訪ねてくれることもあり毎日心丈夫でいられる。

この度、戦争の体験手記を書いて欲しいとの依頼に躊躇する気持ちもあったが、来し方に想いをはせることにした。

私の半生は戦争と対峙することから始まったと言ってもいい。それは戦争の足音高い昭和十六年東武鉄道勤務の石塚清一郎と結婚、埼玉県加須市に所帯をもった。召集されるまでの二年余りは借家住まいながらも穏やかに世間並みの幸せを満喫していた。

召集後、教育期間も終わりのよい戦地に赴くということとで家族との面会が許可になった。交通機関の発達していない当時のこと、身重であった私は遠出が無理であり面会に行けなかった。話したいことは山ほどあるのに最後の別れの言葉すらかけられなかった。

そうこうしているうち戦局はますます厳しく不安ばかりが募る中、十九年七月娘を出産した。翌年三月東京大空襲で東京は火の海と化し、沢山の犠牲者が出た。深川に住む叔母も犠牲者の一人だ。命からがら逃げのびてきた叔母との生活がこの時より始まった。

程なく夫の戦死公報が届いた。【石塚清一郎】と書かれた紙切れ一枚が遺骨箱に納められていた。一片の骨も一本の髪の毛もなく、父なしの子を抱きしめてただ涙するしかなかった。どこで

斃れ、どんな最後だったのか、遺族の一番知りたいことは何も分からずじまい。一方的に受け取らざるを得ないのが現実であった。後に夫を知る帰還兵の方からフィリピン・マヨヤオ島で戦死したと聞いた。

戦死公報が入るまでは給料が家族のもとに届いていたが、戦死公報と同時に無給となってしまった。見かねた夫の勤務先であった東武鉄道の社長の計らいで、私の仕事は確保できた。娘を叔母に託し男並みに必死に働いた。群馬に住む親・兄弟からの物資援助を受けていたので何とか日々の暮らしはできた。

三年が過ぎた頃「東京事業所に事務の仕事がある」とのお誘いで娘と二人東京に移り住んだ。社長のご好意と社長の姪御さんの手助けもあって子育てしながら勤めを継続、五年が経過した。何かと後ろ盾をお願いしていた社長が突然逝去、そのこともあって会社が倒産し私も失業してしまった。

やっとのこと個人宅に仕事を見つけ、親子二人が生きる道ができ、五年踏ん張った。その後、保険の外交の仕事についた。娘との時間が持てるのではと考えた末の決断である。外交員として十年ほど経た頃、横浜で寿司屋を開店した弟から手伝いの誘いが来た。新規保険加入者開拓の厳しさを知っている弟の温情である。ありがたい話と横浜桜木町に住まいを移し、それ以降七十歳を迎えるまで寿司屋の裏方仕事を一手に引き受け働いてきた。

三十三歳のとき大病を患ったが、その後は大きな禍もなく今日を迎えている。忌わしい戦争は思い出すのも憚るが、大勢のお弟子さんの助けも借りて心豊かに暮らせることに感謝している。

ボランティアであれ、何であれ沢山の人々とのかわりを大切に、好きな芸のおすそ分けができるよう百歳を目標として前向きに生きたいと思う。

なにをするにも一生懸命

旭区支部 伊東 昭子(妻)

戦没者 伊東 正司

戦没地 ニューギニア

主人がニューギニア島で戦死したのは昭和十八年一月十八日でした。

亡くなる前年十月に召集令状が来て、三ヶ月後のことでした。

その間、私宛に葉書が一通来ただけで、残されたときは長男が初めての誕生日を迎える前で、私が二十六歳のときでした。

父が左官業をしており、腕のいい職人で父の目になつた主人でしたから、仕事は出来た上に几帳面できれい好きでした。

今と違って休日は家族で出かけると言つた時代ではなかつたのですが、東京麻布で所帯を持つたとき、二、三回芝居小屋に連れて行ってくれたのが唯一の思い出です。

主人が死んでも悲しんでばかりはいられません。子供はいるし、自立しなければ、幸いに私は健康に恵まれていました。八十代までひとりで東京見物に行かれる位で、九十三歳の現在、病院の世話になつたのは出産と八十四歳のとき白内障の手術で四日間入院したときだけで、その時、

点滴を初めてしました。骨密度も医師から太鼓判を押されました。

もう一つ恵まれたことは、手先が人さまより器用だったこと。着物は先生にできなかったも、本を読み、着物の裏地を観察して作れました。

そんな私を叔母が、学校に行き洋裁で身を立てよと教えてくれ、洋裁学校に行ったのは三十五歳のときです。私の置かれた環境と手先の器用さ、そして私の明るさが後押しをしてくれ、洋裁の仕事は注文が多く順調でした。

今でも忘れないのは、お菓子屋さんや銭湯の奥さんの親切です。当時は下町のやさしさが残っており、人と人の間に垣根が存在しないと言うよき時代でした。

洋裁の仕事があり、健康に恵まれ、長男も私の背中を見て育ったので、やさしく母親思いで有難いことです。

現在、長男夫婦と同居していますが、朝四時に起床して、朝食・夕食は私が作っています。毎日のようにスーパーに行き、献立をあれこれ考えています。

今、洋裁の代わりに、編み物が好きでマフラーを編んで、人さまにプレゼントして喜んでくれるのを楽しんでいます。

已年生まれば着る物に困らないと言われていますが、私にはこの言葉は当てはまりませんでしたね。下着以外は全部自分の手作りの服を三百六十五日着ています。

左足が神経痛のため不自由なことで難聴であることが心配ですが、主人より三倍以上も生きる事が出来て、幸せな一生だと思っています。

思い出の数々

金沢区支部 大澤 春子（妻）

戦没者 大澤 威

戦没地 中国・浙口省

今年も早や六十五年前の思い出の日が巡って参りました。私こと昭和五十八年小田原栢山在住、神奈川県代表一名、日本武道館で天皇皇后両陛下の御前で献花した日、身に余る光栄の日、生涯忘れられない涙の一日、この日が亡き夫の霊がと涙にしたる日々。

終戦日 県一名武道館 陛下身近に涙にしたる

主人の故郷は瀬戸内海に面した四国波止浜。戦局一段と厳しくなり、教育召集兵として出征（徳島部隊）。主人は先に故郷に、私と三歳四ヶ月の息子は一日遅れ故郷にやつとやつとで切符を入手して、故郷で盛大に大勢の方々に送られて、この日が永久の別れの日。

戦局日々厳しく昭和二十年八月終戦の日となり、日々の新聞、ラジオにて操（みさお）部隊復員が知らされ、何年来会えなかった日を唯一の楽しみの日々。春のお彼岸の日、ポストに一通の

手紙入手、今まで文通なき方からの長々の文面、急ぎ封を切り、戦友の奥様からの文面、「主人は昨夜無事帰宅しましたが、大澤様は中支の露となり御遺骨は佐世保に届いている」との文面、家族一同茫然自失、涙も出ませんでした。

各家庭に電話などなきあの時代、涙こらえて岡山在住の主人の兄に長々手紙を記し、すぐ佐世保まで再三出向いて下さり、やっと下積みになっている遺骨を小田原に持参いただき、「ご主人のだから春子さんが開けてください」と申され、遺骨は唯二個、あとは黒く焼かれた石が二、三個の亡き主人の姿、家族一同涙も出ず唯々茫然自失、さびしい日でした。

さて、今後幼き子をかかえ如何に生きねばと涙しつつ考える日々。近くに私の恩師在住。やさしい女の先生で「あなたなら猛勉強して教師の資格をとりなさい」とのお言葉で、幼い子は母が世話して、私も眠らず猛勉強して教師の資格をとり生き抜いて参りました。

今、この不況の時代、つらかったが子供のため生き抜いて参り、教師をしていてよかったと思います。つらかったが毎日脅威の日々。父知らぬ子も、沢山バイトをして大学を出て、三か所の銀行の支店長をした息子にも先立たれた悲しさですが、嫁も父が戦死、心やさしく月に二、三回は私が老いの身体です。小田原墓参、仏前はいつも沢山の供物、花々です。庭に様々な花が咲き世話を良くしています。心やさしい嫁ですので……。あの空の上から如何ばかり喜びおる事かと、文才なき老いの身いろいろ記したいが目はかすみ失礼、お許し下さいませ。拙い短歌を記します。老いの私の人生の一端でございます。

瀬戸の海　子を背負いつつ連絡船　この日が永久とわの別れの日とは

混乱のまっただ中をじつと堪たえ　教師の日々を誇ほこりと思う

生命いのちとは　いつか終わりがあるなれど　戦争いくさのために彼かも吾わも無念

夫の出征

中区支部 大八木 淑子（妻）

戦没者 大八木 貞男

戦没地 北京・第一五一兵站病院

「北支の貴方はどうなるの？」と終戦を知ったその瞬間から、小さな息子を抱きしめ心の中で叫んだ。夫は二十年三月十三日に召集された。当時、家は横浜にあつたが、十九年七月から静岡県の会社の支社に勤務していた。そこへ応召の報せが届いて夫と慌ただしく横浜へ発った。駅について驚いた。着物は破れ、顔や手足を大やけどした人々が右往左往、三月十日の東京大空襲だった。静岡にもB29がよく飛んできたが、現実の光景には驚きと悲しさでいっぱいになり上反町の家へ着いた。十三日に甲府に入隊だったので短い三日間だった。

夫は大学時代から読書家であり、よく考える人であり、自由人であつた。しかしながら、私は夫のように深く物事を考え把握することができなかった。夫が「日本は負けるかもしれない」とためらいがちに言った時にさえ、私は何も判らぬまま「非国民」となじったりした。しかしながら、夫はもちろん自分は日本の為に戦う覚悟があると静かに答えた。私の父は日本郵船の御用船の船長として、敵前上陸を試みつつ船団を組んで弾丸の下を航海していた。

その日、横浜駅に息子を背負って、出征する夫を見送った。夫は本当に子煩悩であった。もうすぐ二才になる息子の可愛い頬をちよんちよんとつついて「大きくなれよ。」と笑いかけていた。

当時、その子は一才九ヶ月、もう一人は胎内に三ヶ月、私は別れの手を振った。果てしない不安を感じ空漠な思いであった。父が遠い米国航路でも、欧州航路でも、乗船する父と別れても、数ヵ月後には帰ってきたことと少しだけ重ね合わせてしまった自分は、その時はそれからのことを深く認識できずに申し訳ない思いでいっぱいである。甲府まではお舅様が付き添って下さった。それから五月に空襲があり、横浜の我が家も実家も全焼した。七月に簡単な葉書が来て夫は北支にすることがわかったがそれっきりだった。

とうとう戦争は終わった。静岡の山の中へも順次復員される方がいて、隣家はビルマから復員されたが夫はなかなか帰還しなかった。その内、十月には元気に次男が生まれ、その子を背負い、長男の手を引き駅に通った。

駅頭に帰還列車が着く度に「私の主人は北支なのですが」と尋ね回った。「私達は中支で、北支は終わったはずだ。」と言われても私は帰ってくると思ひきっていた。二十一年九月にお舅様が来られた。「二十年十月三日に北京兵站病院で亡くなった。」と報せて下さった。全く青天のへきれきであり私は泣くこともできなかった。

横浜の家は焼失していたので、母の富山の実家に二人の子供と私は身を寄せた。弟達も、私の子供達を本当に可愛がってくれて今でも有難いと思っている。二十四年末に横浜へ帰り、今日まで、大八木家の長男であった夫は亡くなってしまうたが、長男の嫁として二人の息子の母として

働き、両方の両親を看とり心をこめて生きてきた。

戦後六十五年目、幼い時父と別れた長男、父の顔を知らない次男、二人の息子がすすくと立派に成長してくれたことを、神様と夫、家族、周りの方々に私は心から深く感謝している。この日々は感謝の日々である。

駅頭がくらくなりゆくかなしさよ 帰還兵らの言葉聞きつつ

夫果てし地平を染むる夕つ陽を 子らと眺めしただ眺めいし

極まりて茜うつくし杳き日の 夫の遺骨還り来し日も

昭和二十二年の秋

港南区支部 小川 君子（妻）

戦没者 小川 茂

戦没地 マーシャル諸島

其の日、どこからか金木犀の花の香りがしてきて・・・

遠い弘明寺の山の上から真っ赤な大きな夕日が茜空の中へゆっくりと静かに沈んでいった。私は一枚の紙を握りしめ家を飛び出して橋の上に立っていた。眼から止めどなく涙が溢れ、赤い夕日は涙に滲んで消えていった。

夫の戦死の報せでした！

夫の兄が抑留されていたシベリアから九死に一生を得て帰還してきて、焼け野原になった横浜の中から、私達親子を探し当てて、持ってきてくれたものです。横浜の度々の空襲により転々と住居を変えていたため、探し当てるのは並大抵のことではなかったと思います。そして私の手に渡してくれました。

本当には出来ず、年老いた両親と子供には告げられず・・・

家を出て橋の上で見たあの赤い夕陽は、一生忘れられないものでした。

戦死地はマーシャル群島の小さな島『ルオット島』と聞きましたが、地図にも出てない位の小さな島で、どんなに苦しかったか。子供を案じて南十字星を見ていた事でしよう・・・

私は富山の富豪の家に一人娘として生まれましたが、訳有りで、生後一週間目に横浜の遠縁の家に貰われてきたそうです。子供の無い夫婦の家でしたので、大変大事に育てられ、教育も付けて貰い、幸せに育てられました。

十八歳の時、すでに支那事変が始まっていて、配給制度の世の中になり、家の商売が厳しくなってきたため、結局、何も解らない歳なのに婿を取るようになりました。人のお世話で、鎌倉に在住していた家の三男坊が、私のお婿さんに迎えられました。当時はお兄さんが出来た様なものでした。

時局は、更に悪くなり支那事変は日中戦争に拡大し、更に大東亜戦争へと大きく激動の渦へ巻き込まれていったのでした。

昭和十四年、男子を出産。七か月の早産だったので、多くの人の手を借りて、大変な苦勞をして育てていただきました。当時は保温器具など無く、湯タンポで体温を調整しながら、医者とお産婆さんで力を合わせ、細い小さな命をよくぞ助けて頂きました。

一歳位になった頃から、父の後を追う様になり、朝、横浜ドックへ出勤する父を、バイバイと手を振り、途中まで見送った幸福な短い月日でした。三歳位になった頃から、戦争は益々激しく

なり、とうとう若い夫にも、海軍へ電気技術者の軍属として連れていかれました。すぐに帰れると思ってました。

それからの生活の激しさは思い出しても大変な事でした。

まず、食糧が手に入らなくなり、両親と幼子を背にどうやって生きていくか？

戦中戦後の日本中の人々の生活苦は、言葉にもならない壮絶なものでした。

「戦争は絶対にしてはいけません！」

夫の出征後、一日たりとも、食べるため食べさせるために遊んではいられぬ私は、口利きで港湾荷役の藤木企業に計算課員として入社いたしました。二、三ヶ月後、算盤の腕を見込まれて桜木町の弁天通りに事務所があった下請け会社の三浦組に引き抜かれ、経理事務員に転職致しました。社長に気に入られて、当時としては良い給料で、磯子に親子で住める家まで用意して貰い、それは勿体ないくらいでした。

毎日の空襲の中を桜木町まで通勤し、今日此の家に戻って来れるかと思う位に激しく空襲警報が鳴る毎日でした。

会社の勤めは楽しく一生懸命働きました。

社長は関西のかたで、金儲けが上手で、景気が良いに任せて、金で何でも解決出来ると思ってたのでしよう・・・

其の内、私を自分の思い通りのものにしたくなったのでしよう。

仲立人を立てて話に来ましたが、若かった私には夫の居る身だし、とんでもない事だと強く撥ね

付けました。

潔癖な若い心は強かったと思います。プライドを傷つけられた社長は、翌日、「家を出ていけ」と言いました。

私一人ならともかく、年老いた両親と幼い子をどうしよう。

忘れもしない、二月の雪の降る日でした。学友の叔父さんと材木会社の課長をしている人に相談に行きましたら、何と『捨てる神あれば、拾う神あり』で、「丁度、配給所の事務所の二階が空いているので引越してこないか」と言われ、何と有難かった事か！

翌日、その頃は馬車で引越をしました。少しばかりの家具を載み、父、母、子供と雪の積もった道を三吉橋の近くの新居へと歩いて行きました・・・今も眼に残っている光景です。

お陰様で、私はその事務員になれまして、二階に家族が住み、一階の事務所で私が働ける様になりました。

神奈川県木（株）の闊葉樹の配給所でした。その時の社長は小此木歌次さんでした。（ちなみに戦後大臣を務められた小此木彦三郎さんのお父様です。）

本社は伊勢佐木町の野澤屋の二階にあり、仕事で度々行きました。配給所には県内の材木店のご主人達が勤めに来て、いつも十名くらいは仕事をしていました。

私の母は、皆さんのお茶くみなどして手伝い、父は薪割りや、お風呂の世話をし、子供は材木置き場で遊んでおりました。月給は前の半分になりましたが、昼休みにはモンペなどのミシン掛け、夜は編み物などして良く働きました。

社員になり心は落ち着けたのですが、毎日の空襲は激しくなるばかりで、あちら、こちらと火の手の上がる毎日でした。

其の中を毎朝荷運びの馬車が来るのですが、重い荷物を牽いている馬は、かつて根岸の競馬場で馬場を走っていたサラブレッドの競走馬だったのです。

澄んだ眼が、悲しそうに私を見ます。お茶殻が好物と聞き、社員の飲んだお茶殻を干して置き、翌日の朝、やつて来た馬に食べさせると、とても嬉しそうに眼を潤ませて食べてくれました。あの細い美しい足で荷馬車を牽くなんて・・・

「可哀そうだから叩かないでね」と馬主に頼みました。

あんな美しい馬までも、重い荷車を牽かされるなんて・・・戦争は残酷です！あの優しい眼は忘れません！

それから数日後に横浜大空襲でした。其の日は、朝からよく晴れた五月晴れの静かな午前でした。

息子が四十度の熱を出していたので、会社を休み看病しておりました時、空襲警報が鳴り、いつもと違うけたたましい鳴り方でした。アッ！と言う間に五百機ものB29が横浜の空へ襲って来たのです。夥しい轟音をあげて・・・

二十人も入れる頑丈な会社の防空壕に皆で入り、息子を奥の方に布団を敷いて寝かせていたのですが、そのうち外でバリバリと凄い音がするので、男の人が上の重い蓋を開けて外を見ると、黒い煙が空一面に、外は真っ暗！驚いている間もなく空から焼夷弾の雨が降って来た！縄で

作ったハタキなど何の役にも立たず。たちまちあたり一面火の海になる。もう口などきく間もなく、逃げることしかできず。火の海の中を、息子を背負い、母の手を引き、防空壕から抜け出した。

父は「此処に残る」と言い動かないので、母と皆の行く方へ逃げた。商店街を避難中に二度目の焼夷弾の攻撃があり、同時に機銃掃射による攻撃で、後ろの人が四、五人倒れ、近くは血の海になった。

これ等の記憶は、忘れようとし、思い出したくなく、語りたくなく、そっと胸に仕舞っておりましたが、今、書き始めると、あの時の光景の凄まじさ、恐ろしさ、悲惨さが次から次へとドツと噴き出てきます。

「祖先の為、未来の為に、美しい此の日本を残してください。守ってください。」

「戦争は絶対にしてはいけません！」

「平和な世界を守れ！」

私達、苦難を乗り越えて来た者の願いは一つです。

戦死していった多くの御魂の安らかなる事を祈り、守って行きたいです。

恐かった横浜大空襲に想う

港南区支部 金子 スエ（妻）

戦没者 金子 政春

戦没地 サイパン島

戦後六十五年思えば永い年月でした。私も四月で九十三歳になります。

横浜大空襲の時は主人が太平洋戦争出征中。娘二人は集団疎開でした。一才八カ月の男の子を背負い五才の男の子の手を取り、出来たばかりの横穴防空壕の一番奥に入りました。後から隣組の人が大勢入って来ました。

どの位経ったか外が騒々しく飛行機の爆音と焼夷弾のバラバラ落ちる音がした時、係員が「危ないから出る」と言いました。皆一斉に飛び出した。私も皆の後に出了たのですが、一番奥に居たのでおくれ外に出たら足元に火が飛んできました。

係員が「もう駄目だから元の穴に入れ」と私の背中を押したので又穴に入りました。誰もいない真つ暗な戸の隙間から煙と火の粉が入ってくる。本当にもう駄目と思いい子供を抱きしめて「死のうね」と言ったら「死ぬのはやだよ」と言われ、はっと驚き気を取り直し夢中で煙と火を防ぎました。時間は分らないが静かになり係員が「終わったよ、もう大丈夫だ」と知らせてくれました。

した。

外には死体がごろごろ道端に横たわっている。後の話では隣組の人や町内の人は殆ど黄金町駅で亡くなられたそうです。背中の子は泣きもせずぐったりしていました。夢中だったので負ぶっていたのも忘れかけもう死んでもいいとあきらめていました。

二、三日防空壕にいて、義兄の家は磯子方面で焼けなかったのでお世話になりすぐ近くの医者に診て頂き、肺炎の峠を越しているから心配ないと言われ「有難うございます」思わず泣きました。考えれば今まで泣かなかったのが不思議でした。

この子は運の強い子だ。八月十五日の終戦の報せ。近所の方が「坊や戦争が終わったからお父さん帰ってくるよ、よかったね」と頭をなでてくれました。疎開の娘達も帰ってきて親子五人揃いました。さあ住む家を探そう。

市内は焼けちゃって駄目だから金沢八景の方面ならあるかもと教えられ、子供を負ぶって八景から山の方に行き通る人に尋ねました。此所は大道という所ですから此所の町内会長さんに聞いてもらいなさいと地図まで書いてくださいました。恥も外聞もなく伺いましたら早速大きな百姓家に連れられ納屋を貸して下さいました。但し主人が帰るまでの約束です。やっと水入らずで暮らせる事ができました。

娘達は山へたきぎ拾い、田圃では「のびろ」採り、お百姓さんから野菜を分けてもらい、たまに魚や貝等売りに来るのでどうやら貧しいながら楽しかった。

翌年二十一年少し落ち着いた所へ主人の公報です。昭和十九年七月八日サイパン玉砕の報せあ

り、心配し覚悟はしていてもです。

子供に箱の中を見せてくれとせがまれ開けたら小さい白い紙切れに金子政春の霊と書いてありました。子供はがっかりした様子、私は頭をがんと殴られた気持ち。又家探し。幸い私が新聞配達しているお客様で市役所に勤務の方が気の毒に思い南区の母子寮をお世話して下さいました。当時はなかなか入れなかったそうです。私は幸せ者です。

昭和二十二年になり又近所の人の口添えでホテルニューグランドに勤める事が出来ました。昭和二十二年八月から三十三年間働きました。退職して今日で三十年になります。あの恐かった大空襲から振り返りますと私は四人の子供のお陰です。子供に励まされ生きる力をくれました。又行く先々で多くの人が親切にして下さいました。昔の諺に『渡る世間に鬼はなし』只今子供二人孫六人ひ孫六人です。新年会、誕生日会とかあると全員集合で食事をして記念写真を撮り楽しんで居ります。

もう一つの戦い

瀬谷区支部 金子 三好（妻）

戦没者 金子 清秀

戦没地 フィリピン

主人に召集令状が来しました。赤紙が来たというべきでしょうがそれは色つきの紙ではなかった。原稿用紙の裏面に召集令状の文面が印刷されたものでした。「僕のような者にまでこんな召集令状が来るということは日本はもう勝てないな」と夫がポツリと言った。

赤紙を作る用紙にも事欠く戦況だったのだろうか。

昭和十九年六月三十日夫は二十七歳で出征、妻、長男二歳十ヶ月、父五十五歳、母五十三歳と残された家族は父が住職であった長蓮寺で肩を寄せあつて生きてきた。二十年二月二十四日次男誕生。主人に次男誕生のうれしいニュースも知らせるすべも無かったが二人の子供が元気に育つてくれるのが唯一の楽しみであった。戦火が激しくなり私達母子は近くの夫の実家の広田へ疎開した。

二十年八月富山市は空襲を受けた。疎開先は焼けなかったが近くの自分の家のある地域は空襲を受けた。家のある方角の空が桜が咲いたように一面に明るくなっていた。爆弾が落ちると明る

い空のあちこちにパツと火の光が見える。まるで花火を見ているような空だった。私達は明るい空をなす術もなく遠くから只々見つめていました。「ヒューンヒューンと耳をつんざくような音、そして超低空で飛行機が頭上を旋回しながらパラパラとタン屋根に豆をまくような音で機銃掃射をした」と後で聞かされました。次の日、家のある富山市内に向かって歩いて帰る途中で富山から田舎に向かう人達に沢山すれ違いました。「富山は焼けてしまった」と言うだけで誰も多くを語らず通り過ぎて行きました。

家族は疎開先で終戦をむかえた。お寺だった私達の家はすべて焼け本堂などの柱二十八本が焼け残りとなって立っていた。父母が生きていてくれた事だけが喜びでした。焼け跡の片づけと住む場所を求めて八尾に帰り知人の大工さんの協力を得て焼け残った二十八本の柱を使ってバラックを建ててもらい母と子と老親の戦後の生活がはじまった。戦後を生きるためのもう一つの戦いのはじまりだった。

昭和二十一年春戦死の公報が届いた。でも母と子には夫の死を悲しんでいる時ではなかった。次男誕生後暫くして老父の死、そして二人の子供の成長を支えてくれた老母もその後病の人となった。

戦後、舞鶴港には外地からの復員船が何度も着いた。最後の復員船が着いた日の夜遅くまで起きていた長男が「やっぱり風の音だった。お父さんが帰ってきたのではなかった」としよんぼり家に入って来た姿が今も瞼の奥に残っている。

戦後は住む所にも食物にも不自由な社会状況だったので焼け残りの木で造ったバラックは親

子三代の住居としては貴重なものだった。庭先に畑を耕して子供達と野菜を作ったり、病気がちな老母を抱え一家の生活を支えるためには母は外で働かなければならなかった。

子供から少し手が離れたのをきっかけに県の教育委員会の仕事を手伝うようになった。病人を抱え医療費もかかり生活は大変だったが、近隣の人の配慮で休日は新聞の集金も手伝った。成長した子供達には小遣いは与えなかった。生活のために小遣いまで与える余裕がなかったと言うべきでしようか。

戦後のないないづくしの生活の中ではこの家でも子供が働くことは普通でしたが我が家もそれに違わず兄弟で新聞配達、納豆やあめ売りなど元気に活動していました。

そして私が最も忙しく働いていた時代は本業の他に休日は新聞の集金、そして料理の腕を買われて近所の食堂で夜の料理作りを頼まれ三つの仕事をしました。料理作りで夜が遅くなることを子供達に話し相談すると「病人と子供を抱えたおばさんに仕事を依頼する人などいない時代に料理の腕を買われたんだから手伝ってあげたら、家の事は僕達で何とかやるから」と頼もしい返事に励まされ、「よし、子供達のために強い母になろう」と思い精いっぱい働いてきました。

子供達にとって愛情をそそぎ育ててくれた祖母が寝たきりになった時のことでした。昼間の仕事を終え帰宅してからの洗濯や夕食の献立など考えながら急いで我が家の見える所まで帰りました。庭先の物干し竿にきれいにほされ風にひらひら翻っているおむつを見たとき胸をつかれました。寝たきりの祖母のおむつを兄弟で取替えそして洗濯をして干してくれていたのです。「坊

や（兄）おつじや（弟）ありがとう」私は目頭が熱くなりおむつの翻るわが家に向かって手を合
わせていました。母も子もお互いを思い遣り毎日を一生懸命生きてきたのが父亡き後の母と子の
日々でした。

平和な時代に九十歳という高齢になり子供達と歩んだ日々を思う時、戦死した主人が一番あわ
れでなりません。主人は旅行好きな人でしたが旅を楽しむこともなく二十代の若さで異国の露と
消えました。主人から二人の子宝をいただきがむしやらに子育てをしてきた自分を振り返るとき
何とも言えない嬉しい気分を味わえるものです。女は弱いものですが母となると違ってきます。
母は子の為にはやる気が出てその気持は誰にも負けません。お蔭様で子供達も今は親となり「女
親が一人で育ててくれたのだから負けてたまるか」の心意気旺盛でそれぞれの道を進んでいます。
高齢となりあの戦争がなければ、主人が生存していれば私達の生活はと歩んで来た道にしみじみ
と思いをめぐらします。

高齢とは淋しいもので自身のこともやつとの日々です。二十代の若さで天国に逝った人の事を
想います時、今少ししっかりと供養したいと願うばかりでございます。

あなたまだ頑張っていますよ

横須賀市支部 川村 文子（妻）

戦没者 川村 禮治

戦没地 フィリピン

結婚し わずか三日で 出港と 今日が別れと 誰が知るらん

熱をだし 出れば戻れぬ 心情を 汲みとれぬまま 別れ悲しき

国のため 征でゆく夫 見送りぬ 無事のかへりを 祈りおる我

号泣す 戦死の報せ 受取りて せめても一度 会いたかったと

すぎ去りし 六十五年 振かへり 悲しき時も 遺族の絆で

これからも 残り少ない 年月を 慰霊と我が身 共に守らん

主人の思い出

保土ヶ谷区支部 北島 カツミ（妻）

戦没者 北島 秀吉

戦没地 ジャワ島

昭和十六年四月二十九日結婚して、二泊三日の箱根への新婚旅行。一番最初の言葉が、何時軍隊生活に入るかわからない、もし、男の子が生まれたら「智加敏」と言う名前をつけて呉れ、中学時代から友達にわが子に付ける名前と言っていたそうである。女の子なら、お前の好きな名前をつけなさい。であった。

この頃（昭和十六年）は東海道線の電車が家の前を通っているので、毎日バンザイバンザイでした。中には石に包んだ手紙（走り書き）を投げる人もあり、お願いごとや住所が書いてあり、そこに送ってあげたこともありました。御礼の手紙には南方方面に向かわれるとの家族への知らせだったそうです。

昭和十八年十二月二十五日お正月の煮物をしている時、主人に召集令状が届きました。いつかはと、覚悟し心得てはいたものの矢張り現実のものになると涙に暮れました。

正月もそこそこに、一月五日、親戚一同やご近所の方々の見送りを受けて保土ヶ谷駅から出征

しました。その前年の七月七日男の子が誕生して、主人が「智加敏」と名づけて大喜びで可愛がっていた息子は六ヶ月でした。

その後、何も連絡がなくて心配しておりました矢先に、南方方面に立つから面会に来てくれ、と連絡があり、横浜から六時間の豊橋まで、子供を抱き、主人の姉と私の妹とで面会に向かいました。約一時間の面会、豊橋駅で後ろを振り向かないからそのままが良い、との言葉が最期の別れでした。

そして、昭和十九年十一月十日ジャワ・ナングス岬でB24の爆撃直弾により全身が爆砕したとの知らせがありました。

主人が、結婚記念にと植えて行った柿の木三本のうち二本は枯れてしまいましたが、一本は毎年沢山の実をつけてくれます。毎年、私は靖国神社にお手紙と共に送っています。私の心が少しでも晴れる気がします。

主人の写真はいつまでも若くて凛々しいままです。生きていたら、智加敏と酒でも酌み交わしているだろうか、私とお茶でも飲みながら四方山話でもしているだろうか、と主人を偲んでおります。

主人の分まで長生きして

高津区支部 工藤 京子（妻）

戦没者 工藤 角蔵

戦没地 フイリピン

私は今年の八月で満八十九才になりました。

思い起こせば戦後六十五年、あつという間に過ぎました。長い様であり短い様な感じで、いろいろな事が走馬灯の様に浮かんできます。

主人と結婚したのが昭和十五年十一月、主人は二十二才私が十九才の時でした。最初は川崎で世帯を持ちました。その頃は皆が貧乏でしたので本当に何も無いミカン箱一つからの生活でした。一年後に長女が生まれ、二年後昭和十八年に次女が生まれました。その頃が私の一番の幸せな時でした。強制疎開で高津に引越して来たのが昭和十九年四月二十九日、忘れもしません。その時主人のはいていた下駄が車から降りたとたんに半分に割れました。それから一週間して赤紙、そして一週間後の十九年五月十七日に出征。私は八ヶ月の次女を背負い二才の長女の手を引いて駅まで送りました。主人の最後の言葉は「じゃあ行って来るよ、人様には後ろ指さされる様な事だけはするな」それが最後の言葉でした。まるで隣にでも行くような簡単な別れかたでした。

最初は満州に行き、そこから手紙が二通とどきました。それが主人の遺品です。そして昭和十九年十一月フィリピン・レイテ島ナグリハンにて戦死。あつという間の出来事でした。昭和二十年八月終戦。それから私達親子の大変な生活が始まりました。

次女は生後四ヶ月で高熱により後で分かった事ですがその為に脳性小児麻痺で右側半分が麻痺して歩く事が出来ない子供でした。最初は子供二人を父母にあずけ勤めに出たのですが、氣になつて氣になつて仕事も手につかない状態でした。その後近所の方に古着屋の帳場を頼まれました。しばらくしているうちに私にも出来るかもしれない、そう思つて古着の鑑札を取り、自分の着物や主人の洋服を売つて金に換え、その金で古着を買い店先に並べるとおもしろい様に売れました。しかし、朝早くから夜おそくまで、時には自分の背丈より高く荷物を積んで都電に乗る時など大変でした。ある時には「おばさん無理だよ、降りろ」と言う人もいれば、後ろを押してくれる人もいました。でもこの荷物を持つていけないと……毎日が必死でした。それに次女が日赤病院で手術をしてそれはそれはお金が湯水の様に出て行きました。現在の様に保険があれば良いのですが、いくら働いても足りませんでした。でも歩く事は出来ませんでした。

そして今、身体が不自由なりにも福祉のお世話になりながらどうにか平塚で生活しております。私は長女が婦人服店を開いておりますので毎日店に出ております。私も生涯現役でこの世を終わる事が出来たらどんなに幸せかと思ひます。

戦争さえなければ死ぬ事などなかったであろう主人の命、私も子供達も主人が自分の命を分けてくれたと思い、せいぜい楽しく長生きしたいと思つております。

海軍軍属の出張により戦死の思い出

葉山町支部 小峰 ミサ（妻）

戦没者 小峰 俊雄

戦没地 クエゼリン島

昭和十六年二月に結婚し夫の家の近くに家を借り夫婦二人の生活が始まる。

夫の勤務先は横須賀海軍造兵部水雷工場に義父と共に勤務していた。初めての出張は兵庫県神戸市に住み大阪機工であった。その後千葉県木更津へはしばしば出張し、南方へはサイパン、マールシャル群島及びマレーシアへ三カ月昭南島（シンガポール）へ三カ月と出張つづきでした。昭和十八年六月に三回目の南方出張はどこへ行くかは秘密であり、今回はすぐには帰れないといわれ、今までの出張と異なり神社の祈願や東京巢鴨のとげ抜き地蔵のお守りを持たせました。今までの出張ではお守りなど嫌がった主人が素直に受け取りました。

昭和十八年六月十八日に横須賀港逸見波止場正門まで私と一歳になる子供と実家の母親と見送りにいった。横須賀海軍工廠及び田浦海軍工廠の軍属の二十四名を引率して出発した時、「体に気をつけて、手紙を必ず下さい」とお願いし別れを告げた時、子供が急に泣き出し、イヤな予感がした記憶があります。

夫の死後、海軍工廠の人達から聞いたところ南鳥島に行き硫黄島に渡りそこで海軍工廠から一緒に出発した二十四名の部下と別れ、夫はクエゼリン島へ渡りそこで玉砕したという事である。

夫の出張期間中私は実家に住んでいた。先の戦死の公報を義母が泣きながらもつてきた。海軍工廠水雷工場の同僚の山下国男氏より「クエゼリン島が玉砕して水雷工場派遣員二名の戦死者が出て、その一人技術面で私の恩師であり兄のような存在だった小峰さんが遂に帰らぬ人となってしまった。」とお手紙をいただいた時のショックは忘れる事の出来ない気持ちでした。

私は横須賀海軍工廠の久里浜事務所へ子供を背負い何度も足を運び、尋ねるとクエゼリン島には九十名の捕虜がいるとの事、私はもしかすると生きて帰ってくるかと思ひ寂しくなく働くうちに工廠の上役のかたから小峰君は捕虜になるような人ではないと言われ、遺骨を早く頂きたいと申しあげました。

そのうち終戦となり昭和二十一年に横須賀市曹洞宗「良長院」へ私と義兄、義弟の三人で遺骨を受け取りに行った。大変軽かった箱を渡されるとき絶対に開けないで下さいと言われました。葉山町葬儀は昭和二十一年四月五日「光徳寺」にて戦死者四名一緒に行われ「町葬はこれが最後です。」と言われました。

その後小峰家の本家より墓地をいただき昭和三十一年二月に墓石を建て埋葬致しました。

昭和四十一年五月二十八日に亡き夫に、勲八等白色桐葉章をいただき、その際、私に「お体に十分気をつけて後を頑張ってください」とお言葉を頂きました。

この手記は戦中戦後厳しい荒波に必死で生きてきた戦争未亡人の手記であります。

主人は出張出張と仕事に追われ家庭を顧みる暇もなかったようですが私の心の中には今も生きています、私は未熟ながら葉山町遺族会婦人部長を長く務め、神奈川県遺族会も皆様のお力を頂きながら務めさせて頂きました。

私の今あるのは皆様の暖かいご指導とご援助の賜と深く感謝し、今日ここにお世話になりました方々に御礼申し上げ一筆書かせて頂きました。
誠に有り難うございました。

一生懸命に生きて

伊勢原市支部 斎藤 フデ（妻）

戦没者 斎藤 国雄

戦没地 山梨県・陸軍病院

主人、斎藤国雄は昭和十九年四月横浜の高根町に住み、日本海運の造船所に勤務していました。長女が生まれ三ヶ月でした。夫に召集令状が届き中国の戦地に渡りましたが、病気にかかり山梨県の陸軍病院に転院してきましたが、昭和十九年十二月十一日亡くなりました。陸軍一等兵でした。

横浜大空襲で子供を負い防空壕に急いで入りました。空襲が少しおさまり外に出た時、川に向こう側は火の海で、私達が三吉小学校に着いた時は風の向きが変わり、火の粉が飛んできて大変でした。空襲がおさまり黄金町の駅まで歩いた時、途中は亡くなった人が並べてあり異臭がすごかったのを忘れることができません。

その後は、実家近くの農家の方の親切で納屋を改造してくれ、約二十年間八十九歳まで住んでいました。

最近、娘夫婦孫二人にかこまれこの伊勢原にお世話になっています。

戦地からの帰りを待つ妻

中郡支部 坂本 ふじ子（妻）

戦没者 坂本 正二

戦没地 インドネシア

きょう帰ってくるか、きょうは帰ってくるだろう。行方不明のまま、戦死では心ははれません。

きょうよりは かえりみなくも 紀の国の 河原撫子 思いてぞゆく

この一首を残して 軍刀一本持って出てゆきました。戦後六十五年、よく我慢していると自分ながら思う。

子供も私も、おかげ様で病気もせず元気ですごしているのは、主人の霊が守っていて下さるからですね。

しかし、淋しい、声をききたい、顔もみたい、夢にでてくればいいのにそれもかなわない。朝おきて一日の生活がはじまる。ちっとも変わらない、かわってほしい。

相川の土地から二宮へと、家を変えたので分からなくなっているのではとも思う。一日一日の

生活は、平穩無事ですが心は晴れない、帰ってきてあなたの声を聞くまでは・・・。

八十八日目にていった時の子供は、今は六十五歳すっかり生活をしていますから、安心して帰ってきて下さい。

私も九十歳、あなたが帰ってくるまではがんばりますから、一日も早く帰ってきて下さい。祈ります。

我が家の戦後を振り返る

寒川町支部 柴田 ユキエ（妻）

戦没者 柴田 登

戦没地 シベリヤ

主人「登」を昭和十六年、綾瀬より迎えました。十八年一月に長女雅子、翌年八月に長男が誕生、父、母と共に、にぎやかな家族となりました。

戦争は一段と激しくなり、主人も長男誕生のその年九月に召集され、東京世田谷の部隊に入隊しました。十一月に戦地満州に移動かも知れないと、宮山の金子さんより知らせて頂き、翌日、両親と早川（綾瀬）の兄と私と長女をつれ面会に出発しました。午前中に面会は出来ましたものの、夕刻にはもうどこかに出発するとのこと、品川までの電車で家族ともども同乗させてくれました。

その間のわずかな時間に子供との再会、いろいろな話が出来ました。出発の時間待ちの夕刻まで、話は尽きませんでした。田畑の耕作のことと、子供をたのむということばかりを何度も何度もいわれました。

その大切な長男を二か月後に亡くそうとは、夢にも思いませんでした。秋の穫り入れの時期に

なり、主人の出征やなにやらで私自身が体調を崩し、子供を病気にしてしまい亡くしてしまいました。主人は農業一筋の人でしたので田畑で一丁歩以上の耕作をするそこその農家の秋は女手では大変な農作業でした。今思いますと、毎年親戚兄弟の手を借りての農業を主人が帰るまでと何年も続けました。日本は終戦後、食料難が当分続きましたので春と秋の農家の農作業は、どこでも大変でございました。

二十年八月終戦を迎えて、外地の兵隊さんも次々と復員されました。或る方は元気に、或る方は戦死と悲喜こもごもの戦後でした。私の主人はというと一向に消息がつかめず、千葉県留守部隊の連絡所に何かの手がかりを得ようと毎年、何度も通いました。

ある時は戦友に、又或る時は満州からシベリヤに抑留されたとか、シベリヤの病院から帰国された看護婦さんを尋ねて兄と叔父と夜行列車で長野に、大阪へ、山口へとあらゆる情報を得ようと努力しましたが最後に何処にいったのか生死さえ不明で確実な情報が得られませんでした。

しかし、いろいろな情報を総合すると、どうやらシベリヤに抑留されて戦病死したのではないかと思います。私はしかし、或る日突然「只今」と云って帰って来るように思えてなりませんでした。五年、六年と消息がつかめぬまゝ時が過ぎました。寒川町で未帰還兵の最後の一人となつてしまいました。

おかしい話ですが、このままですと永久に未帰還兵という扱いでして、こちら側の態度を明確にしませんと主人の葬儀も出来ません。私は戦死を認めることがどうしても出来ずにいましたし、認めようと思いませんでした。

しかし、親族会議が開かれました。結論として、長女雅子の成人を待って、昭和三十年頃になり、県に申し出をし、昭和二十二年シベリヤにて戦病死という公報を頂きました。父や母、姉妹たちにも共に随分と苦勞を掛けたと思います。

娘の雅子が小さい時から明るく振る舞ってくれたことに救われたと思います。

その後、主人の本葬、雅子の結婚、父の死と心の休まる暇も無く続きました。あの忌まわしい戦争は、私達に大きな犠牲を与え、家族の平和を奪いましたが、考えてみますと日本全国には私と同じような境遇の方が、それぞれ状況こそ多少の違いはあるにせよ大勢居られると思います。ですから、今日のこの平和は、当時の国民皆さんが、多大な犠牲を払って勝ち得た平和である事を忘れず、次世代に語り継がなくてはいけないと思います。

今、平和な我が家も孫達も各々結婚し、曾孫も居て、戦争なんて何時、何処であつたのかさえ知りません。年老いてしみじみ思い起こしますと、戦中、戦後があつと言う間の出来事のように感じられる昨今です。

思い出は遠くにありて

中区支部 白山 ユキ（妻）

戦没者 白山 正一

戦没地 横浜中央病院

昭和十九年、私は軍需工場で働いていた。戦争の報道は暗くなるばかりで、近いうちに空襲があるのではないかという恐ろしい噂が流れ始めた。そんなおり、職場で傷痕軍人と巡り合った。幼いころ両親と死別したという彼は寂しげな人だった。やがて空襲が始まり、不気味なサイレンが鳴ると、彼は必ず私のもとに駆け寄ってきて「自分は傷痕の身だから長く生きられない。だから、君の命は守ってあげる」と言つて、怯える私を強く抱きしめてくれた。その胸の温かさ、やさしさ、私は彼と出会えたことの幸せを感じていた。

空襲は身近になってきた。誰もが明日の命すら判らなくなり、そんな絶望的な空気の中で、私たちは短い間でも幸せになりたいと話し合つて、昭和十九年十二月結婚した。

その夜、東京大空襲があり、横浜にも警報が鳴り響いていた。集まってきたくれた人々と顔を合わせる間もなく、みんな外に駆け出して行つた。外に出ると、街は全くの暗闇で、ふと見上げる夜空には無数の星が宝石を散りばめたように美しく輝いていた。その夜の星の美しさは今も目

に残っている。

昭和二十年五月、横浜に大空襲があった。その朝は静かな夜明けだった。突然の空襲警報に私と母は防空壕に駆け込んだ。壕の上の家が燃えているとかで、きな臭い匂いとともに黒煙が壕の中に流れ込み、死ぬかもしれないという恐ろしさに皆無口になっていた。

やがて解除になり外に出ると、黒煙が渦を巻き風が吹きまわっていて、まるで夜のようなだった。一度の空襲で横浜は全滅となった。高台から見下ろした横浜の街は一面の焼け野原で、その恐ろしい光景とともに数えきれない人が傷つき亡くなったことを思うと、戦争というものの恐ろしさ残酷さに心の凍る思いで立ち尽くしていた。

次の日、お寺に遺体が運ばれている話を聞き、夫と伯父を探しに行った。そこで見た光景は全くの地獄絵だった。性別も判らぬほど黒こげになった遺体が重ねてあった。探す人々は涙すらなく無表情だった。その恐ろしい光景は今でも目に焼き付いている。やがて、戦争は多くの人に苦しみと辛い別れを残して終わった。

やっと平和が戻り、焼け跡に花も咲き始めた。我が家にも幸せが訪れて来た。娘が生まれ、夫の喜びは大変なものだった。楽しい日々が三年ほど続いた。しかし、案じていた夫の傷は癒えることなく、生きる喜びと幸せの思い出を残して三十三歳で戦病死となった。私は二十九歳、娘は三歳だった。覚悟していたとはいえ、別れは悲しいものだった。でも、辛いのは私だけでなく、戦争は人の一生に辛い悲しい思い出を残した。

駐留軍は戦争未亡人を優先的に雇ってくれるという話を聞いた兄嫁の計らいで、米軍基地で働

くことになった。身分は準公務員となり、給料が良く生活は安定した。職場の人々は若い未亡人に優しくしてくれて、働くことは苦にならなかった。私の母が娘を何不自由することもなく大切に育ててくれた。そんな母の存在は有難く、感謝の思いは限りなく今も忘れられない。

娘は成人して、浜松の人のもとに嫁いで行つた。思いがけず一人暮らしとなった私は寂しさと戸惑いがあった。その時、私は五十八歳。これからの人生、自分の好きなように生きて夫の分まで楽しんで生きることにした。

まず、三味線を二十数年習い、名取のお免状をいただき、今それが私の宝物になっている。学ぶことの楽しさに色々なことを学んだ。そして素敵なお友達が出来て、私の老後は決して寂しいものではなかった。今、靖国神社に多くの戦死者の中の一人として、夫の軍服姿の遺影を展示していただき、多くの人に見ていただけることの喜びに私は幸せを感じている。

今、都会の空に星がなくなつたけれど、多くの人々の犠牲の上に成り立つ、この平和で煌くネオンの明かりが消えることの無いことを心から願っています。

戦中・戦後と

足柄下郡支部 杉浦 徳子（妻）

戦没者 後田 操

戦没地 ビルマ

〈戦時中〉

台湾南部の海軍航空廠の近くに住んで居た折に台湾沖海戦が勃発、艦載機での爆撃や機銃掃射される日が何日も続いた。

やっと飛行機が去った後、我が家の前の通りを担架に乗せられ泣きわめきながら運ばれて行く人を大勢見ていたが、我が子に乳を飲まそうとしたが乳は出なかった。私自身相当恐かったのだろう。夜は何処から飛んでくるのか爆撃機が爆音を轟かせながら、そこら中に爆弾を落として行くという夜が続いた。

昼間は艦載機が飛んでくるので洗濯物は外へは干せないので子持ちには酷だった。飛行場にはスリ鉢状の穴が大きく一列二列と等間隔にあいていた。住民はサイレンが鳴ると隣組単位でサトウキビ畑に避難して一夜を明かす繰り返しだった。キビ畑では野ネズミの被害にあったりもした。市内では特攻隊員で出撃前夜らしき人達が、大暴れしているのを父が見てきたりもした。戦史に

も載らない小さな小さな戦だったのか？

〈敗戦後〉

いよいよ引き揚げが始まると、中国兵士が港で身体検査は勿論、化粧品の中まで調べられ、やつと乗船したら輸送船の底、床にムシロが敷かれた所へ毛布一枚（四月）で底に何十人も入れられ、窓が無いので熱気で水蒸気が天井に溜まり顔の上にばたばたと水滴が落ちてきた。食事は二回だったと思う。イモとイモヅルと大麦の雑煮もどきものオワンに一杯、体調を崩す人も出ていた。

四日目でやつと田辺港へ上陸、それぞれの郷里へ向かっていった列車の中では、兵士が軍服、軍靴で、引揚げ者の小さな手荷物が置かれた列車の床を軍靴で踏みつけて去って行った。

何年か経ったら子供と二人だけになっていた。子供を高校、大学と進学させたら、女手一つでそんな事が出来るのかと近所の茶の間で話題になっていると聞き驚いた。私は木の間に生まれたのではないと叫びたかった。

今は五人家族、夫の戦隊の戦隊史が四冊出たので見せたところ、逢った事もない見た事もない祖父へ想いを寄せてくれている。

時代が移り変わり、もうおばあちゃんの知恵の出番はなくなってきた。

やれやれと気づいたら私の腰は曲がってきている。この後は御身ご大切に生きよう。

艦載機 おむつも干せず 乳もです

背の子と泣や 母は二十なり はたち

としふれば 杖がたよりの ばばになり

会いたかった

南区支部 角田 フミ子（妻）

戦没者 角田 善治

戦没地 フィリピン

私は二十二歳、夫は二十歳で結婚して横浜で新婚生活を始めました。父と母も一緒に生活でした。子供も生まれ一番幸せなとき、一年半くらい経ったときに赤紙が来て横須賀の海軍に連れて行かれました。その時生後二ヶ月の我が子の写真を胸にしっかりと抱いて出征して行きました。家族も私も泣きました。夫は辛くて何も言えませんでした。海軍に行ってから夫が手紙や品物を送ってくれたそうですが、一度も届きませんでした。あとからそれが判りました。

面会に行きたかったのですが、軍の方から言われないと面会が出来ませんでした。

夫が行ってから三ヶ月経った頃、田舎がある人は強制疎開をさせられました。私達の疎開先は夫の実家がある島根県です。実家をお願いをして暫くお世話になっていましたが、いつまでも世話になっていられませんので、知人が紹介してくれた鳥取の渡村という所に家族で行くことになりました。

渡村に行きましたが、食べ物がなく困って、母親が物々交換をして食べ物を確保して生活して

いました。母親も皆んなの為に頑張ってくれました。私は母親が出ていたので家の仕事を全部していました。水が家の中ないので、井戸まで何回も汲みに行き大変でした。

その内に戦争が激しくなり、飛行機が何機も飛んで爆弾を落とされ、防空壕に逃げ、毎日が死ぬ思いでした。

広島に原爆が落ちた時、軍の方からこれが最後になるので面会に来てくださいと言われましたが、戦争が激しくて、父母と私は会いに行きたいけれど、小さい子供を連れてとても行ける状態ではありませんでした。私はどんなことをしても会いに行きたいと言ったのですが、皆なに引き止められました。途中で爆弾に当たって死ぬかも知れないし、そこまで辿りつけるか分からないからです。会いに行けないのがどんなに辛かったか、胸が張り裂けんばかりに泣くばかりでした。夫は私と子供、父母に会うのを待っていたかと思うと、今も話しをするたび涙が出ます。

夫は駆逐艦『樫』に乗っていました。信号兵だったそうです。陸軍の人が後で教えてくださったのですが、五十路先に陸が見えていたその目前で沈んだとの事でした。

戦争のために私も精神的な病気をしまして、長いこと何も出来ませんでした。何年もかかって少しずつ良くなって家の事も出来るようになりました。

今は家族と仲良く生活をしています。

戦争は絶対してはいけません。させてはいけなさと強く思います。

戦後六十五年を迎えて

秦野市支部 袖田 キク（妻）

戦没者 袖田 松次郎

戦没地 西部ニューギニア

戦争中は平和産業に勤めていたので、海軍軍属として徴用で藤沢飛行場建設の訓練を二、三ヶ月して十九年二月初めに南方方面に行きました。

内地に居る時、一度外泊で家に帰った時の事、包を開けてみると洗濯物には大きな虱、そして大根と人参の尻尾の小さいのが転がり出たので聞きました。畠を掘っていると出てくるのでお腹が空いて食べた残りを勿体ないので持ってきたと。面会に行った時、食糧事情の厳しいのは分かっていました。

東京大空襲で義兄一家は浅草で焼け、姉夫婦は南砂町で行方不明に、数日たって尋ねました。駅を出て吃驚、見渡す限り何一つ無く、人影もなく、すぐ引き帰しましたが私では何もしてあげる事も出来ず心残りです。

私達は南千住で電車の通っている土堤が近くにあり、そこへ登って避難したので命だけは助かりました。高い所から見渡す限り一面火の海、一夜を過ごしたのです。

怖いと言うか、恐ろしいと言うか生きた心地しませんでした。昼頃おにぎり一個配給がありました。その時、浅草の兄が尋ねてきましたが、お互いに身一つ、どうする事も出来ず男泣きして戻って行きました。

身の寄せ所もなく一日半掛かりで実家（大山）に辿り着きました。

疎開しても親も年をとっているので落ち着いて居られません。知り合いの旅館の手伝い等して働きました。

終戦になり、外地からボツボツ復員し始め、私も男兄弟四人南方、北支、満州、富士戦車学校、次々と無事に帰ってきましたが、なぜか喜んでもやれず陰に隠れて泣けました。

今日か、明日かと帰って来るのを待っている時、「唯今、帰ったよ」と笑って外に立っている夢を見ました。あの笑顔の姿が今も脳裏に焼きついていきます。

二十一年十一月二十五日公報の知らせがありました。横須賀復員局へ遺骨を父と二人で引き取りに行きました。

此の時、お葬式も簡単に済ませました。

何時までも落ち着いて居られません。姑は長男の所に、子供と位牌は実家に預けて私は戦前主人の勤めていた社長宅にお世話になって会社に勤めました。

長年働いていた経験者の中で三十過ぎて覚える仕事、女性の多い職場、楽しい事、嫌なこともあります。途中何度か辞めたいと思うこともありましたが、他に行く所もなく、生活の事を考えるとそれも出来ません。

月日の経つのは早いもので彼方、此方のお世話になり乍ら、四十九年十月会社を二十七年間無事に勤めて定年退職致しました。

秦野に家族で居住し、近くに墓地を求め、五十一年八月三十三回忌に、預けておいた骨壺、位牌を墓地に収め法要を済ませ、やっと肩の荷が降りた思いです。

早速、お寺（東光寺）さんの世話人を頼まれ、これも仏の供養と長い間お手伝いさせてもらいました。

私達これまで無事暮らす事が出来ましたのも、遺族会が出来、遺族年金、特別給付金等支給されたのも各県遺族会の役員の皆様のお陰と感謝致します。

最後の余生を無事に過ごしたいと願っています。

歸らぬ英霊に心からご冥福をお祈り致します。

終戦六十五周年を迎え

座間市支部 曾根 八千代（妻）

戦没者 曾根 敏夫

戦没地 中国・江西省

昭和二十年に入ると三月には東京大空襲、浅草本所深川の大都市は一瞬にして火の海と化し、犠牲者は数知れず内地の空襲も日毎に烈しくなり、八月六日広島、九日には長崎に恐ろしい原子爆弾が落とされ瞬く間に焼土と化した。大都市も真つ暗で人影もなく恐ろしい地に犠牲者が数知れず。最後の一兵まで戦う意気込みでおりましたが、天皇陛下は大御心を傷められ大決心賜り、これ以上国民を犠牲にできぬと八月十五日ラジオ報道で全国民に今日を以って敗戦の御心を伝えられました。無念の涙は溢れるばかりでどんな境遇になろうとも残されし者は働かなければ生きていかれません。敗戦国日本は崩れていくような日々でした。

暑い夏も過ぎ、十二月に入りますと彼所此所で復員を耳にするようになり、わが夫も来春あたりには復員してくれるのではと胸中に一縷の希望を抱きながら一生懸命働いて居りました所へ義父が慌ただしく迎えに来てすぐに家に帰るよう言った、何事だろうと不吉な予感が脳裏を駆け巡り家の中に入ると、仏壇に燈明が灯され線香まであげられているのです。義父は真剣な顔で「落

ち着いてしつかり聞きなさい。敏夫の戦死の公報が届いた」もう一度思い直し真実と知った時の驚き悲しみに胸も張り裂けんばかりで、二歳には程遠い、我が息子を抱きしめるとわっと泣き出してしまいました。これからどうなるのだろうと、長男の嫁の身ではこれ以上に頑張らねばと固く心に誓ったのです。息子が大きくなるまでは力の限り家族一丸となって働き、息子を立派に育てなければ夫に申し訳立たぬと己を励ましつつ九年過ぎました。

十一月の忙しい時、義父が脳溢血で突然倒れ一言もなく帰らぬ人となってしまったのです。悲惨な運命となり義父を何より頼みに過ごしてきた私達はどうなるのだろう、早速親族会議が開かれ、広い農地があるので弟が家を継ぎ私は勤めに出るよう決まったのです。この時ほど夫の存在がいかに大きかったか思い知らされ、張りつめていた気力が音を立てて崩れていくようでした。息子は五年生になっておりましたが、父の顔も愛も知らぬ息子の心情如何ばかり憐れでなりませんでした。父の分まで息子の将来を大切にしなければ国に命を捧げた夫に顔向けできぬと固く心に誓ったのです。

叔父の知り合いで国立病院にお勤めの方をお願いして臨時でもよかったらと、当てもない勤めに行くのだから致し方ありません。昭和三十年三月より働くことになりました。

早速、棟まで分けられ母子の貧しい生活が始まったのです。田舎のこと故、乗り物も不便だし、勤めとなると責任はあるし、雨の日嵐の日、思わぬ災難に出会った事も幾度か。息子も年毎に頼もしくなり、中学も友人に恵まれ卒業し高校も特別育英資金をお借りして健康で無事卒業。心配していた大学も何とか入学、学習塾も開きアルバイトをしながら学校に通い昭和四十年卒業して

ほっとしました。

ささやかな家も建ててくれ就職も公務員として県庁で働き始めました。二人で働き軌道に乗ってきました。四十七年には身内の仲人で世帯を持ち賑やかな家庭となりました。翌年には初孫も生まれ人並みの家庭を楽しませて頂いて居ります。

昭和五十三年三月で二十余年の勤めを辞め同年夫の三十三回忌も済ませ、平成五年秋五十回忌も無事近親者に供養して頂きほっとしました。息子も人並みになって夫もさぞ喜んでくれると思います。平成十四年に教育長を命ぜられ長い年月苦勞に耐えてきての慶びに私が短歌を詠みました。

父知らず 辛苦に耐えて 幾年瀬の 神に守られ 今日の慶び

終戦六十五年を迎えても私達日本人は忘れる事はありません。こんな恐ろしい戦争を二度と起こさないで下さい。これからの若者に二度と味あわせたくありません。核兵器のない明るい平和な世界が永久に続きますよう祈るのみでございます。

洋裁を修業し子供を育てる

中郡支部 高根 まさ子（妻）

戦没者 高根 金雄

戦没地 中国・河北省

本籍地が秋田なので、支那の部隊に入隊したままでした。一年半位して昭和十八年六月十五日夜、兵隊の主人が玄関から入ってきて、私が休んでいる床の中に入って来たのです。私は「まあ嬉しいわ」と思ったものですが夢でした。それから、半月程してから戦死の公報が入りました。「魂は帰るものなんだなあ」と、その時、夢のことを思いました。

そして、子供を養うためには、これから何をしたら良いかと、自分の進む道について考えました。そして、洋裁の道を選びました。

昭和二十一年の春のことです。服を縫う仕事に就くことが出来、四歳の子供を実家に預け、私もそこから毎日仕事場に通いました。先輩の傍らで、まとめと言う手縫い部分を手伝う様になり、一年位してようやく一人立ちとなり、本縫いをする様になり、ブラウス等の小物から始まり、徐々にスーツやコートを仕立てる様になってゆきました。

当時の有名女優の高峰三枝子さんのコートやスーツを仕立てさせていただきました。

「高根さんの縫った服は着易い」と高峰さんが言われたと、先生から誉められました。

忘れていましたが、私は「感じ物」が得意でした。後になりましたが、スーツ等に入れる肩台（パット）は綿を積んで作りますが、一般の縫子さんは綿の始末が乱暴で散らかしていましたので、私は暫らく休日を返上して出勤し、片付けを続けました。良いことばかりではなく失敗もありました。毛足の長いモッサと言う生地で外人のコートを仕立てた時のこと、お襟に毛皮のつくものです。仕上げの時に誤って毛皮が縮んでしまい「しまった」と思った時にはあとの祭りでした。それを剥がして直しの専門店さんをお願いして、元通りに直って来た時にはホッとしました。無事お客様には納品出来ました。

振り返ると、あれや、これやの出来事がありました。先生から認められて、助手にして頂きました。週二回東京のお店で仮縫いの手伝いをする様になりました。先生が右側半分の仮縫いを身体に合わせて針（ピン）を打つと、それを見て左側を同じ様に針を打つのが役割です。そうして先生の仕事を覚えて行くのです。次の日は、針を打直し、仮縫いを解いて、白チャコで訂正して、先生に見ていただき、先生が赤チャコで再訂正をなさいます。翌日は早出して、針跡の様に画いた白チャコと先生の直した赤チャコの箇所との違いを勉強するのです。この経験は貴重で良く勉強させてもらいました。

お仕事場には縫子さん七、八十名の方がおられました。私は十二年程勤めさせて頂き、独立させて貰いました。昭和三十三年から五十三年まで東京で働き、息子も大学を卒業することが出来ました。

その年、大磯の母の面倒を見させて頂くことになり、大磯に戻りました。母の愛を後で知りました。老人会の手伝いや遺族会のお世話にもなりました。

先日、テレビで「ゲゲゲの女房」の物語を見ておりました。現在があるのは、多くのお世話になった方々あつてのことと感謝されておられる。と言う様な物語でした。私の思いも全く同じで、それは、それは多くの方々、両親家族をはじめ、先生、先輩や同僚そして縫子さん、友人、お客様、その他、まだまだ沢山の人達に助けられ、支えられての人生だったことを改めて思い起こし感謝で一杯になりました。一人では何事も出来ません。皆々様のお陰でございます。有難うございました。

記念誌の原稿依頼を受けて、お陰様で、いろんなことを思い出させていただきました。最後に戦争のない世界平和の実現を、神かけてお祈り申し上げて終わります。

懐かしい人々

幸区支部 佃 馨(妻)

戦没者 佃 徹夫

戦没地 ペリリュー島

先の大戦が終って六十五年になります。

六十六年前の十一月二十四日は、主人達がパラオ諸島ペリリュー島で玉砕した日です。

この島では、主人をはじめ、私の想い出の人達があまりにも多く散華されています。

主人の所属していた、歩兵第二連隊が在った嫩江(北満の街)では沢山の将校や兵隊さん達とお付き合いがありました。特に、同郷の方々は私達の官舎を訪問されては、田舎の話に花を咲かせる楽しいひとときでした。今でも懐かしく思い出される方ばかりです。

昭和十九年三月、連隊が南方方面へと慌しく出動する時には、防諜上のこととは言え、知らないうちにお別れしてしまった皆様です。

一杯の思い出を残してくれました。特に宮川君は、我が家に遊びに来れば、子供をひと時も放さず遊んでくれ、肩車やお馬ハイハイになって部屋中を廻ってくれたものです。我が家の子供を通じて、未だ見ぬ抱いたこともない自分の子供に、想いを馳せていることを慮りその姿に胸の詰

まることも度々でした。

こうした一人一人の思い出がはつきりと昨日のことの様に蘇り懐かしさで一杯です。

私は、皆さんとお別れしてから、皆さんの三倍近く長生きして九十三歳になりました。

私も、近いうちには皆さんとお会いすることになることでしょう。その時には、皆さんとお会いして、楽しく懐かしかったあの頃の話をお土産にしたいと心掛けております。

主人共々、今暫くお待ち下さいね。

ただ一つ困ったことがあります。首相の靖国神社参拝と近隣諸国に対する謝罪の問題、或いは、関係者の高齢化と減少に伴い慰霊活動が弱体化の傾向にあり、次世代を託すべき若者の気持が英霊崇拜・戦没者慰霊から遠のきつつある事など、皆様にどう話したら良いでしょうか。と悩んでおります。

付記

攻撃側であつた連合軍ニミッツ提督がこの島に残した言葉を紹介します。

「諸国から訪れる旅人達よ、この島を守るために、日本軍がいかに勇敢に愛国心を持って戦い玉砕したかを伝えられよ」 米太平洋艦隊指令長官 C・Wニミッツ

（ニミッツ提督は、戦後、横須賀にあつた戦艦「三笠」保存のために私財を献げられたことでも知られています。）

遺族なればこそ

港南区支部 轟 アサ子（妻）

戦没者 轟 武廣

戦没地 沖縄県

あの戦争で、多くの若者が命を失い、その肉親や家族が過酷な運命にさらされました。私には想像もつかない苦しみを味わった方々が、私の回りにも沢山居ります。それから比べれば、私の体験などはまだまだ軽い方ですが、敢えて私の体験を記すことで、二度と忌まわしい戦争を起こさないこと、これ以上遺族を増やさないことを訴えたいと思います。

日本の敗色が濃厚になり始めた昭和十九年二月、私は新宿花園町の花園神社で結婚式を挙げました。十九歳でした。これが、甘い新婚生活の始まりではなく、苦難の始まりでした。

というのも、神社で式を済ませて、自宅に戻った私たちを待ち受けていたのは、二人の憲兵でした。新郎になったばかりの轟武廣のもとに憲兵が持ってきたのは、結婚祝いの品物ではなく、赤紙、召集令状でした。

式を挙げる前、彼は満州の奉天にいました。私との結婚が決まり、日本に帰った後、召集令状が奉天に届けられたのです。奉天にいないことが分かり、逃亡したものと見なされて、憲兵が後

を追いかけてきたというわけです。事情は理解してくれましたが、だからといって、召集を延期してくれるほど憲兵は甘くありません。直ちに奉天へ行けと言うことで、予定されていた披露宴会場は蜂の巣をつついたような騒ぎになりました。

すぐにタクシーを呼び、私も同乗して東京駅に向かいました。駅に着くまで約二十分間、車中、武廣は終始無言でした。

「どんなことをしても生きて帰ってきて…」と、やつとの思いで言葉をかけた私に、彼は「そうする」とだけ短く答えました。これが私と彼が交わした最初で最後の会話でした。当時、出征する兵士に対して「生きて帰れ」というのはタブーでした。でも、私にはそれしか言葉が浮かびませんでした。

車を降りた彼は、そそくさと切符を買い、そそくさと改札を通り、たちまち人混みの中にもまれ、折良く滑り込んできた列車に乗って、私の目の前から消えてしまいました。

これで二度と会うことはないだろうと予感しましたが、余りにも激しい環境の変化で、十九歳の小娘は、その変化について行くことが出来ず、頭の中は空っぽでした。

出征後、ほどなくして彼から一枚の葉書が届きました。葉書は沖縄からでした。彼からの便りはこれが最初で最後でした。その時は、沖縄が激戦地になるとは夢にも思いませんでした。

このころ、日本の敗色は、ようやく濃さを増していました。マリアナ沖海戦での海軍の敗北、サイパン島守備隊の玉砕、グアム、テナアンで全滅といった悲報が相次ぎ、そして、十一月二十四日、東京はB29による初の空襲を受けたのでした。幸い、私の住んでいた花園町は空襲を免

れましたが、強制疎開の対象となり、中野区へ、そして更には、千葉市へと移りました。私は養母と一緒に生活をしていましたが、この時はまだ、水準以上の生活を保っていました。

ところが、昭和二十年七月七日、千葉市はB29による大空襲を受け、命からがら逃げまどうのが精一杯で、ここで全てのものを失いました。大切に持っていた彼からの葉書もなくしてしまいました。

これからが私の苦難の始まりでした。自分一人ではなく、年老いた養母を抱えて食べていかなければならないのです。千葉から成東町、勝浦と転々とし、生きるために落花生やら、魚やらを売り歩く、いわゆる「闇屋」をやりました。このころになると「何も知らない悲劇の花嫁」から「恐れを知らない逞しい女」に成長していました。今の私の生命力は、この時に培われたものかも知れません。勝浦では漁業組合に就職しましたが、事務だけではなく、荒くれ男に混じって、櫓を漕いで和舟を操り、魚をトラックに積み込んだりと、力仕事でも男には負けない荒技に挑んでいました。

夫武廣の戦死の知らせは昭和二十一年になって私の手元に届きました。そこには「二十年六月二十四日、沖縄糸満市大里の壕の中で戦死」とありました。終戦前、沖縄で激戦があり、多くの日本人兵士が戦死したという話は聞いていたので、ある程度の覚悟は出来ていましたからショックはありませんでした。

挙式から五十二年の歳月が流れた平成八年九月、私は沖縄の糸満市を訪ね、彼が戦死したという壕の跡を訪れました。糸満市の空は青く澄み渡っていました。ここで、激しい戦争が繰り広げ

られたなんて想像も出来ないことでした。こんな平和なところで二度と戦争が繰り広げられることのないように、そして二度と悲劇の遺族を増やすことがないようにと祈りました。「そうする」と私の耳に彼の声が響いたように思えたのは、幻聴だったのでしょうか。

別れ

高津区支部 中村 志げ子（妻）

戦没者 中村 太郎

戦没地 旧満州

私達親子は引揚です。主人は満鉄社員でした。結婚の為昭和十五年内地に帰って来ました。翌昭和十六年の一月には二人で満州に渡りました。久し振りに帰国した一人息子との語らいも喜びも束の間で、此の日が両親との一生の別れとなりました。

私はまだ若かったので、両親の淋しさ悲しさを思いやる事が出来ませんでした。新潟から船に乗り、着いた処は北満の牡丹江でした。建物は立派ですが、町の風景や人種に目を見張りました。社宅に住みましたが暖房は決まった時間にしか入りません。数ヶ月後赤レンガの新しい社宅に住む事になりましたが、まだ水道も無く暖房はペチカを自分で焚きます。水は満人に運んでもらいました。言葉も分からず「謝謝」有難うがやつとです。

冬になり雪も多く寒さが厳しくなった十一月六日主人が、お産婆さんチヤムスを呼びに行ってくれ長女が誕生しました。やがて春になり花が咲き始めました。其の後佳木斯に移りました。十八年五月

に流行した肺炎のため長女が病院で亡くなりました。お友達も出来たのに、父の膝の上で絵本を見ていた二人の姿を思い出します。主人は出張中だったので社宅の方々にお世話になりました。月日も過ぎ十八年七月長男が誕生しました。主人は出張で子供の名前は八紘一字の中の二字を電報でよこしました。

二十年には錦西県コロ島に移りました。海に見える美しい処です。社宅の前は花や野菜も少し出来る処でした。五月に入り久し振りに主人が帰ってきました。親しくしている堤さん一家と揃って公園に遊びに行き楽しい一時を過ごしました。

然し、家に帰って暫くして思いも掛けず召集令状を受け取りました。今迄の楽しさも一変して立ちすくみました。それまで防空壕に入っただけでした。戦争は増々激しくなってきたのです。其夜主人は遺書を書いていました。

最後の日が来ました。当日私は息子を負ふいコロ島から出る列車から見える所に立って主人を見送りました。主人はきつと車窓から二人の姿を見てくれたと思います。

敗戦が確定し情勢が悪くなり社宅にも敵兵が一軒毎に物色に来るようになりました。我が家にも二人組で一人は銃を向けて入って来ました。私は子供を負ぶって「オデュービン」私は病氣と云ったら物色だけで出て行きました。社宅の人は全員無事でした。

やがて待ちに待った引揚が始まり、私は長女の位牌を入れたリュックサック一つ背負い、息子は水筒を下げ佐世保港へ無事に帰国しました。下車駅に主人の父が迎えに来てくれました。

昭和二十一年十二月野毛の援護局へ行った時、戦友から「確認の甲」と主人の戦死が届け出し

て有りました。出征からたった三カ月の昭和二十年八月十三日の戦死でした。公報は昭和二十三年十二月に届きました。国の為尊い命を捧げた方々に感謝致しましょう。

終戦八年後

港南区支部 橋本 綾子（妻）

戦没者 橋本 範雄

戦没地 ソロモン諸島

夫は横須賀海軍航空隊に勤務していましたが、戦争が始まったのは南鳥島へ出張中、十二月末に一度は帰りましたが、三月のはじめラバウルへ転勤になりました。

昭和十七年、子供が生まれてやっと六ヶ月の時でした。男子の出生を知らすと、ものすごく大喜びしてくれ「此の子は自分と同じ『軍人にする様に』」との遺書があります。そして毎日毎日あっちこちと攻撃に行き、機は一式陸攻（皇紀二千六百一年に出来た飛行機）其の搭乗整備員として八名乗りでした。そして、十七年八月七日第一次ソロモン海戦の前日、ガダルカナル方面に出たの帰り途ヤップ島の近くまで来た時、もう一方、キズついて帰隊に遅れぎみでヨタヨタとしていた時、敵のグラマン二機にはさみうちされ、先ず敵機、次は夫の機、次は敵機と、三機共に落ち、大きな三つの波紋が広がったと、共に行った友人が無事で帰り、其の様子を本にしてくれ、今は家宝と思い大切にしています。そして八月からの俸給はぱったりとまり変だとは思っていました。昭和十八年二月二十二日に戦死の公報が入りました。其の時は、不思議と一滴のな

みだも出ませんでした。が体中に重い重いオモリでも付けられたかの様に座り込んでしまいました。

さあ其の後は人目をさけて、夜な夜などれ程泣き明かした事でしょうか、自分が軍人の妻として充分な覚悟の元に結婚したのに……遺骨が帰りましたのは十八年の四月十三日、丁度其の日、たった一人の兄が出征し、女の子二人と妻を残し、やはり帰らぬ人になりました。

母がよく「あつちも、こつちも若後家ばかりで困ったものだ」と云っていました。当時の親は、みんな子供達に先だたれてどんな思いだったのでしょうか。自分の子供でありながら大神に捧げた人と思い暮らさなければならぬ時でした。

そして、本人が行っていた小学校でとつても立派な村葬をしていただけ、当時のお金で三千元という大金を頂きました。三分の一は夫の母に受け取って頂きました。

空襲がはげしくなり、防空壕に行く時は真つ先に夫の位牌を身につけて、夜昼となしに逃げたものです。仏壇も買えず、昔のみかん箱に位牌を入れてお供え物していました。

終戦の年、六月いっぱいに住んでいました野島町は軍の命令で移転になり、住む所がなくあつちこつちと間借りの生活、「夫亡き、家なき、職なし、金もなければ死んではいけない」そんな時でした、息子は四才になり「アメリカさんがきて、みんなころされてしまうんだね」と、その言葉には何とも返事が出来ませんでした。明るい所での夕食が出来る、それはうれしいのですが大きな不安の毎日でした。

何とか生きのびながら、終戦と同時にお金の入る道はなく、それから私の戦争が始まりました。

た。

そして、ようやく昭和二十五年の末に、私が会社へ行く事になり、やれやれ、でも高等教育を受けていない自分には大したお給料はなく、それはそれは困りはてました。

終戦の翌年、金沢文庫へ引越す事になり、ここの近所の人達に、本当によくして頂きお隣の奥さんからは、いつも借金ばかりしての生活で、でも、とつてもなぐさめられ、はげまされて大助かりしました。勤めながら、帰ると夜は手内職、仕事の都合で真夜中の二時になった時には、大つぶのなみだが手の甲にぼたりぼたりと落ちて困りました。

ここは大変のどかな所で、ホタル狩り、蛙が鳴き、春先にはノビルがよく出て、息子は真白いうでをまくつてはよくノビルを根から取ってきて、そして今日は「オカズがないし、どうしよう」と云った時「オブー（ただのお湯かけご飯の事）でいいよ。」いかに貧乏暮らしになれていたかと受け取れます。

やがて息子も働く様になり、始めて貯金通帳を手にし、うれしかった時の事、郵便局からの帰り道、自分の顔がほころぶのがよくわかるのです。

息子の高校時代には、育英資金を使わせて頂き大変助かりました。

今にして思えば天と地の違い、曾孫は二人すくすくと育ち何の苦労はなく遊びほうけています、こんなに楽しいのかしらとよく思いながら、でも昔は大変だったから其のごほうびを頂いているんだとも思っています。

私亡き後は、ご先祖様を大切にすることを大いに若い者に望みます。

私は遊びながらも靖国神社参拝とお墓参りにはよく行っています。

(ずっとあの人の妻であつた事、誇りに思っています。)

身は南海に果て散れど 我が心に夫の灯消えず

宮司の読む夫の名達し せみしぐれ靖国の宮

(夫はお国のためにつくしたのですから、私も何か人様のお役に立てればと、献体登録済みです。)

終戦六十五年目を迎えて想うこと

中区支部 府川 みつ枝（妻）

戦没者 府川 茂治

戦没地 横須賀市

六十五年目の終戦の日を迎え、過ぎし日を想い感無量でした。私は学校を卒業した年の早い結婚でした。二ヶ月目に夫に召集令状 外地スマトラ島へ派遣されました。

気候、環境等総て違う南国での軍隊生活 病に侵され内地に送還されました。そして戦病死となりました。

昭和二十年五月二十九日横浜大空襲、これも忘れられない日です。いつもと同じ穏やかな朝を迎えました。午前八時すぎ警戒警報、すぐに空襲警報そして敵機来襲、爆弾投下と一瞬にして焼け野原の横浜と化したのです。敵機が去った後、怪我・火傷を負った人が道端に置いてある防火用水を被りかぶりの移動です。

婚家、実家、親戚と全部焼けました。住む家がありません。実家が山形に疎開、私も幼子を背負い手にはおむつだけの荷物で行きました。行き先は楯岡町の隣村、今では都会と変わらぬ市ですが当時は小さな町でした。

働かなくてはなりません。子持ちの私など雇ってくれる所ありません。やっと就職した会社は倒産、何か家で働ける仕事をお願い洋裁学校に行きました。その頃の学校は山形市内にしかありません。片道二時間半往復五時間かけての通学でした。冬になると雪の多い所です。国道でもバスが不通になったり汽車の二、三時間の遅れも普通でした。雪の中、滑ったり、転んだりの通学でした。学校は自由教材で他の人の二倍三倍と勉強しました。先生方も協力して下さりました。一通り学び卒業、やはり横浜が忘れられません。戻って来たこの北方町は初めての町です。六畳一間にミシン、裁台を置いての生活です。子供もここからの通学です。この頃は、地域により学力、環境、言葉の違いがありました。馴染むまで大変だったと思います。

近所の方も朝早くから夜遅く迄ミシンをふむ私の姿をみて一人、二人と掃除、洗濯と手伝いに来て呉れました。勿論、掃除機も洗濯機もない時代です。皆手作業で、何の見返りもない好意です。隣は何をする人ぞと云う今の時代では考えられません。思いおこせば私一人で仕事をし、子供を一人前にしたわけではありません。皆さんの御力添えがあつての事と深く感謝をしています。一人の息子でしたが今は孫、曾孫と増えました。表に出れば沢山のおしゃべりが出来るお友達に恵まれ楽しい日々を過ごしています。

今は幸せです。感謝しています。これからは家族に迷惑をなるべくかけない様残り少ない余生を楽しく送りたいと思います。

忘れられない

南区支部 星 ヤスヨ（妻）

戦没者 星 徳衛

戦没地 南方アドミラルティ島

主人は、昭和十八年八月三十日暑い最中に出征しました。名誉の召集令状とか言われても、家族の心は穏やかではなく、顔で笑って心で泣いて見送ったものです。その時、私のお腹には新しい命が宿っております。主人の兄も、六年前からラバウルの最前線に従軍しており、主人は出発に際して「兄さんに逢いたくないあ」と一言ポツリと言ったことが、今でも私の心に強く残っております。「二軒から二人も出征させられるなんて・・・」と言う思いで一杯でした。働き盛りの男手のない、女、子供、老人の留守宅をしっかり守らねばと義姉と二人心を合わせて頑張る苦労の日々でした。幾つもの山林を持つていながら、義父一人ではどうにもならず、時々、山仕事を他人に頼んで木を切り出してもらい生活をしておりました。義姉と私も色々な下働き等をして生活の糧としておりました。新潟の冬は大雪が降ると屋根の雪降ろしは欠かすことは出来ません。屋根に上がると怖くて切なく、一段と高い土蔵の屋根では足もすくむほどで命がけの作業でした。日本の勝利を信じ、主人や義兄の帰る日を信じて待つのみでした。

しかし、二十年八月十五日、日本は敗戦で終戦を迎えることになります。口惜し涙と悲しく無念の涙が止まりませんでした。アメリカ兵が女、子供を殺すとかいんなデマが飛び交いました。私は、唯、主人が無事に帰還することだけを祈り案じる日々でした。

しかし、八月三十日には、主人の戦死の公報を受け取りました。遺骨を受領に行くと、骨箱には、名前を書いた紙切れと爪だけが入っており、ただただ、骨箱を抱き涙が溢れるばかりでした。戦没者の家族は我家だけではない、と自分を自分で励まし頑張ろうと誓いました。義姉と共に、義兄の帰還を待っているところに、義兄が喜びの帰還をしました。

長い間の過酷な熱帯地域の食糧不足の戦場での従軍のため、栄養失調で痩せ細り骨と皮だけに見えるも無残な姿での帰還でした。その上、マラリアに感染しており、高熱にうなされ痙攣を起こすことも度々で、働くどころではありません。戦中にも勝る苦難の生活が長く続きました。

義父は、息子二人のうち、一人は戦死し、帰還した息子も、その変わり果てた姿に、心痛も重なり二年後に帰らぬ人となりました。その後の苦労は言い尽くせぬ程ありますが、二十八年間、義母と暮らして、その最後を看取りました。九十三歳でした。

昭和二十八年から公務扶助料を頂ける様になった時は本当に有り難く助かりました。

今、振り返ると、全てに耐えて乗り越えて来たことを思う時、平安の中に、息子の家族達と共に、横浜の地にて幸せに暮らせることを心より感謝しております。

世界には、今でも戦禍に苦しんでいる人々のいることを思う時、平和の訪れの日も早いことを祈ると共に、日本は二度と戦争は起こさない、参加しないことを固く誓い守ることを願ってや

みません。

今は幸せ

逗子市支部 松井 ヨシエ（妻）

戦没者 松井 定雄

戦没地 フィリピン

昭和十七年二月十一日、昔では紀元節、縁あつて急に結婚、戦争が日増しにひどくなり、電気技師として軍関係の仕事にて夜勤が多くほとんど休みがなく、朝帰りが多く、勿論今の様に好きな旅行や趣味もできず、唯働くのみの時代でした。そんな時、仕事関係で急に外地に派遣され、勿論何処へ行くか飛行機の都合でのみと急に旅立ちました。それが別れの始まり、それから一ヶ月余り、台湾より葉書が一枚来たのみで住所もなく、名前だけで唯々台湾で「妹の主人に会った、それも初対面、義理の弟に会った元気でした」と余計な事は何も書いてなく（結局この人も戦死とのこと）

「南方方面で戦死」の知らせが届きました。呉や横須賀復員局で聞いたがわからず、「十九年マニラで戦死」と呉の復員局より型だけの通知が戦死の報告でした。それもこちらが催促して公報を受けた訳です。

軍人も軍属もなく、マニラで最後の総攻撃にて玉砕、その日を命日としております。

空襲の激しいときなど、二歳半のこどもは真夜中でもサイレンの音で目を覚まし泣かずに「オ
ンブ、オンブ」と背中に廻り、オンブして暗い夜道の踏み切りを渡り、山の根に自分たちで掘っ
た防空壕に隣り組の人達と一緒に助け合って夜を明かした事か・・・。

主人の葬儀を終えてから姑は「貴方はまだ若いから再婚を」と言われましたが、「子供は絶対
置いて行って下さい、私共としては、唯一人の跡取りの息子の子供だから」と言われましたが子
供をおいて、私にはそれができず働くことを決め、現在にいたりました。九十歳にあと数ヶ月、
苦しいこと、悲しいことも数々ありましたが、今となりますと、健康で子供も人並みに育ってい
ます。

今は平穏な日々にも恵まれ、私はまだ幸せな方と感謝して生きています。

苦難の多き十年

足柄上郡支部 松下 みわ（妻）

戦没者 松下 新作

戦没地 沖縄県

昭和十九年七月十日 長女が生まれました。

二歳になる長男と四人家族。無事なることを夫はとても喜んで居りました。喜びも束の間産後七日を過ぎた夜、夫は召集令状を受け取りましたが産後の浅い私を心配して茫然と立っていました。入隊の日まで三日間です。川崎の部隊でしたが毎日忙しく、残る家族を心配しながら、夫は入隊しました。面会できる日に二、三度子供を見せに行きました。

出征して四ヶ月過ぎた十一月外出休暇で帰ってきました。夫は体を休ませる事もなく、今後の家族を心配して先ず私の実家に行き、子供が小さいので一年間預かってほしいとお願いしてきたので承知してくれと言う。二年目から夫の実家で見てくださいと言ってきたからそのようにしてくださいました。十二月に私の実家に移りました。食糧難で非農家の生活は大変です。米や主食は配給ですが遅配欠配の中、父には苦勞をかけなくてはなりません。都会から買出しの人が来て、米や主食など高値になり、地元の人には売りにくいと言われて買えなくなりました。父は野山を

開墾して芋などを作り食の足しにしました。

春になり友人の誘いから子供を遊ばせ乍らの仕事が出来るようになりました。

川原で小石と砂の分別作業です。日除けを造り遊び場を作り、同じ境遇の人の集まりで楽しくもありました。冬は寒風が強くと砂ほこりで作業が出来ません。仕方なく物差しの目盛などを作る作業に子供連れで行きました。そして一年が過ぎた頃夫の実家に移りました。

食料の心配は無いけれど義弟妹に気使う事は多く辛かった。土地の習慣は早起きすること、洗濯も冬は干した物が凍るほど、朝食の支度、そして山に行く事が日課でした。

子供の面倒は何時見るのと心の中で呟いた。山車を担ぎ舅の後について山頂まで登り、牛の餌の草刈りです。車に山盛り積んで十二時には家に着くようにした。昼休み過ぎて近くの畑で草取り夕食の支度片付け、洗濯物の補修、灯火管制の下です。床に入るのは十二時過ぎです。義弟妹も病気で亡くなり家の中は淋しくなりました。

昭和二十二年夫は沖縄本島にて戦死の公報が入りました。無事の帰りを待ち侘びて居りました。今後の生活を考え、涙も出ませんでした。床に入れば枕をぬらしました。田んぼや畑の仕事を片付けてから外に日雇いに行く友達も出来て楽しみもあつた。春まで重労働が続きます。子供に何を買って上げようかと喜びでした。

年明けて二月頃、私は体調をくずし高熱の日が続きこの家では三日も寝ることは出来ない。実家の父に話して医師の診察を受けました。結果肋膜炎とのことでした。二年程ゆっくり休みなさいと言われました。父に頼むしかないと思いましたが意外にも断られました。食生活が困苦

の中三人を見る事は出来ない、向こうの家は保有米もあり、みかん、玉子もある、子供はそのほうが幸せだよ。おまえ一人であればいいと言ってくれました。考えても仕方なく一人で休ませてもらいました。其の日は帰って義母に全てを話して子供を見てもらうことになりました。六歳、四歳の子供は母親と別居になったらと心配でなりません。早く治して子供と暮らしたい思いで一杯でした。戦争を憎みました。夫を帰せと心の中で叫びました。思うままにならない日々でしたが、薬の効果もあり微熱になり始め気持ちが少し落ち着きました。

舅の弟さんが復員され、家の事情を知って早速移って来ることになった。三人家族で合わせて七人になりました。年は同じの子供たち、仲良くできるはずもない。心配が増すばかりです。深夜五十分も歩いて様子を見に行ったことが何度もありました。連れ出すことも出来ず高まる思いを静めて早く治して子供を迎えたい。体を休めることにしました。実家の母も昭和十二年に亡くなっていますので父の手伝いも少し始めました。

仕事をさがし、家をさがしているうちに四年が過ぎました。ある会社に勤めることになり家が見つかればと思っていましたところ、夫の友人の皆さんが材料を集めて、実家の敷地内に小さな家を造って下さり、本当に有難かった。

早速子供との生活が始まりました。子供達も成長し、会社に勤めることになり母子三人で働く事は喜びでした。三十五年に宅地百坪を買い四十年に新築を致しました。私は六十歳で定年となり子供二人も結婚致しました。先輩の方のお骨折りで公務扶助料も受給できました。「苦あれば楽あり」と言いますが、毎日安心して暮らして居ります。

昨年、家族で沖縄平和の礎に参つて来ました。夫の名もあり涙のひと時。
日本国や世界が平和でありますよう祈ります。

親子三人生き抜いて

南区支部 宮森 育子（妻）

戦没者 宮森 正夫

戦没地 セレベス島沖

主人の最期は、駆逐艦「帆風」の最後と一緒に。昭和十九年七月六日九時六分、ダバオ発カウ（ハルマヘラ島）に向け船団護衛及び輸送任務に従事中、セレベス海にて敵潜水艦の雷撃を受けて瞬時に沈没、乗員八九名と陸軍将兵多数の方が戦死。主人は機関長附で機関室に向かう途中に魚雷を受けた艦が左傾し二分余りで沈没した由。戦死後三十年程経ってから生存者の集いに参加して、轟沈の詳細を聞かせてもらい受け止めることが出来た。

その時から、「主人は必ず帰る」の気持が変わった。子供二人を何としても育てなければならぬ。幸いに実家の母が健在で長女がこのまま三歳になる迄は、ここにいて親と姉の世話になっても良いことになり実家に落ち着いた。しかし、一番頼りの姉が昭和二十三年九月九日過労のため病死。今度は私が収入の道を得なければならなくなり、横須賀市教育委員会に相談の結果、昭和二十四年より小学校勤務となった。長い間家庭内だけで暮らしていて環境の変化に戸惑うばかりで時間の有効利用もままならぬことばかりでした。

長男の小学校の入学式には大学生の実弟に保護者代理で付き添ってもらったものの、長女の入学式には、私も弟も仕事のため、小学三年の長男が保護者代理として付き添い、兄妹二人が手を繋いで入学式に臨んだことは一生忘れることはできない。子育ての中でお金に困ったことがあった。その時、お二人の方に助けられて、今があることを記したい。

長男が小学二年の時、腹部の激痛を訴え、立つことも寝ることも出来ない、足を伸ばしてタンズに寄り掛からせると少しは楽の様だった。翌朝大至急で市立病院に行くと即入院となり、診断結果は寄生虫によるものとのことで、一週間ほど入院して寄生虫を除去すれば治癒するとのことでしたが、私は仕事で付き添うことも出来ず、治療も苦しく不安であつたらうと息子には謝るのみであつた。

元気に歩ける様に回復して安堵したものの、病院の支払いの用意はない。仕事の帰りに親戚へ借用のお願いに伺ったが、「貸す金はない」と一切取り合つて貰えず、土間にあつた里芋を袋に入れて渡された。一刻も早く病院に行かなければと思うが電車賃がない。電車道を歩いてでも長男のところに行きたいが遠く一晩は掛かるし危険である。そうだ、この里芋で電車賃を作ろうと、駅周辺のお店を一軒一軒お願いに歩いた。夕食の卓を囲んでいる時間であるが、病院へ行かねばとの一念でお店のガラス戸を開けてひたすらお願いした。六軒目の家でやっと袋の里芋を買っていただいた。涙も拭かずに電車に乗り、周囲の目も構わず泣き続けた。「貸す金はない」と突き放されたことで、お願いすれば貸して貰えたと、返金の目処もないのにお願いした自分の甘さを受け止めなければならなかった。

面会時間ぎりぎりに病室に入ることが出来たが、長男の退院は目前である。翌日、勤務先の友人に事情を話してお願いしたところ、用立てて下さり、無事に長男を連れて退院することが出来ました。本当に助かり有難く、しかも、「返さなくともいい」とまで言って下さいました。直ぐにお返しすることは出来ませんでした。六十歳で定年退職金をいただきましたが、大切なお友達の心を自分の生きる力とすべく、敢えてお返しはしなかった。

現在八十六歳を過ぎようとしている。助けて頂いた何分の一にも満たないだろうが、嫁と娘と三人でお礼の気持ちで伺いたいと思っている。用立てることをきちんと拒否してくれた親戚の思いやり、私はそれ以後、生活費の借用はしていないが、一回だけ助けを求めたことがある。長女が大学受験で二校に合格した時のこと、最初の発表校は直ぐに入学金を支払わなければならないために、二校目の入学金が不足となった。本人は出来れば二校目に入学したい希望を持っていたため、使用目的と返金時期を明確にしてお願いしたところ直ぐに用立てて下さった。

私は、両面からの温情に接し、家族三人が生きて来られた幸せに改めて感謝の念で一杯であることをお伝えしたい。

長男は父親に抱っこされた写真が二枚程あるが、長女は出征後の誕生のために父親を写真でしか知らない。有難いことに、長男が中学二年、長女が小学五年まで実家に同居していたので鍵っ子にならずに成長出来た。現在の住居も主人の実兄と長男とが話し合いで決めて頂いた土地である。

平成六年、主人の五十年忌法要を営んだ。親戚、友人、知人等大勢の方々にご供養していただ

いた。残念なことは、長男が癌で早逝して、今夏七回忌法要を済ませたことである。

昨秋、娘と二人で厚生労働省主催の北ボルネオ慰霊巡拝団に参加することが出来た。セレベス島に近い北東方サング島の漁港突堤に祭壇を設けていただき、参加者全員で当地域方面での戦没者へのご冥福をお祈りした。

「ボルネオ戦没者の碑」の前の慰霊祭では、参加者を代表して「追悼のことば」を述べる事が出来た。県知事からの献花の写真も帰国後に感謝の気持とともにお届けした。

あなたのそばへ

南区支部 村上まり子（妻）

戦没者 村上 松世

戦没地 南東方面海上

今年の八月十五日は六十五回目の終戦記念日でした。想えば随分長生きしたものだと思っています。玉音放送が流れて戦争の終結を知り、何も判らぬ失意の中、ただただ親子四人無事に生きてこられたことに感謝です。

私は、昭和十二年職業軍人だった夫と結婚して、三人の子供に恵まれました。親子五人での水入らずの生活は出来ませんでした。

昭和十八年十二月八日に南東方面海上にて戦死したとの知らせが、身重の私の許に届きました。翌十九年一月に灯火管制の厳しい中、親兄弟家族の手助けで、無事三人目を出産することができました。この時生まれた、父の顔も知らぬ娘も六十六歳となりました。

今は、その娘の家族と一緒に暮らしております。戦争中は、子供も小さく家の中で世間知らずのまま暮らしておりました。新聞の報道も、日本は必ず勝つ、日本は強いとの報道ばかりで、現実はどうな状況かなんて判らぬままに、報道を信じて過ごしておりました。

夫は海軍だった為に、日本各地の軍港のある地域への出張や移動等で留守がちであり、軍の秘密事項は口外することは出来ず、辛い立場であつたろうと思っています。そして、出征の時さえも家族には知らされず、いつ出征したのかさえ判らないままでした。そして間もなく、戦死の公報が届き、夫の最期、無念の死を受け入れざるを得ないことになりました。玉音放送が流れ終戦となり、徐々に復興が始まりました。私達幼子を抱えた母子家庭は途方に呉れるばかりの日々でした。幸いに、兄達が元気だったので何かと助けてもらい、飢え死にすることもなく生きてこられました。多くの人や物も失い、人の心さえも荒んだ傷だらけの貧しく惨めな日本でした。

平成六年、夫の五十回忌法要を催すことになり、戦没地の南東方方面が八丈島沖辺りに当たるとのこと、八丈島にて、私共家族と共に、夫の姉、私の弟夫婦の十人にて般若心経を唱えて供養しました。心が穏やかになってゆき、何かの重荷とか、責任とか、世間の目とか、全てから開放されて、物事を前向きに捉えられる様になりました。つらいのは自分だけでは無いんだ、世間には私以上に辛い人達が沢山いるのだ、と、そう言うことに想いを馳せる心境の変化が現れました。

お陰様にて健康に恵まれ、八人兄弟姉妹唯一人の生存者となりました。今は、ただ、夫や父母兄弟姉妹の元に逝くことだけです。早く迎えに来て下さい。と毎日祈っています。

世の中には、まだまだ戦争をしている国があります。戦争は、憎しみや絶望とか、不信感等を植え付けるだけ、人間形成には何の役にも立たず、自然破壊をもたらすだけです。

日本は、二度と戦争をしないと法律で守られている訳ですから、恒久平和を貫き通して欲しい

と切に願っております。

私は、もう靖国神社にも参拝出来ぬほど、体が弱って来ましたが、子供達が私の分まで硫黄島等への参拝に参加し戦没者の方々の供養をしてくれているのが何よりの救いです。

英霊の方々が何よりも願っておられることは、残された家族の末永い安寧であり、祖国の安泰を信じて国難に殉じられたことを忘れず、英霊を感わすことのない日本国の確立と、世界平和のために見守り続けて下さい。と祈るのみです。

戦時中の思い出

綾瀬市支部 山口 正子（妻）

戦没者 山口 保

戦没地 沖縄県

昭和十七年春の素晴らしい晴れの日でした。横須賀に住んでいた叔父さんが急に来られ「海老名に来たから迎えに来た。」との事、私は両親から何も聞いておらず、皆仕事で私は仕方がなく、叔父に連れられ早川から海老名迄一時間以上かけて先方に着き、夫となる人と会いました。

突然の事だったので気持ちも揺らいでいた。しかし、話がどんどん進んでいって結婚式となつてしまった。戦時中なので花嫁衣装の上からモンペをはき、防空頭巾を被って、どのようにして、横須賀の地へ行ったか覚えがない。両親始め近所の人達が配給物を持ち寄りお赤飯や鯛や野菜で作った海苔巻と有り難い事でした。空襲警報が鳴ると暗幕をした薄暗い式の最中にも真っ白な晒しを半分に折り、千人針の作り回しがされました。それは出征する兵隊さんの弾除けのお守りとして渡されました。今日も、明日も分からない空襲の中でも防空壕掘りは続き、男も女も年若い人達ばかりでした。

昭和十九年四月十六日横須賀海軍病院で無事に女の子を出産した。ようやく工廠の近くに家が

見つかり親子三人での生活が始まろうとしていた矢先、夫が帰宅する成りだまって私の手に召集令状を渡した。夫と私は唯顔を見合わせ声も出ず、私は子供を背負ったまま二人は座り込んでしまいました。三人での生活は二十四時間も有りませんでした。翌日には皆に送られ溝ノ口の連隊に入隊しました。

更に次の日、母子強制疎開の通知があり、実家しか行く所も無く早川に疎開。実家は病弱な母と父と妹、更に東京大空襲で姉も帰ってきて、三世帯での大変な生活と成りました。農協迄配給を取りに行くにも私は子供を背負い自転車で姉の分も、長い列に並びさつま芋、小麦粉、大豆など二人分合せても僅かな量でした。空襲警報と同時に戦闘機が低空飛行してくると、人が見える程だったので畑仕事も出来ず苦しい日々が続きました。

二十年八月三日、夫戦死の知らせが届き海老名の海源寺へ遺骨を取りに行き、近所総出で供養して戴きましたが、本当に悪夢を見ている様な毎日でした。八月十五日終戦の玉音放送を聴きながら言葉もなく、隣組の皆さんと声を出して泣きました。厚木基地近くに住む私達に「アメリカ兵に女、子供が殺されるから男の姿になれ」とか色々な噂が飛び交い不安な毎日が続いた。

日本全国で多くの遺児の出る中、母子会が「母子福祉協議会」として立ちあがった。国会へ陳情も代表の一人として子供を背負い参加した。正月や祭り事のある時はリヤカーに子供を乗せお惣菜を売って会費を作った。全国未亡人の歌として「生き抜く白百合」を歌いながら涙する日々……。

昭和三十五年十一月二十九日秩父宮妃殿下より御歌賜る「荒き世の風に絶えつつ手ひとつに

子を育て行く母に幸あれ」と妃殿下を身近に感じ皆で咽び泣きました。

現在は遺族会の方々のお世話になり慰霊堂に参拝し同志の方々との語らいに穏やかな日々を過ごしております。今、戦没者の妻会員は十二名ですが強い心で生き抜いています。

日本の礎となられた英霊に感謝し、戦争を知らない若い人達に戦争の悲惨さや苦しみを語り継ぎ、二度と戦争を起こしてはならない。参加してもならない事を願っております。

父への想い

横須賀市支部 青木 康浩（子）

戦没者 青木 市郎

戦没地 旧満州

私の父は昭和十六年七月に旧満州牡丹江（現中国東北地方）に出征、昭和二十年八月十日現地にて戦死となっています。父が亡くなり六十五年の歳月が経ちましたが父への想いは正直あまりありません。

父が出征して五カ月後に五人兄弟の末っ子として私が誕生し、父に抱かれることも無く子供の頃は父というものをよく分かりませんでした。

私の家は青果商で主に軍に納めていたそうで母は私が生まれる寸前まで家の仕事をしていたそうです。終戦に近い頃には使用人も殆んど戦地に出征して大変だった様です。

子供の頃はどうして自分には父親がいらないのだろうと思いましたが、叔父や叔母たちがなぜか私を可愛がってくれたことが後になり分かりました。

父が昭和二十年の戦死でも十年後の昭和三十年五月一日付けで県知事より死亡告知書を母は受け取り、それまでは留守家族として父は生きていたからです。そして、葬儀は同年五月二十七

日に行われ私は当時中学二年の時に初めて父が亡くなったのかと思いました。それまでは父は生きていたものと母も兄弟も親戚も皆同じ思いでいたのでしょう。

私が大人になり家庭を持ち、子供をもったとき父親は生きていたら子供たちにどう接していたか正直分かりません。それから父のことを思うことがたまにありましたがその後、母が父の五十回忌までは元気で生きていなければいつも云っておりしました。法事の時に父はどんな人であったのか子供や兄弟に知ってもらおうと冊子にして残したい気持ちで母に聞いたりしました。父は筆まめで戦地から激戦になるまではよく便りをくれました。ハガキには、いつもお店のこと家族のことを心配しながら自分は元気でいるので心配はいらないと書いてありました。私の大きくなることも写真でしか見ることができなかったことを無念に思ったことでしょう。沢山の便りの中にたった一通、三つ折りの封書がありました、封書の中には山並みの絵が印刷してあり、其の下に日曜日に父が東寧という所へ外出した時の様子が詳しく書かれていました。満州は其の時は正月だそうで戦時中とはいえとても穏やかな楽しいひと時の便りで、最後にいつもの「元気でいるから安心してくれ」と日付は二月十五日と記載されていました。

私が子供のときに、住まいが類焼に会い父を知るものは殆んど無く母が大切に持ち続けてきた写真や数々の手紙を初めて見た時、心に描いた父への想いと今大事にしています。

母も父の五十回忌の二年後に亡くなり十四年が経ちますが、母が元気なうちに父親を知る色々な機会があったことを幸せに思い、日々の生活に感謝しながら、平和のありがたさを実感しているところです。

お父さんへ

南区支部 池亀 恵子（子）

戦没者 池亀 重作

戦没地 ガダルカナル島

お父さんが戦地に発つ前に四歳の私に、陸軍と印刷された用箋に書いて下さった「遺書」が靖國神社の社頭に掲示されました。

「靖國神社デ祈ッテキマス」

陸軍少佐 池亀 重作命

昭和十七年十一月二十三日

ソロモン群島ガダルカナル島

九〇三高地付近にて戦死

新潟県西頸城郡磯部村出身 四十歳

父ヨリ

恵子ヨ、可愛イイ恵子ヨ。

父ハ惠子ガ早ク大キクナリ、立派ナ人ニナリ、御國ノタメニ働クコトヲ祈リマス。

母ノ教ヘヲ良ク守リ、誰ニモ負ケヌ様ニ、才勉強シナサヘ。

「努力ハ天才ニ優ル」ト言ウ事ヲ念ニ収メ、偉イ人ニナツテ母ニ孝行ヲシナクテハナリマセン。
父ハ東京ノ靖國神社デソレバカリ祈ッテキマス。

靖國神社社務所

〔平成二十一年十一月拝殿・社頭掲示〕

これと同様のものが「靖國」平成二十一年十一月一日発行第六五二号と「日本遺族通信」平成二十一年十一月十五日発行第七〇七号に掲載されました。

私は短歌を詠み、「日本遺族通信」平成二十二年一月十五日発行第七〇九号の九段短歌に掲載されました。

父の遺書 四歳我に 片仮名で 靖國社頭 掲示されたり

俳句も詠みました。

靖國に 掲示せる遺書 銀杏散る

また、遊蹴館にお父さんの遺影が展示されています。

お父さんが戦死なさった時、お母さんは二十九歳、妹雅子は二歳、律子は生後十一ヶ月でした。お母さんはお父さんを尊敬しておりました。女手一つで三姉妹に高校教育を受けさせてくださいました。

昭和二十五年三月に、私が新潟大学付属高田小学校卒業と同時に、お父さんが建てられた家を売って、お母さんの生家の横浜の光源寺の隣に家を建てて引越して来ました。

昭和二十五年から毎年靖國神社の永代神樂祭に参拝しています。崇敬奉賛会、白鳩会等にも入っております。

お父さんが戦死なさったガダルカナル島へ、母は二回、私は一回、慰霊に行く機会に恵まれました。また私は毎年八月十五日に行なわれます「全国戦没者追悼式」に参列させていただいております。

私は婿養子を迎えて、「池亀家」を継いで、今では、一女二男の子供と孫六人です。

お母さんは、平成九年七月八日にお浄土へ往きました。享年八十三歳でした。三姉妹で一生懸命介護看病をさせていただきました。

来年は、お父さんの七十回忌法要を三姉妹夫婦に子供達夫婦と孫達一同でお務めさせていただきます。

私共三姉妹は、軍人のお父さんとお寺生まれのお母さんの子供であつたことを誇りに思い心から感謝しております。お父さんとお母さんのお心を拠り所として、一日一日を丁寧になささせて

いただきます。

お父さん、どうぞ三姉妹を見守っていて下さる様お願いいたします。有難うございました。

鎮魂

瀬谷区支部 石井 昭男（子）

戦没者 石井 忠五郎

戦没地 旧満州

遺児われも 七十路なれば 靖国の 妻と呼ばれし 母今は亡き

戦場へ 母と送りし 満州で 今も瞼の 奥に残りぬ

子をたのむ 残せし葉書 色あせて 今なお読みし 悲しみ深き

満州の 今も消えなむ 慰霊祭 ふるさとの歌 淋しく流る

忘れ行く あの大戦の 惨劇を 戦没遺児の 語りとなりぬ

父の最期の地で・・・

県央支部 石川 初代（子）

戦没者 石川 一臣

戦没地 硫黄島

父は硫黄島の玉砕で戦死しました。私が一歳七カ月の時ですから当然戦争の記憶は皆無です。父と母の結婚生活は半年もなかったと聞いています。母は義父母と共に農業をしながら生活を支え、私を育ててくれました。筆舌に尽くし難い苦難の道であったことと推察するとき、今でも胸にこみ上げるものがあります。愚痴も言わず、弱音も吐かず、その多くを語らなかった母、ただひたすら娘（私）の成長を楽しみに身を粉にして働いてきたのです。その母に感謝のひとつことも告げないまま、二年前父の待つ黄泉へ見送ってしまったこと、今更ながら悔やまれます。

九年前、父の最期の地、硫黄島へ慰霊巡拝をする機会を得ました。硫黄島への交通の手段は自衛隊の航空便であり、しかも貨物輸送機です。

これに五十名の参加者が乗り込み、埼玉の自衛隊入間基地から出発しました。

輸送機の中にハンモックのようなものがたくさん吊っており、それが座席です。輸送機のものすごい爆音で、隣の座席の人とも会話は出来ない状態での二時間余でした。

基地に到着し、最初は飛行場に隣接する厚生館に遺品が展示されているところを見学しました。それから天山にある硫黄島戦没者の碑に行き追悼式を行なったのち、戦跡巡拝をしました。

硫黄島は飛行場以外の建物といえば、鹿島建設の工事用の宿舎を見かけただけで、人家はないので人影もない。周辺は低木が多かったが、米軍が占領後にねむの種子を大量にまいたのでジャングル化しているところも多いと聞かされた。

日本兵は数多くの壕を掘って戦いに備え、身を隠していたそうです。厚生省等の調査で参加者のそれぞれの肉親の所属部隊がいたその壕の場所が明らかにされており、これには感動しました。巡拝が参加者の肉親の戦没地点で行なえるよう、三コースに分かれて自衛隊のマイクロバスに乗り、別行動で巡拝しました。肉親がなくなっただけと思われる壕等の付近や碑がある場所で、該当者のみバスから降りて供養させていただきました。私は自宅の湧き水と、父が植えたという松を折って持参し供え「お父さん来ましたよ」と涙ながらに声にしました。ずっと秘めていた思いが叶い、胸の支えが取れたような気がしました。

救護班がいたという医務課壕は入り口付近から中を少しだけ見ることができましたが、医療器具が散乱していて、一瞬、負傷者や病人がそこに居るような気配を感じました。

各々の思いを馳せながら五時間の行程で硫黄島基地を後にしました。

硫黄島は今も過酷な条件の中で関係者による遺骨の収集作業が続いていると聞いています。関係者の方々にお礼を申し上げたいと思います。戦後六十五年、戦争は遺族のなかではまだ完結していないのです。

六十五年目の残像

磯子区支部 市島 和子（子）

戦没者 高梨 三郎

戦没地 ニューギニア

私は遺児です。父の顔も覚えておりません。

親戚から戻してもらった数枚の写真で父親の若い時の存在を知り、出征時の顔を知ることが出来ました。父に抱かれた写真でしたが、そこには肌の温もりはありません。八月十五日が近づくと何時も思い出されることがあります。家を失った日のことです。私が三、四歳ぐらいだったでしょうが、断片的に其の時の光景が私の中を過ります。残像として消えることなく、又薄れることなく、その部分は今もはつきりと思い出されます。きっと幼かった私にとっては、大きな恐ろしい体験だったのです。

私たちは羽田に住んで居りました。母ひとり子ひとりの家庭に近くに住んでいた伯父伯母が強制疎開にあい一緒に住むようになりました。一戸建ての小さな家ですが庭もあり小さな防空壕もありました。また玄関脇の小さなスペースには母の嫁入り道具のひとつである瀬戸の火鉢に当座必要な物を入れ埋めてありました。

ある日の夕方、近くの銭湯に行きました。着替えた服は明日洗うため木の盥たらいに水をはってつけておきました。私にはお気に入りの服だったように記憶しております。いつになく静かな夜でした。何事も無く夜が更けるはずでした。

その時、けたたましいサイレンの音と同時に家の中は真っ暗闇の停電です。私は庭に向かって物凄い勢いで這いずりました。何時もならそのまま庭の防空壕へ入るのですがその日は何時もと違っていました。母と伯母に手をひかれ、防空頭巾を被った私は六郷土手の方に逃げました。どの道をどのように通り抜けたかという記憶はありません。

気が付いた時には六郷川沿いの土手に掘られている防空壕を転々と移動しながら羽田空港に向かつて走っていました。途中六郷川の川面も道路も燃えていました。焼夷弾が炸裂し油に火がつき燃えているのです。その燃えている火を跨ぎながら逃げたことを今もかすかに覚えています。恐ろしい光景でした。空港内の防空壕は大きいものでした。大人も立って歩ける程でした。薄暗い闇の中でそう感じたのでしょう。

そうした中で母の手からそつと大豆の炒り豆が渡されました。今思えば昔の人はすごいと思います。いざという時の為に簡単に食べられる非常食を常に用意していることです。それも食糧難の折にです。

空襲警報が解除されやっとの思いで家に辿りつきました。でもそこには私たちの家がありませんでした。昨夜、盥につけておいた私の服が焼け焦げていました。一人残って消火活動をしていた伯父が家財道具を近くの土手に退避させたそうです。あげく全部盗まれてしまい、私たちは着

の身着のままの状態で焼け出されてしまいました。それから終戦の日迄は数年あったのでしょうか。

私たちは焼け出された家から少し離れた集合住宅で大人達が一台のラジオを前に正座し下を向いている姿もかすかに覚えています。

それが玉音放送だった事も大人になって判りました。

一九四五年八月十五日敗戦の日です。

戦況が厳しくなった折、周りの人々はどんどん疎開していましたが、私たちは残っていました。後に母から聞いた話ですが、母は父が戦地から戻って来た時にすぐに判るように出征した地を離れる事が出来なかったと言っていました。

戦死の公報を受け、遺骨を受け取りに母と私の二人で行きました。小さな桐の箱の中には白木の位牌がありました。私が小学生の頃でした。夏の暑い日でした。芝増上寺の坂道が子供心にきつかった事を思い出します。そうした中で母の苦労は大変だったと思います。

徐々に日本の復興が始まりました。焼け野原だった土地はその面影すら見ることは出来ません。闇市だった所もきれいに区画整理され何々銀座に衣更え、現代は物が溢れ手に入らない物はない時代に昔の話をしても通じないのが当たり前。戦争があった事、大きな犠牲の上に現在があることをどう伝えていったらよいのか。風化させない為の行動が私たち遺族に課せられた課題なのかも知れません。

母は九十八才、アルツハイマー型認知症と診断されました。過去が薄れ行くなかで戦争の体験

話になると最後に決まって「さみしかった。」と言います。この言葉の重み、意味は体験者だけが解る言葉ではないだろうかと思えます。

終戦記念日が近づくともメディアでは戦争に係わるドラマやドキュメンタリー、映画と集中的に目にします。これらの事も戦争を伝える意味では大きな役割を担っているのかもしれませんが。又私が書いている文章が人の心に響くことができるでしょうか。

いろいろな面で疑問を感じながら私の実際にあつた体験を綴ってみました。

軍靴の響きかまびすし

保土ヶ谷区支部 遠藤 陽子（子）

戦没者 遠藤 一郎

戦没地 インドネシア

インドネシアのスマランに実戦はなかった。しかし、〈スマラン事件〉に巻きこまれ、ブルー刑務所で銃殺された父の死が知らされたのは昭和二十一年秋だった。父の勤めていた企業の三菱では、混乱していた情報から確認のためひとまず取り置かれ、父の死は行方不明ということに伝えられた。

所属の固有部隊名は、第十六軍司令部で通称〈治一六〇二部隊〉といった。当時の厚生省援護局からの母宛の公式文書には昭和二十年十月十五日スマランに於いて戦死となっている。

疎開していた群馬から母は妹を連れて毎月東京まで給料をもらいに通った。そんな疎開先で、昭和二十年八月十五日近所の人達と一緒に私は祖母と地主さんの家に集められ、ピーピーガーガーと鳴るラジオから天皇の声を聴いた。

「戦争は終わった！」大人の話にこの言葉だけは記憶している。抜けるような蒼い大空のもと、「戦争が終ったんだね、お父さん帰ってくるね」と祖母に話しかけていた。

今、父からの手紙をパラパラと読んでみると、留守宅を心配する父の気持が良くわかる。門司から届いた手紙に依ると、当時軍需産業に係っていた企業の代表者たちは、司令部に内地出発の予定を確認のために日参している様子が詳しく書いてある。しかし、司令部ではなかなか情報提供してくれず、日程不明と言いながら日々大型船に八千〜一万人の兵士を乗せ出港して行く船を見ていた。桜組（企業から軍属として参戦する者）などには教えられない。一度東京に帰れとくり返すのみだった。腹に据え兼ねた父は「我々は骨身を削って国のため、軍のために働いているにも拘わらず、一度東京に帰れとは何事だ」と一喝したらしい。驚いた彼等は、態度を改め少しずつ情報をくれるようになったと書いてある。

昭和十九年五月三十一日午前十時ついに門司港出港となり、台湾、マニラ、シンガポール等に寄港し、造船技術など見学しながら八月三日スマラン着という手紙がきたが、船中の様子やジャカルタの様子などを書くという手紙はついに家に届かなかった。この最後の手紙には「早朝から鳴き交う鳥の声、話し相手に飼ったオウム、マレー語の先生を探すこと」の終りに留守宅を気遣う様子が細かく書かれている。公式記録に依ると、現地の終戦は二十年九月一日とある。

昭和二十一年六月からジャカルタより引揚船は出ているが、新聞を目を皿のようにして読んでいた私たちにはついに「帰ったよ」の声を耳にすることはできなかった。

今年の夏、娘は下関、門司方面へ連れていってくれた。あの狭い関門海峡の特殊な潮流を利用し、出入港する大型船を眺め旧門司港やJRの門司港駅がいかにも「軍靴の響きかまびすしかった」か思いを巡らせた。

転校にあけくれた小学生時代

藤沢市支部 大久保 初枝（子）

戦没者 大久保 謙治

戦没地 フイリピン

私は横浜市中区本牧の生まれ、昭和十九年この地の小学校に入学しました。

この年から本土攻撃がひどくなり、五月頃より学童疎開が始まり、三年生以上は強制的に集団疎開、二年生迄は小さいので縁故疎開、私は一年なので母方の里（埼玉県越生町）に縁故疎開させられました。食糧はすべて配給制、主食に麦や小麦、玄米が配給され、その玄米を一升瓶の中に入れ竹の棒でつついて少しでも白くして食べました。

東京に近い埼玉県越生でも、授業中、警戒警報が鳴ると防空頭巾を被り、米俵の蓋を持って裏山の杉林の中に行きました（米俵はワラで編んだもの）、此処でも夜、警戒警報が鳴ると電灯に黒いカバーを掛け、光が外に漏れない様にして不安な夜を過ごしました。

祖母の家では田圃が無いので麦やあわ、さつま芋を作り、その芋を乾燥芋に、秋には庭の五本の柿の実を干し柿にし、米に換えていた様でした。甘い物が無いので、むいた柿の皮を石臼で粉にして焼き餅に入れたり、さつま芋を蒸したり、茹でたりして食べました。

昭和二十年、我が家は五月二十九日の横浜大空襲で丸焼けとなり、後で母から聞いた話です。隣に焼夷弾が落ち、弟をおぶって頭から水に濡らした布団を被り、本牧から県庁のある山下町に逃げたそうです。途中二つの橋を渡り、後ろを振り返ると今渡った先の橋が炎に包まれていて恐ろしい思いだったと聞いています。火が治まったので我が家に戻って来てみると防空壕から真っ黒な煙が出ていて、どうすることも出来なかったそうです。

東京の親友で集団疎開から学校に帰ってきて、親達が引き取りにくる中で、親友は夕方になっても親が迎えに来ないので心配になって先生に調べて貰うと両親が三月十日の浅草戦災で死亡して迎えにこない事が判り、途方にくれたそうです。悲しい現実があります。

戦争は終わりましたが昭和二十一年三月まで、食糧難のため越生におりました。

新学期から父方の叔父（長男）の疎開先の兵庫県朝来郡新井町（姫路城のある姫路から播但線で日本海側の城崎へ向かう途中の町）に移りました。この時、藤沢から兵庫迄の列車の切符が列車本数が少ない事と利用者が多かった事で入手困難だった。やっと切符を入手、列車が東京―横浜―小田原と進み、混んで窓から乗り、トイレに行く事も出来ず女の私でも子供だから窓から外に出して貰い停車駅のホームの隅で済ませた事は今でも忘れられません。

家庭の事情により、三学期から、また神戸市灘区の六甲山の麓の町に移り、この時、紙が不足していて新聞紙の教科書でした。学業も田舎とは違って進んでいて大変苦勞し、又いじめにもあい、辛い思いをしました。この後、神戸でも食糧難で三人の居候は食べさせられないとの事で私一人が横浜の叔父の家に引き取られました。（転校四回目）

昭和二十三年正月、やっと藤沢市で親子三人で暮らせる様になりました。依然として食糧難でした。

父母を語る

座間市支部 大越 幸雄（子）

戦没者 大越 善太郎

戦没地 インドネシア

昭和十二年頃、誰かの世話で世帯をもったらしい。昭和十五年十月二十九日長男幸雄誕生、母の実家で生まれたらしい。祖母は明治生まれの女傑。十六歳で嫁入りし二男七女を産んだ。今なら野球チームができるくらいものだ。

平成四年、百歳で天寿を全うし、海部総理よりお祝いを頂いた。群馬県太田市では市を挙げてお祝いムードに包まれたと聞いた。

そんな祖母も病を得て入院を余儀なくされた折、私は祖母の見舞いに駆け付けた。同行したおばさんが「神奈川から幸雄さんがきてくれたよ。この子は母と二人で苦労したのだよ」と紹介すると祖母は一言「苦労は肥し」。それから私は泣き言を言わなくなった。

小学三年の頃、母が大病を患い国立相模原病院に入院した。脾臓の摘出手術を受けた。後年、聞いた話では執刀医が「あなたのお子さんを私の養子にする。だから安心して私に任せてほしい」手術が無事終了、しばらくしてから同じ病室での暮らしが術後の回復まで一年間継続し、小学校

と病院暮らしが始まった。母と二人での病院生活は、周囲の理解と暖かさが私を自由奔放にさせた。

座間小学校からの帰り、よく頼まれたのが肉屋での買い物であった。それは豚肉のレバーであった。病院食の他、増血作用のあるものを勧められたためでした。退院後、母は神奈川県雇用員に採用され定年まで公務員として勤め上げたが、大病後の無理が災いしたのかまもなく他界した。享年六十歳。

そんな母が若いころ、銀行頭取の住み込みのメイドさんとして働いていた時があったので、当時ハイカラなマージャンを教え込まれていた。それが思わぬところで役に立った。

私が夜学の帰り、家に着くと賑やかな音がして私の部屋がマージャン部屋と変身しているではないか、見ると近所の大学生と母がパイを囲んでいる。こんなことを何度も見ているので、ああまたか。そんな母をいまは懐かしく思い起こさせる。

父の思い出が意外なところで判明した。父の同僚で相模原に住まいするKさんがJR相武台下駅近くのスナックで私と同席、互い初対面ながら名刺の交換をすると何たる偶然か、私は若いころラグビーをやっていました。彼の息子もラグビーをやっていた。その上私の父をよく知っている。「貴方のお父さんは偉かったよ。軍隊で部下の制裁はびんたが当たり前なのに、貴方のお父さんは決して手は出さずただ教え諭すだけであつた」と。それを聞かされた私は、我慢強い母と温厚な父を誇りに思っております。

戦争―そして別れ

旭区支部 小熊 紀久子（子）

戦没者 中西 博

戦没地 フィリピン

父が戦死してから、私は祖母達に育てられました。母のことは、何も聞かされず写真さえありませんでした。何故、母がいないのかさえ気になることは一度もなかったと思います。それだけ、祖母達に大事に育てられ幸せな毎日を送っていました。

母が亡くなってから本当のことを知り、母の悲しさ、淋しさ、悔しさを始めて知ることが出来ました。私も本当のことをもつと早く知っていたら、母にあんな冷たい言葉を口にしたりしなかったらうにと、戦争さえなかったら幸せな家庭だったのにと悲しくてなりません。

私に子供が出来てから、夏休みには必ず母の所に遊びに行く様になりました。館山の海が目の前であり、横浜育ちの私達にとつてはとっても楽しいものでした。海もきれいで唯ひたすら遊び、母の手伝いなど何もせず、別荘みたいなものでした。ある時、母が、祖母に苛められて辛かったとポロツとこぼしました。私にはとても優しい祖母ですから「何で、私にそんなことを言うの！そんな話は聞きたくないわ。おばあちゃんが母さんのこと苛めたりする訳なんてないでしょう。」

もう帰る。来年からはもう来ないからネ」と強い口調で言い返していました。でも、翌年もその次の年も、夏休みには母のところに遊びに行きました。そして、決まって祖母のことで母と言い争いになります。「おばあちゃんのこと、もう、これ以上とやかく言わないで、お母さんよりおばあちゃんの方が好き」

そして、「あなたは私を置いて出て行った人でしょう、産みの親より育ての親と言う言葉だつてあるでしょう。あなたに逢ったのが間違いだつた。もう二度とここには来ないから」とまで、母に厳しい言葉を投げ掛けました。その時の母の淋しそうな顔が忘れられません。真実を知らなかったとは言え、本当に酷いことを言ってしまったものですが、謝ることも忘れ、母とも疎遠になっていました。

そして、年末の十二月三十日の午前三時半頃だつたと記憶していますが、電話が鳴りました。こんな時間に誰からだろうと電話に出ると、館山の叔母さんから「きつ子ちゃん、驚かないでね、お母さんが大変だから直ぐに来て」と言う電話でした。母の所に、急いで向かいましたが間に合いませんでした。

そして、母のことを叔母さんから初めて聞かされました。「お母さんと野毛のおばあちゃんとのことは、きつ子ちゃんは何も知らなかったでしょうが、あなたのお父さんが戦死しことが判つた時、きつ子ちゃんだけは渡さないからと、おばあちゃんに言われて、お母さんは実家に帰されたのよ。でも、こつちの実家でも出戻りだと皆には冷たくされて、物置小屋をあてがわれて、豆だけしか食糧も分けてもらえなかったそうよ。でも、いつかきつと、きつ子ちゃんに会えると齒

を食いしばって頑張ってここ迄来たことは知らなかったでしょう。」

初めて聞く話に、お母さん、ごめんなさいと何べん言っても、母にはもう届きません。お母さん、本当にゴメンナサイ。黄泉の国でお父さんとは、もう会えましたか？。

この前、お父さんの戦死した地、ミンダナオ島に行って来ました。館山の海と同じ様なきれいな海に浸かって来ました。

六十五年を振り返って

足柄上郡支部 柏木 允(子)

戦没者 山田 武夫

戦没地 マレーシア

終戦から六十五年の歳月が過ぎました。

父親を亡くした私達家族は言葉では言い表すことのできない数々の困難を乗り越え、辛く淋しい日々の六十五年でした。父は戦地で私達以上に大変な日々を送った事と思います。

父は出征する時に自分が帰ったら織物工場を始める為に工場を建て、そして家族(祖父、祖母、叔父二人、叔母三人、母、私達兄弟四人)に、自分が帰って来るまでは田畑は他人に貸してはいけないと強く言い残して出征したそうです。その時は父も家族も必ず帰って来るものと信じていたそうです。

私は父との思い出は父が外地に出て行く前に家族に面会が許され父の部隊のある東京の麻布に家族で会いに行きました。その時の父は終始満面の笑顔で私達を力強く抱き締め頬擦りをし精一杯喜ばせてくれました。その時の温もりはつい昨日のような気がします。私はその時が父との最後だとは知らず騒ぎまわり、「今度は何時会えるの」と聞くと父は「又知らせるネ」と言っ

黙ってしまいました。

後で考えると、その時の父の気持ちはとても辛かったと思います。面会の帰りは乃木神社にお参りをしました。その時の母は、いつまでも手を合わせている姿が今でも私の脳裏に焼き付いています。あの時の母は、父の無事を祈っていたのだと思いました。

その後面会の知らせはなく母宛に一通の手紙が届きました。その手紙は父からでした。父は外地に発つ最後の日トイレで自分の髪と爪を切り手紙の中に入れ旅館の女将に内緒で頼み投函してもらったそうです。その時父は既に戦地に発つていたのです。それから家族は父の出征する時の言葉を信じ父の留守の間家族で力を合わせ父の帰りを待ちました。

そんな家族の期待も裏切られ、父の戦死の知らせでした。家族は「誤報だ」と信じませんでした。母は毎日のように占い師を尋ねて遠くまで出かけて行きました。夜は玄関は鍵をかけず父の帰りを待ちましたが帰ることはありませんでした。その後父の戦友の人達が家を訪れ父の話をしてくださったので、母を始め家族も父の戦死を受け入れられることができました。

その後祖父は床に付くようになってしまいました。叔父や叔母は私たちが大きくなるまで一生懸命家の力になり、母も小さい身体でこま鼠のように働き、私達も一生懸命手伝いました。一家の大黒柱が亡くなると総てが大変な事を実感しました。

その後父の遺骨が帰って来ると言う知らせがあり母と一緒に受け取りに行きました。家に帰って開けると中には白い紙に数本の髪が挟んであるだけでした。この髪も父のものか疑いました。私達兄弟四人で夜になると空に向かって「お父さん何処にいるの、早く帰って来て」と大声を

張り上げ泣きました。父の声は聞こえません。私は、もう一度、夢でいいから父に逢いたかった。面会の時の父のあの笑顔は生涯忘れることはできません。昔の事を偲び、ふと気づくと私も後数年で父のなくなった年齢の倍も生きているのです。元気なうちに父のなくなった場所「マレーシア・ペラ州クアラカンサル南方第三陸軍病院」に行きたいと思っておりました。その念願が叶い昨年行ってきました。私が想像していたより遥かに開発されジャングルには油椰子が植えられ戦地だったとは思えぬくらい閑静な所でした。

病院の敷地はとても広く、現在ではばら線です。現在では草むらでした。

私は父の踏んだと思う砂を袋に入れながら、父はこの地でどんな思いで最後を迎えたのでしょうか？それを思うと私も辛く胸にこみ上げるものがありました。

その時私は、父と再会したような気持ちになり父に勇気づけられたようでした。私も心が落ち着き、来てよかったと思いました。

私も三人の娘の母となり改めて亡き母の偉大さを再認識致しました。また父からはどんな事にも耐え強く生きる事を学びました。これは亡き父からもらった貴重な宝だと思っております。

今の私の願いはこの世の中から戦争が無くなってほしい事です。声を大にして言いたいです。現在日本の平和は、先の戦争で犠牲になった人達の礎だという事を決して忘れることはできません。

戦争の悲惨さ、平和の尊さを次の世代に語り伝えていくことが私達の責務だと思います。

母の思い

金沢区支部 加藤 浩之（子）

戦没者 加藤 嶋三郎

戦没地 硫黄島

父の声が聞きたい、父の温もりを知りたい、叶わぬ夢である。そして、「子の声を聞きたい、子の温もりを今一度確かめたい」と願って死んでいったであろう父の面影が、洋上千二百キロメートルを隔てた浜辺を結んで、再び会うことの出来ない二つの命が通い合う。

「父は昭和二十年三月十九日、硫黄島で戦死しました」もの心ついて初めて覚えさせられた言葉である。それ以外の言葉を思いつかない。母に手を引かれ、会う人に「お父さんは」と聞かれればそう答えるように教えこまれ、ハキハキと答えた。賢い子と誉められ、「お母さんの言うことをよく聞いて、早くお母さんを楽にしてあげてね」と励まされ、一家の小さな大黒柱を背負ってきた。子供に辛い思いをさせたくないと頑張る母と、それに応えようと頑張る子の二人三脚である。二つ上の姉も又、母を助けて必死に自分の生きる道を探し求めている。

母は、父についてほとんど語らなかつた。辛い思いをさせたくないの一言に全てを呑み込んで、日銭を稼ぎ、日毎の糊口を凌いだ。夏の炎天下での畑の草刈り、冬の凍てつく海での拾い海苔、

粉じんの中での肉体作業、時と場所を選ばず働き通してきた。「戦争」という憎しみを黙って背負って生き抜いた。目に入れても痛くない、三人の孫に母親らしい子育てを心安らかに楽しみ、平和の有難さを噛みしめ、四十年ぶりのデートに胸はずませて旅立って逝った。

母を送って還暦も過ぎ、中卒で勤めた会社を無事定年退職、今はのんびりと老後を楽しんでいる。その会社が父の勤めた海軍工廠の跡地であったことを入社後に知り、どこかで繋がっている親子の絆を大切に、今は父が好きだったと聞かされていた祭囃子の太鼓に熱中している。あの戦争が無かったら祭りの山車でいっしょに太鼓を楽しむことが出来ただろう。ささやかな親と子の夢である。夏の一夜、暗闇の中に風に乗って聞こえてくる遠音に親子の撥を重ねてみる。そんな思いを繰返し、せめて子供にいくつかの夢を叶えさせてあげたいと、戦争の苦しみを黙して必死に生きてきた「母の思い」をたどり、平和の尊さを噛みしめている。

もう誰も恨みません

泉区支部 金松 美恵（子）

戦没者 櫛原 祥太郎

戦没地 トラック島

昭和十八年四月二日、私が三歳の誕生日に、父の戦死の公報がはいりました。妹が生まれて七日目、兄は七歳。母は父の死を覚悟していたようですが、どんなにか狼狽し嘆き悲しんだことでしょう。母のお腹に妹がいた時から、戦闘機の製図に追われて残業に明け暮れ、生まれて来る子の智恵を使い果たし、栄養も充分にとれず、妹は未熟児で生まれて来ました。顔がたばこの箱で隠れ、手のひらに乗ったくらいでした。お乳も出ず、祖母が僅かなお米を手に入れ、播り鉢ですってその汁を飲ませて何とか育てたようです。その為、知能が弱く背が低く小さいです。

父はまだ見ぬ嬰兒と愛する妻、愛しい我が子を残して行くのに、どんなにか無念で辛く心残りだったのでしょうか。母の一生も可哀想で、私はこうして書いていても胸が痛み泣けてくるのです。

母は初恋の人を追いかけて満州まで渡り、親に反対され引き戻され親が決めた人、父と一緒になつたのです。幸せな時は束の間で、一瞬にして碎かれどんなにか戦争を恨んだことでしょう。貧乏のどん底で食べる物も着る物もなく、母は嘆いたすえ一家心中を図るつもりでした。祖母の

一言「死ぬならあんた一人で死になさい。私は孫達を守る」 母は思い止まったのです。

父の戦死で一時金が下ったそうですが、郵便局長が握ったきり貯金させられ、あの当時、千円で百坪の土地が買え、二階家が建ち井戸まで付いたそうです。母が死ぬ昭和五十年まで一年に二百円、下駄一足も買えないと恨んでいました。配給物もままならず、町内会長が上前をはね、その上組長までがはね、手元に来たのはほんの僅かでした。「戦争が人間の心を狂わせてしまう。」と母はよく言っていました。無理がたたって、母は結核を患い心筋梗塞で逝ってしまいました。

今、私や妹が母の歳を超えて生かされておりますのは、亡き父、母、祖母が見守ってくれるお陰と思えてなりません。あの戦争の悲惨さ、辛さを乗り越えて来ましたから、今の幸せがあり人並みの生活が出来る有難さに感謝して、せつせとお墓のお守りをしております。

毎年一回靖国神社に参拝させていただき、父に涙して詫びながら手を合わせお参りしています。不憫な妹を一生守っていくのは、姉の務めです。

もう誰も恨むことはできません。あるがままに受け入れて来ましたから。

兄が五十八歳で逝き、特別弔慰金四万円は、兄嫁と妹と私の三人で分けて、大切にに使わせていただいております。

今やたらと人を殺し、命を粗末に散らすなんて勿体なくて涙がこぼれます。無念の死をとげた戦没者達の怒りと、悲痛の叫びの声が聞こえてきそうです。

残りの人生、世の為人の為に尽くしてまいります。

戦争反対と唱えることが出来る自由で平和な世の中ほど、尊いものはないのです。

父の戦死と母

泉区支部 北村 岑雄（子）

戦没者 北村 義一

戦没地 南方ナウル島

母は教員の長女として第二人妹二人の七人家族で小さい時は子守をし、学校を卒業すると横浜や東京へ奉公に出た。その後嫁ぐと同時期に第二人は戦地に出征し大陸で戦死、妹は軍需工場へ出て班長になり過労死した。夫は南方に出征し終戦後の帰還船の中で死亡し水葬されたと聞いている。（私は父の顔も声も知らない）数年して母の父親が農協の勤労奉仕で突然事故死し、その後母親が自転車に衝突され十日後位して破傷風で死亡した。相次ぐ家族の死に母は途方に暮れたに違いない。

生計は農業で畑と水田を耕作していたので、食べるものには苦勞しなかったが、お金では大変苦勞したようだ。私は小学校の三、四年生頃から十二月に入ると枯れた木を切り次に薪割りをし、毎年二十七日か二十八日に三時起きして餅つきをした。前日の米とぎも大量で時間がかった。祖父は左手が不自由だったので、つき手は殆ど私一人だった。餅米を蒸かすための薪割を一週間位前に行なったのが準備運動にもなって、身体も学年で一番大きかったこともあり、終わった

後も身体は何でもなかった。水田は谷戸田のためセビを造り、時期により田植え、刈取りは忙しく手伝いに来る人もいた。畑は冬(麦踏)以外は手伝うことが多かった。野菜、穀物、果樹や花卉などを作った。農家以外の親戚の人は陽気がよくなると食糧難のこともあり野菜類を貰いに来た。収穫したものは保土ヶ谷方面に背負い籠やリヤカーで商いに行った。背負い籠の時の帰りは天王町から二俣川まで相鉄線に乗り帰った。天王町や二俣川で買い物をするのがうれしかった。月末には柿と仏花を作り売りに行った。仏花は皆さんに好評であった。時には大八車で肥取りを同じ地域に行くこともあった。坂が急のところもありこぼれるので杉の棒で縦に長くブレーキ代わりに後付けした物を使ったが道も悪く急なためコントロールが大変難しく、着いた時には大分減っていたことも。肥溜めが道路脇にありそこに入れた。そこで寝かせて畑に使ったが、今では見ることもできない。

この原稿を書くにあたり、祖父母と乳飲み子の私を抱え二十代半ばで一家を支えなければならなくなった母(現在九十二歳)の当時の労苦に思いを巡らせ、感謝の気持ちでいっぱいである。私事だが、中学校で野球部へと勧められ入部したが経費がかかるので退部し、修学旅行にも行かれなかった。すぐにでも働いて母を助けたいと、試験を受けて特別奨学金を貰い工業高校へ進学した。私の人生も父の戦死によって方向転換を余儀なくされたが、今は子供や孫に恵まれ、定年退職し有意義な日々を送っている。

懐かしい田園風景には鉄道の駅やマンションなどができ、現在横浜を代表する高級住宅地に変身している。父や祖父母が見たら腰を抜かすほど驚くに違いない。

終戦六十五年が経ち、戦争の体験と戦後の生活についての記憶がすっかり薄くなり、いや全く消え去ろうとしている。特に行政の考え方が最近顕著である。戦後長いこと行政（区役所）が行なっていた遺族会の事務を手放して、区社会福祉協議会などの外郭団体に業務移管していること。そもそも国と行政からの赤紙一枚で戦地に出向き戦死した者の遺族に対して失礼ではないかと思う。末筆ではあるが遺族会も高齢化が進んでいるので行政としてぜひ再考していただきたい。

遺児によるフィリピン慰霊友好親善訪問に参加して

都筑区支部 串田 明久（子）

戦没者 串田 一生

戦没地 フィリピン

戦況が日一日と悪化してゆく昭和十九年六月農業一筋三十八歳の父にも召集令状が来た。私が小学校五年生であった。二度と帰ってこれれないと覚悟していたのか、遺言と辞世の句と五人の子供達にもそれぞれ一句ずつ残し出征した。

吹かば吹け しこの嵐はすさぶとも 我はゆくなり大君のため

遺言通り墓地の一角に建てられている。

出征して間もなく、外地へ出発との連絡が入り母と面会に行ったが途中品川駅に向かって行軍の一群に出会う。何百人の中から、ようやく見つけることが出来たが声もかけられず父とはそれが最後であった。今でもその光景がはつきりと思い出される。

門司港よりフィリピン諸島のセブ島へ上陸した。激しい攻防戦の中、終戦一ヶ月前七月十二日

戦死、終戦が一ヶ月早ければと今でも悔やんでいる。

母も一度は父の最後の地へお参りに行きたいと言っていたが当時は治安も悪く果たせなかった。母亡きあと私も年々父への思いが強くなり、今実行しなければ一生悔いが残ると思い体調に少し不安があつたが平成二十年戦没者遺児によるフィリピン慰霊友好親善訪問に申し込み、全国より百六十名の参加者と十一月二十六日故郷の水、お茶、父の好物等と母の遺影とともに九段会館へ集合、六班に分かれた。私はF班二十八名これから一週間行動をする仲間全員で靖国神社へ参拝、お神酒を頂き、成田空港近くのホテルに一泊、翌朝六十余年ぶり父の待っているマニラへ向かつて出発した。乗り継ぎで最期の地であるセブ島につく。セブは二名である。

朝早くバスにて出発、安全のため軍隊より二名の兵士が銃を持って護衛に当たってくれ、現地の案内人も日本軍のことを良く説明してくれた。戦没地ルカ高地へ着く。ヤシの木のジャングルの中で、日本から用意していった組み立て式の祭壇を全員で準備する。三十度以上の暑い中、蚊、蜂、時には毒ヘビも出る。ヤシの実の落下に注意しながら父の好物、母の遺影を供え、今までの思い、戦後大きく変わった故郷、家族の報告と追悼の言葉を挙げる。

遠くはなれたこの地で父は祖国日本の為に立派に散っていった。どんな思いであつたか親孝行も出来なかった事を詫び、感無量であつた。今までの心の重荷がおりた。明日からレイテ島・オルモック、タクロバン等を廻り、山の中、海岸と暑い中お互い助け合つてお参りをしたが同じ境遇なのですぐに親しくなれた。毎日が山の中、現地人の暮らしは質素だ。バナナやヤシの葉で作った小屋であるが、おおらかな気持ちの人達で、今日がよければ先のことは考えないらしい。

お参りの場所には必ず子供達が山の中からお供え物を目当てに寄って来る。終わりの日、親善の一つ小学校を訪問、ヤシの林の中の小さな校舎、電灯もない。日本から用意して行った学用品、衣類等を贈った。明るく元気で可愛い子供達は全員で見送ってくれた。

最後はマニラにて全戦没者追悼式を、カリラヤでは各県ごとに参拝した。夜は大使館や各県からも出席懇親会が盛大に催された。

今回は普通では行けない現地で参拝が出来、一生の思い出となりました。再会を約束して帰路に着きました。

平和の代償

多摩区支部 久保田 昌司（子）

戦没者 久保田 福梅

戦没地 中国・広東省

父が戦死してから六十五年がたった。終戦一ヶ月前の七月九日中国広東省に於いて戦傷死、十三歳でした。

私は満五歳で戦争の本当の怖さや悲惨さがよく理解できない歳でした。

昭和十九年三月、小雪がちらつく寒い朝、親戚や近所の人たちに日の丸の小旗と歓呼の声で送られ「元気で行ってまいります」と言つて、国鉄南武線久地駅から出征していったのをかすかに憶えている。残された家族は母、幼い弟と妹、それと七十歳を少し越えた祖父の五人でした。

家は川崎の北部、当時は農村で米と麦、多摩川名産の桃、梨などを作る小規模な農家でした。それまで父は祖父と一緒に家族のため農作業に励み平穏な生活を送っていた。祖父は息子が戦争に取られたという事で顔にこそ出さなかったが張り合いをなくし、働く意欲を失くしたようだったと母が言っていた。

農家の生まれでなかった母は幼子三人を抱え、畑仕事をやってゆくのはきつく大変だった。親

戚の人達などの助けを借りて父が帰ってくるまではと必死になって働き頑張った。

しかし、二十年になるとB29による空襲がたびたびあり、焼夷弾や爆弾が近くに落ちはじめようになった。ラジオから「ブーブーブー」と鳴り空襲警報が発令されると防空壕に逃げ込んだ。三月十日の夜は東京方面の空が、空襲による火災で真っ赤に染まっていたのを今でもはっきりと憶えている。空襲が身近になりその怖さも増した。一方で母は年老いた祖父とで畑仕事をやってゆくのは大変で土地の一部を他人に貸したりした。生産した物のほとんどは供出し、家に残るものはわずかだった。食糧不足で夜など空腹で眠れないときがあった。四月になり祖父は父の身を案じながら老衰で亡くなった。物も食糧も十分でないなか空襲を避け、形だけの葬式が行われた。

終戦近くなると食糧難はますますひどくなり、豆の多く混ざった麦ご飯、代用食にイモ類やカボチャなどもよく食べた。そして八月十五日、暑いお盆で親戚の人たちが家に来ていた。正午に玉音放送があるということで皆ラジオの前に集まりそれを聴いた。そして無条件降伏（敗戦）を知った。大人たちは気が抜け落胆した。反面、戦争が終って、もう空襲で防空壕に逃げこむ必要もなく、夜も敵機を気にすることなく灯りをつけ、安心して眠れるようになったと安堵した。他方で、日本が先行きどうなっていくのか誰もまったく分からず不安だった。

私も子供ながら戦争に負けたということは分かってても、これから日本はどうなっていくのかなど知るよしも無かった。母は戦争が終ったので父は必ず帰ってくるものと信じ、それから毎日その帰りを待ち詫びていた。神頼みで遠方の社寺へお参りに行ったりもした。

近所で出征した人が帰ってきたり、遠くの知り合いの人が帰ってきたという話を聞いては母は羨ましがった。なぜ家だけは・・・と思ったと言っていた。

その年の十二月の初め、日本へ無事帰ったときは互いに連絡をとり合おうという約束で父の戦友が家に訪ねてきてくれた。そしてその人は「父が乗っていた馬が地雷に触れ、額に傷を負い担架で病院へ運ばれるのを見届け別れた」とそして「今、帰ってきていないなら病院へ運ばれる途中、暑さと傷の程度から考え恐らく亡くなったのではないか」と母に話してくれたそうです。父の帰ってくるのを信じていた母は落胆して深く悲しんだ。

何日も人目のつかないところで泣いていたのを記憶している。母は「カミやホトケも信じられない」と言って嘆いていた。

翌年の二十一年三月になって戦死の公報が届いた。私が小学校に入学して間もない四月地元の青年団の方と親戚の人、何人かと一緒に横浜のお寺へ遺骨を受け取りに行った。

箱の中の遺骨は石ころみたいにコロコロと音がして父のモノだとは思えなかった。

母の悲しみは増したが三人の子供を養育するため気持ちを切り替える必要ならなかった。生活していくには残された田や畑を耕し管理していく必要があった。女手一つではどうにもならず、一年たった頃親戚の人のお世話でやむなく再婚した。義父となった人は戦争から帰った人でした。初め私達子供は実の父のように思い嬉しかった。しかし年月が経つにつれ世間から父が馬鹿にされたり、私達は差別されたりして辛く淋しい思いをした。また母は義父と子供達の間に立ち違う面で悩んだり苦労したようだった。

これも戦争が残したひとつの傷跡だと思えるようになったのはずっとあとの社会人になってからである。

中学生のとき私の将来について、母と話し合った。その結果農業は継がず進学することにした。工業高校へ進み、東京の民間放送局で約三年働き、その後工学系の大学へ進むことができた。卒業時それまでお世話になった多くの恩を若い人達に返したく、神奈川の県立高校の教員になった。その三十三年間は生活してゆく糧の電気技術中心の指導であつたが傍ら平和の大切さも伝えたと思つている。

こうしたことができたのも母を支えてくれた義父がいたからこそ経済的に家族がやってこられたのだと思つている。

私たち子供三人もそれぞれ独立し孫を持つ歳となり平穏な生活を送らせていただいている。いずれにしても母親の子供に対する愛情は強く絶対的なものだと思つて解つた。

定年の前後、JICAの海外シニアボランティアとしてケニアに一年、ネパールに二年間行き、若者たちへ技術指導をした。これらの国には隣国、ソマリアとチベットから多数の難民がいた。これらの人達は家族がバラバラになったり、親、兄弟を失つたりした人たちが多数いた。

平和が本当に大切である事はこれらの現地の状況を直にみて痛切に感じた。

一昨年から、遺族会の仕事を手伝わせていただいている。昨年（二〇〇九年）は九月には日本遺族会主催の戦没者慰霊巡拝の旅に中国広東省方面へ行く機会を与えられた。父が戦死したという広東省・韶関にも行き、父が死亡したという兵站病院を訪ねた。現在は立派な市民病院に変わ

つていて当時を思わせるものは何も残っていなかった。しかし、周囲の山河、そこを吹き渡る風は六十四年前と変わってはいないと思えた。もし病床で父もこの風景を眺めていたなら、故郷の山河や家族を思い、妻や子供にどんなにか会いたかったかと思うと熱いものが胸にこみ上げてきた。

巡拝一行は九月の暑い陽射しのなか病院近くの川岸の空き地で川面に向かい黙祷をし、父が好きだったタバコと花を供え冥福を祈った。自分が子供に戻って懐かしい父に会えたような気がした。父の死に対し一区切りがついた。思ってもみなかった慰霊巡拝は私にとり大変意義深いものだった。本当に行って良かったと思っている。心残りは母にも来させてやりたかったと思った。その母も十四年前そしてよく働き家計を支えてくれた義父は八年前ともに戦争の大きな犠牲を背負い静かに世を去った。

この六十五年はわたしの人生そのものです。人々が幸せな生活を送るに大切な条件は第一に平和です。しかし、人の心は弱く移ろいやすい。諺にあるように「喉元過ぎれば熱さを忘れる」と争いは互いに得にならないと分かりながら、いつの間にか我が儘や欲望が膨らみ他人を思いやる気持ち薄れ、妬みや憎しみが生じて争が始まる。これが国どうしになると戦争に発展することがあるのだと思う。

先の大戦で大きな犠牲を払った日本。現在の平和で自由なそして豊かな生活をいつまでも維持できるように折に触れ時代の大きな転換期であった過去を振り返って微力であるが世界の平和に尽くせればと思う。

父への思い出

川崎区支部 小宮 義昭（子）

戦没者 小宮 寅吉

戦没地 ビルマ

皆無です。記憶にあるのは、昭和十七、八年頃、会社の工場が埼玉に出来たので、川崎より移り住んだこと位で、父と遊んだりした記憶は全くありません。

赤色のはがきが届き、会社に母と出向いたと聞いたが覚えがない。その後、数日を過ぎてから、静岡県須走、現在の自衛隊の駐屯地あたりだろうと思いますが、面会に向かいましたが、前日の夜に移動したとのことで、父には会うことが出来ませんでした。この日は山中湖付近に宿泊したことは覚えています。これがビルマへの移動だったと想像していますが、本当のことは判らず空白です。

終戦後、舞鶴港に兵隊さんの帰還船が入るたびに、ラジオから帰還される方々の名前が流れるのを、もしかして父の名前かと期待して、母と共に聞き逃さない様にと放送の都度聴いたことを思い出します。

あれから戦後六十五年、なぜ日本は遠い異国まで兵隊を送り込んで戦争をしなければならなか

ったのか？

平和に暮らしていた多くの人々の生活を一変させ、財産も資源も国土にさえも犠牲をはらってまで、戦争をする価値がどこにあったのだろうか？ 戦没者の遺族として未だに疑問に思っている。

苦勞の人生

三浦市支部 榮 貴代（子）

戦没者 榮 富貴男

戦没地 南支那海

その日、昭和二十年五月二十九日は祖母の六十四才の誕生日だった。

朝、「今日はおばちゃんのお誕生日だね」と話をしていた時、ウ……と空襲警報のサイレンが鳴り、急ぎ母の御召の着物を解いて作ってあったモンペと上衣、防空頭巾（今でも忘れない白と紫の縦縞模様）、これも母の帯で作ったリュックサックを背負った。B29爆撃機が轟音と共に空いっぱい翼をひろげ頭の上を通って行く、その腹を見ると子供心に圧迫感を感じた。

焼夷弾の落ちる音は、今でも耳の底に残っている。電車道から火の手が上がって来た。山の中腹に家があったので逃げ出す時間はあったのですが、小さなバケツに水を入れ火の粉を消しながらお墓を通り、母と祖母、私の三人は自分が入学するはずだった元街小学校へ避難し、残って消火をしていた祖父を待った。大勢の人が学校に逃れて来て、中には白いシャツがかかった布団まで持って来ている人がいて、飛行機の目標になるからと怒鳴られていたり、木の下に居ると、火の粉を払う為に枝を折って持って行ってしまう人も居たりと他人を思いやる余裕などまったく

無い状態でした。

学校の反対の山にあった香蘭女学校が焼け、風にあおられると窓から紅蓮の炎が吹き出し、真っ黒な校舎がくつきりと浮かび上がり、此の世のものを見ているとは思えない恐ろしさを感じました。一週間ほど講堂に寝泊まりし、その間食事は兵隊さんが大きな鍋で煮た物をヒシヤクですくって配給して下さったのが印象に残っており、お隣に大火傷の人が居り、唸り声と火傷の臭いでこわいこわいと言っていた覚えがあります。祖父も逃げる時に両手に火傷をおっておりました。我が家は横浜市中区の妙香寺（君が代発祥の寺として有名）の寺内、山の中腹にあり、百坪ほどの敷地に今で言う4LDKの平屋建、潜り戸のある大きな門、家の前庭は芝生、両サイドに小さな畑、柿、栗、夏ミカン、葡萄、無花果の木があり、私の生まれた時には主のいないイタチ小屋、雉子小屋があつた。空襲が激しくなるにしたがい食糧難の為芝生を上げジャガ芋、サツマ芋畑に変わっていった。イタチ小屋は一寸した広さがあり、祖父の俳句仲間の一家が焼け出されて越して来ていた。

家に戻ってみると瓦屋根がストンとそのまま落ちており、桧のお風呂は水が入っていたので縁だけ焦げて残っていた。庭にはドカンを埋めた池が三つあり、睡蓮と金魚が無事で芋畑の周りにそら豆が植えてあつたのが、ほど良く蒸し焼きになっており食べさせられたが油の臭いがひどく、その後遺症で戦後しばらくそら豆は食べられなかった。

家の裏に掘ってあつた防空壕で暮らしていたが、もうここには住む事が出来ないと東京の親類の家にひと月ほどごやつかいになり、その後、母の姉の嫁ぎ先である三浦三崎へ四人で越して行

きました。その時は父の戦死を知る由もありませんでした。

父は日本郵船の輸送船「延元丸」でシンガポールより帰航中、南支那海にて二月六日夜中に魚雷を受け二分後に船と共に海に沈んで行ったそうです。これ以前にも二、三回撃沈され泳いで助かっていたそうですが、今回は吃水が浅いと聞き、部下を連れて書類（暗号）を取りに船室へ入った様です。常日頃一度船室に戻ったら駄目だと言っていたそうですが、局長と云う立場から吃水が浅いと聞き船室に戻ったとの事です。

戦後の母の苦労は二十代後半に、いきなり義父母と子供の四人分の生活を支えなければならなくなり、三崎と云う土地柄、早朝（夜中）に魚、主に鯖を仕入れ警察の目を逃れながらトラックの荷台に乗せてもらい、東京方面に売りに行き、帰りに煙草（キャメル）を仕入れて来て闇で売ると云う今迄の生活では考えられないことの連続でした。

私は、横浜では戦争が激しくなり入学式も勉強も無く、三崎へ来て初めて教室の机に座りました。病弱だった私は小学校卒業迄にありとあらゆる病気をし、母に心配ばかりかけておりました。世の中が落ち着き始めてから、母は交通安全協会に勤め始め、ガソリンの配給などの仕事をしながら、協会が警察の中にあつたので警察のお手伝いもした様です。ガソリンの自由販売が始まると仕事が無くなり、一転芸子組合の帳場に座る様になりました。この頃には私と母の二人暮しになっており、少しゆっくり何かをと思っていると、代り番こに入院と云った按配でした。母が仕事を止め、姉夫婦の面倒を看始めしばらくして私も会社勤務を止めて、家で書道塾を開くこととしました。この家も、母が自分の葬式を出す家がほしいと云って二人で薄給の中から積立てをし

たり、知人に借用したりして建てた家です。老後はのんびり生活を楽しもうとしておりました矢先、原因不明の病気になり、六十一才七ヶ月で天逝してしまいました。自分で変だと思いました。こちらの病院で看ていただき半年の事でした。母の希望通り家で葬儀を致しました。母の一生は、子供の頃に両親を亡くし、姉や兄、親戚に育てられ、結婚して六年位幸せの日があつた位で後は苦勞の連続だったと思います。

母逝きて三十年の日が過ぎし後の墓守り何としよう

生活に一人奮闘つま夫思い千の空にて逢えているやら

父母の齡遥かに越えし今為残したる事の多かりし

私の戦争体験

足柄上郡支部 澤村 裕幸（子）

戦没者 砂本 幹良

戦没地 ソロモン諸島

父の戦死は昭和十八年、私が四歳の時に白木の箱に紙切れ一枚が入った通知が母のところ届けられ、母と公園のブランコに乗りながら二人で泣いた記憶がある。

以下、戦争の恐ろしさ・悲惨さの記憶にあるところを書いてみたい。

昭和十九年、母は女手一つで私を育てられなかったのか、私を戦死した父の実妹の澤村清子（以下養母）の元に預けて行方不明となった。澤村家も養父が召集され養母が家業の雑貨店をやりながら自分の子供二人と私を入れた三人の子供と暮らしていくことになった。

昭和二十年八月九日と記憶しているが、昼過ぎに空襲警報が鳴り、いきなり戦闘機の機銃掃射を受けた。

当時住んでいた若松は、洞海湾を挟んで八幡製鉄所があり、そこへの空襲の通り道にあったため、雨あられの焼夷弾で爆撃され一帯の民家は全て火災となった。

初めは家の地下の防空壕に入っていたが危険なので町内組織で用意していた川の壁面をくり抜いて作っていたトンネル式の防空壕に避難し、川の水が火災で熱くなるなか一晚を過ごした。翌朝明るくなって出てみると、家の前の半地下式の防空壕は焼夷弾で潰され避難していた全員が死んだとのこと。

我が家も全焼で、終戦の日まで筑豊本線の線路脇で野宿していた。食料は町内の炊き出しと納屋に入れていた南瓜の焼けたものを食べた記憶がある。

終戦になって養母は住むところがないので砂本の本家が疎開していた大分県の日田に行くことに決め、子供三人の手を引いて若松→久留米→日田と空襲でずたずたにされた鉄道を乗り継ぎ、不通区間は歩いて何日もかけて日田に辿り着き、そこで生活していたが、養母は疲労から寝込んでしまった。

鹿児島で暗号解読兵として召集されていた養父が復員してきて若松の地所に家を再建し一緒に生活していたが実母は敗戦の混乱で行方知れずとなり、私も澤村の家から地元の小学校に通学していたが、昭和二十三年になり実母は病死していたことが判明し、澤村家に養子縁組をして現在に至っている。

幼いときの体験であるが、戦争は国を破壊し家庭を目茶苦茶にしてしまう。イラク、アフガンしかり苦しむのは国民であり、二度と戦争は御免である。

家族で渡った満州での悲しみと別れ

厚木市支部 篠田 欽次（子）

戦没者 篠田 幸一

戦没地 シベリヤ

あの戦争で私は父、篠田幸一を頼もしく思った。其れは開拓団で、現地召集されて牡丹江の兵事部へ向かう途中、図佳線沿線では牡丹江に次ぐ大きな街の林口駅の手前古城鎮と言う駅に停車していた時のことである。はるか東南の彼方から、爆音と共に数機の飛行機が見えた。日本の飛行機だ。友軍機だ。と喜んだのも束の間、その飛行機はソ連の飛行機で林口市街めがけて機銃掃射を始めた。一機また一機と上空から高度を下げながらプロペラのあたりから火を噴いている。この火を見て「やった！」「落ちる！」「落ちる！」

「友軍の高射砲で敵機が撃墜されたのだ」と喜んだが、それは全然見当違いで、高度が下がった敵機は、急上昇していった。落ちると思っていた敵機のプロペラあたりからの火は機銃掃射の火であつたのだ。

「日本の飛行機はどうした！」「友軍機は飛びたたないのか！」「高射砲はどうした！」と、誰かが叫んだ。皆同じ気持ちだろう。

対岸の火事ぐらいに思つて怒鳴ったり、野次ったりしているうちに一機が古城鎮に向かつてきた。

「来るぞ！」「来るぞ！」「逃げろ！」

誰かの叫びと共に、皆一斉に腰丈もある高さの無蓋車の枠を飛び越えて、クモの子を散らすように、めいめい勝手な方向に逃げた。私は列車の進行方向左の高梁畑へと駆けた。

「欽次、危ない！」「こっちへ来い！」父の怒鳴り声に、ただあわてて何が危ないのか分からず、父の走る方へ行つた。列車の走る後方左前方に土橋があつたので、その下に潜り込んだ。走る途中一回目の機銃掃射が、青々と茂つた高梁の葉に裂傷を残していった。もしもこの時、父幸一の言うことを聞かなかつたらソ連の飛行機によつて重傷を負つたか、死んでいたであろう。土橋の下で身を縮め二回三回と繰り返される機銃掃射を見ながら、さすが実戦の経験をした父だ、この土橋の下なら安全だと感心した。

昭和二十一年九月十四日、胸にそれぞれの出身地と行き先を書いた白布を縫いつけて、北安駅より汽車に乗った。ところが列車は慶安駅を通過した。車内は騒然となつた。

「だまされた！」

鶴岡炭坑に連れて行かれた。鶴岡での宿舎は、満州国時代日本人が、中国人労働者を炭坑で働かすために作つたお粗末な宿で、義勇隊出身の若者ばかりで、私は異常なまでの恐怖心を抱いていた。これは大変なところに入れられてしまった。何とか此処を逃げ出す方法はないものかと考えた。

昭和二十二年の秋、鶴岡炭坑在住の長野県人会があつた。その中に森岡はつえさんがいた、開拓団当時、私ははつえさんのことは知りませんでした。はつえさんは私のことを知っていたらしく、汽車の中で知り合つた佐久さんに一通の手紙を渡した。その手紙には、二年前に祖母レイ、母ウメヨ、弟金三がすでに死んでしまっていることが書かれていた。

手紙は、終戦直後の物資のない時代だったので、粗末なワラ半紙のような帳面を破いて便せん代わりにしたものだつた。

ワラ半紙に書いてある鉛筆の跡は、読むほどに、見るたびに泣けて仕方がなかった。

二十年八月九日別れて以来、ただ再会だけを樂しみに、心の支えに、辛いことも、苦しいことも、殴られても、叩かれても、飢えも、寒さも、耐え忍んで来たのに、何で私一人がこんな酷い悲しい思いをしなければならぬのか、この世には、神も仏もないのか……。

私は一番哀れなこの世の不幸を一人で背負いこんだ最も哀れな者のように思えて、来る日も来る日も人目を避けて、暗い坑内や粗末な寢床の中で涙に暮れた。森岡さんの手紙を疑い、ウソであつてくれればよい、人違いであつてくれればよいと、何度も考えた。しかし終戦直後以来、目のあたりに見てきた同胞の、悲惨な最期や惨状の現実、私の家族だけを、除いて考えることの出来ない悲しい事実ばかり、あながち人違いでもなさそうな氣になって、また悲観に暮れた。

後日、弟篠田金三は大人浪開拓団が開拓地に一番近い閭家駅に集結した際、富興屯の篠田家まで馬車と食糧を取りに行った帰り道、老街基屯を通過する時、土民に襲われた。腰に差していた篠田家の日本刀を奪われ全身に切り傷を受け、命からがら開拓団の集結地、東興屯まで逃げてき

た。

門番に立っていた金三の同級生、小林和博は、全身血だらけの金三を見たが、誰だか分からず「誰だ」と問いたですと、「篠田金三」と言うなりその場に倒れたという。

そして三日後の昭和二十年八月十三日午後、満十五歳二ヶ月と十日の短い命だった。

金三死亡後、力を落としつつも、母ウメヨと共に山河を越え、原野を歩き母の背中で行軍した祖母は連日の強行軍と、過度の疲労のため、七十歳と六ヶ月の老脚はむくんで腫れ上がり、体力つきて大森林の中の牡丹江川に差し掛かったとき、祖母は締めていた帯を解いて、母ウメヨに渡し母が泣いて止めるのを振り切って、牡丹江大河の中に身を沈めてしまった。昭和二十年八月二十六日午前十時半頃だった。金三が死んで十三日後の出来事である。

金三、祖母レイが死んだ後、母ウメヨは満州国三江省方正県伊漢通開拓団本部屯まで大八浪開拓団の人たちと、共にたどり着いた。

野宿に次ぐ野宿と強行軍の疲れ、食料不足のため極度の栄養失調になり、それに八月大八浪開拓団を出る時、身にまとった単衣一枚に加わる北満の寒さに耐えきれず、昭和二十年十一月二十四日、午後六時四十分頃、息を引き取ったと聞く。三十三歳と九ヶ月の生涯だった。

祖母、母、弟金三が亡くなった事を知った後も、父篠田幸一がシベリヤから一足先に帰っていて私の帰りを待つて居てくれるであろうと考え直し、其れを生き甲斐に言うか父の存在を頼りに生きてきた。ところが、昭和二十八年五月十五日舞鶴へ帰って見ると、父幸一は私と別れた三ヶ月後、昭和二十一年三月十二日にシベリヤ収容所で亡くなっている事を叔父である川手善人が

舞鶴へ迎えに来た時に教えてくれた。

昭和十五年の四月、生まれ故郷の家、田、畑を売り払って一家五人で満州の開拓地に引越した。そして十三年後、舞鶴港では私一人となりて、落ち着き先を何処にしようか、途方に暮れた。長野に帰っても生活の基盤となるものは何もない、みな人手に渡っている。二十四歳にもなって、親戚にも頼れない、食うためには仕事を探さねばならない。私の職業経験と言えば満州での開拓団、ソ連シベリヤでの赤松の伐採、中国炭坑での炭坑夫である。それだけでは現実の日本では何一つとして通用しない。早く技術を身につけ、その技術を職業として行くには、自動車の運転手が一番早いと考えた。金がなく、運転免許を取得するには、自動車運転手の助手になる、助手なら給料も入るし道路も覚えられ、免許証が取れる。

そんな自分勝手な淡い望みを抱いて。赤羽にある和田運輸に就職し、関東電気工事、王子運送、アマダと職を変え現在に至りました。

海岸通りと横浜国民学校

保土ヶ谷区支部 島崎 利二(子)

戦没者 島崎 長之助

戦没地 グアム島

太平洋戦争が開戦の年、昭和十六年の四月に私は横浜国民学校に入学した時でした。生れ育った所は、中区海岸通り三丁目で、日本郵船、三菱倉庫、横浜税関などがあり、父は郵船会社の支店長付きの運転手でした。

父の出征は昭和十六年十一月十八日だったと思います。父は海軍でしたので横須賀へ入隊しました。私達兄弟もよく母につれられて、一緒に横須賀へ面会に行ったことなどをおぼえています。昭和十六年十二月八日は日本国が、米国・英国に対し太平洋戦争に突入したのです。初めの頃は戦況も良かった様でしたが、戦況も激しく成り、当時海岸通りには暁部隊の兵隊さんもおりまして、家の前の広い原っぱでよく訓練をしていました。東北の人が多かった様です。その部隊の兵隊さん達も南洋方面の戦地へと、出兵することに成り次々と横浜の港から輸送船に乗り出征して行きました。しかし、戦地へは上陸出来ずに米軍のために沈没してしまったようです。

戦況も益々激しくなり、都市に居る者も安全な田舎の方へと疎開することになったのです。私

達も昭和十九年の九月になると、いよいよ学校でも疎開の話が出る様になり、横浜国民学校の生徒も疎開する事に成りました。

私も四年生の疎開組として、国民学校に集まり吉浜橋より出発したのです。桜木町から小田原に着き、皆と一緒に湯本小学校の講堂に集まりました。湯本小学校のお母さん方が、私達に作って呉れた、カボチャのふかしたのをいただき、美味しかった事は今も忘れません。宿舎に成る福住旅館へと向かいました。旭橋の脇に有る古い立派な建物です。今は国の重要文化財に成って居るとの事です。その福住で私達四年生の生活が始まるのです。一階の部屋を使う様に成りその部屋は、二宮金次郎先生が村人を集めて講義をして居た部屋でした。四年生男子は午前中学習して、午後からは裏の湯坂山へ行き、木を山からおろして宿舎に運び薪にしていました。この仕事は男子生徒の役目でした。

当時の楽しみは母との面会日です。早川の川ぞいに玉だれの滝があつて、その前で母が持ってきた色々の食べ物を弟と三人で食べた思い出は忘れられないことです。

昭和二十年八月十五日に私達学童は皆、福住の玄関大広間に集まり、全校生が正座してガーガーと雑音のラジオを聴きました。終戦の詔勅です。初めはほとんど意味が判らず広間から部屋に戻つて、先生から日本国の敗戦を知らされたのです。学童の皆んなはこれで横浜の家へ帰れるのだとよろこびました。

十月二十一日に福住で送別会があり横浜の学校へ帰つてきたのです。横浜小学校は米軍の宿舎に使われておりました。母校の横浜小学校には帰れず、本町小学校の校庭で学童疎開解散式を行

ったのです。これが同時に母校横浜小学校の解散式ともなりました。私の昭和十六年入学組は今も同期会を行っております。これから皆元気で居てたびたび皆と集まり近況の話などしたいと思います。

天国の父母へ想うこと

磯子区支部 清水 妙子（子）

戦没者 神谷 秀雄

戦没地 沖縄県

終戦から六十五年という今、焼けつくような厳しい今年の夏のさ中、終戦記念日も間もなく来る。広島、長崎の原爆投下も放映され感慨も新たに感じた。最近では戦争について語り継がれてきたいが体験者も亡くなられ、だんだん戦争についての意識が薄れているのはいけないと感じる。私も母が生きていた時は余り興味を持たずに生きていた事を今反省し、自分を恥ずかしく思い、惜しくも感じ、今からでも遅くないから戦争の犠牲者の家族として、もつと世論を興して、戦争の悲惨さをどの人にも知ってもらいたいと思いはじめた。

日本の終戦から六十五年も過ぎた今でも、戦いは世界各地で絶え間なく続いて来ている。地域戦争、宗教に関係した紛争、各国間の利害から起きた紛争、テロ、これらはいつ何処で起きてもおかしくない程、報道されている。それらの戦いにより何万人という人が亡くなりましたというニュースだけ聞いても、人数だけで何も感じなくなってしまう自分、本当はその犠牲者一人ひとりには、何人もの家族が悲しみ、それからの人生が一変してしまうのに・・・

一体なぜこのように殺し合いになってしまふのか。古代からの戦いを振り返っても、武器こそ違っても殺し合うことには変わらないのだ。現代になればもつと兵器も威力があり恐ろしい。

さて六十五年も過ぎた今、当時三歳だった私は六十八歳となった。三歳で父は戦死した、沖縄戦での戦死と聞かされていた。沖縄で死んだ父の気持ちを考えると可哀想でならない。

昭和二十年五月、沖縄は激戦の最中だった。父はシュガーヒルと呼ばれる首里という地で、第一小隊長であつたらしい。斬り込み隊長であつた為、負傷していたにもかかわらず、二十日間隊と共にあり、米軍の猛攻撃で亡くなった。

私達残された三人、二十九歳だった母、三歳の私、一歳の妹は父が出征した地、石川県金沢市にそのまま残されました。東京に戻ることもできずに、そのまま金沢で生きることとなった。母はどれ程途方に暮れたのだろう、私はその訳さえも知らずに、女三人の家庭と思い暮らし育ててもらった。母は無口の人だった。愚痴も言わずに毎日働きに出ていた。父がなぜ戦争に行き、どう戦死したかなど語る暇もなかったのかもしれない。今思えば残念なことに私もその事を特に聞こうとしなかった。

その母も二年前に亡くなってしまった。亡くなつてから私は母の事を思い大いに自分を反省した。もつと優しく接してあげればよかった、辛さを一人で我慢していたのだろう。娘達を育てるのに必死だったのだろう。今になって私は「お母ちゃんごめんね」と手を合せている。あの頃は貧しい生活だった。どの人も食べるために大変だった時代、我が家も惨めな生活だった。母は昼間はいない、一部屋だけの間借り生活、冬の暖房は火鉢しかない、火鉢の上にまたがって暖を

とつていて母に叱られたのも思い出だ。でもこんな侘しい生活も私にはその環境が私に与えられた生活と想っていたし、私なりに貧乏や欲望は我慢していたように想う。今となればあの貧しさが懐かしい。父については可哀想な死に方だと思い、母についてはよく頑張つて九十年生きてくれたと、二人を尊敬せずにはいられない。

母が死にそうになってしまった頃、私は自分の父親の事も、もつと知らねばと思うようになった。母が亡くなつてから出てきた遺品、数は少ないが、戦記や戦場からの便り、出征する前に書いた母への生活の仕方の指示書、これらを発見した私は、父の筆跡を無中で追い、父の姿を想像した。きつと父は死ぬと解つて戦つていたに違いない。それが哀れに思えた。母が亡くなる迄は私は沖縄の慰霊に行きたいとは思わなかった。なぜかそこを見たくない気持ちが強く絶対行かないときめていた。しかしある時、急に心が変わった。「行かねば私」と、そして私は友人と沖縄の平和の礎を訪れた。そこで父の名を探し、その前で手を合せた。涙が溢れてしまった。「今迄お参りに来なくてごめんなさい」と心から手を合せた。私は戦争の犠牲者の一人として、これから先、日本の平和を祈り、戦争とはどういうものを人にもたらしたか、この悲劇は繰り返してはならず世界中の紛争も早く解決出来るように、自分も関心をもち学び続けなくてはいけないと思つている。

短歌 我が家の戦中戦後史

中原区支部 須賀 一枝(子)

戦没者 須賀 一利

戦没地 中支

父は征く 三児の守り 両の肩 覚悟の母は 二十四歳

父のひざ 肩車無く 妹は 言葉少なき 子になりてゆく

一歳を 数えず逝きし 息子の供養 頼むと拾圓 戦地より届く

防空頭巾 もんぺに紙の ランドセル 入学嬉し 国民学校

終戦の 前夜ふるさと 熊谷に 炎の筆が 地獄絵を描く

常ならぬ 予感に防空壕開けず 子らの手を引き 母は家出づ

突如空に 敵機の轟音 迫り来ぬ 我が家の辺り 炸裂炎上す

火だるまの 転げ叫ぶも 助け得ず 人群れなだれ 修羅の道行く

春四月 胸躍らせし 学び舎やよ いま痛ましき 避難所となる

一様に 影失ないし 焼け跡は 片付は遅々と 皆日暮れ待つ

八月の 陽ひは焼け跡に 居座りて 爛たれ井戸ポンプ 気丈に立てり

避難所に 叔父訪ね来て 同行す 今日より叔父は 四家族よかぞく養う

叔父宅に 身を寄せ母は 熊谷に 貸し間探しぬ 自立見据えて

再開の 国民学校 改称の 小学校は 徒歩一時間

机一つ 二脚の椅子に 三人掛け 朝の部昼の部 他校と交代

消息を 役所に問うも 埒あかず 易者は母に 父無事と告ぐ

終戦の 三週間前 父は戦死と 公報届く 明くる八月

一枚の 赤き紙もて 父は征き 土くれ一つと なりて帰りぬ

町はずれ 市営の家は 荒壁の 六畳一間と 四畳の土間と

ミシン箆笥 叔父の家より 引取りて 母は洋裁学校に通う

ミシン踏む 母は手あぶり だけの暖 仕立ての仕事 ぼつぼつと有り

焦らずに 母に甘えよ師は 諭す 高校出すは 母の悲願と

授業料 また忘れたか 担任の やや苛立ちの ため息一つ

高校を 晴れて卒業 明日からは 一家の柱 誓い新たに

あの人　は　だあれと父の　遺影指す　ああ母よ母　ただ愛おしき

春よりも　秋が好きよと　常づねに　その深む秋　母は旅立つ　（行年九十歳）

みんな元気ですお母さん

葉山町支部 鈴木 マサ（子）

戦没者 鈴木 繁治

戦没地 フィリピン

春蘭漫にして桜花咲き乱れる昭和十九年、遂にくるべき召集令状が父のもとに届きました。母も時節柄覚悟はしておりましたが、生爪を剥がされるように父は歓呼の声に送られて戦場に出立しました。その時私は小学二年生、妹達は五歳と一歳、父と生活が長かった為に私には思い出も多かったが妹達には臆げ、ましてや末の妹は顔さえも知らず、又思い出もないままに父と別れる事になりました。何の為の旅立ちか知らぬ妹達は父の懷に抱かれておりましたが、父はこれがこの子達との今生の別れ、そして、我亡き後の母娘達の生活、その思いだけが父の胸中を駆け巡っていた事と思います。

それから暫くした或る日、母は私達を連れて千葉の我孫子連隊の父を尋ねる事となりました。言わずと知れた最後の面会、母は既に察知していた事と思います。前夜から父の大好きな饅頭を作っていました。物のない時代故、上等なものではありませんが、妻が夫に捧げる別れの盃ならぬ別れの饅頭、父は一歳の末妹をあぐらの中に抱きかかえ、子は父に頬ずりしながら愛しんでお

りました。やがて、日も西に傾き定められた面会時間も束の間に過ぎ、父は私の頭を撫でながら「母ちゃん言う事をよく聞いて、妹達の面倒をみるんだよ」と最後の望みを託されました。衛門まで見送りにきた父は私達が見えなくなる迄手を振り、私達は振り返り振り返り別れを惜しみました。

やがて苛烈を極めた戦争も終焉を迎え多くの兵隊さん達の復員状況がラジオ、新聞で報道されるようになりました。いつ帰って来るかと、私達家族は大きな期待を持ち続け待つこと一年、父は昭和二十年二月二十四日フィリピン・コレヒドール島、マリントネル内に於いて自爆玉砕したとの戦死公報が入ってきました。張りつめていた気持ちは一辺に吹き飛び母は泣き続けました。つられて私達も母の膝に縋って泣きあかした事を忘れません。

一家の大黒柱を失った私達の生活は惨なものでした。僅かのたくわえはまたたく間に底をつく始末、食卓にあがるものといえばさつまのふかし芋、それにお粥、どうやらこうやらの生活で飢えを凌いでおりました。

やがて私は中学を卒業しました。一家の為に就職試験を受けました。しかし、当時の社会では「父無し子」は採用してくれません。母も私もまさに奈落の底に突き落とされた思いでした。それから母は近所の農家へ日雇としてお手伝いに出かけるようになりました。私は暫く家事を手伝う事となりましたが、渡る世間は鬼ばかりではなかった。ご近所の奥様のところで住み込みで働くようになりました。初めていただいたささやかなお給金、まず母に手渡すと、母は亡き父の

仏壇に捧げました。「お父さん、マサが働いてくれました」と言い乍ら大粒の涙を流していました。

歳月は流れ妹達もようやく働く身となり、そして結婚にこぎつける事が出来ました。母もやつと責任を果たし、やれやれと思つた矢先四十八歳の若さで脳出血に倒れ半身不随となつてしまいました。しかし、けんめいなリハビリで不自由ながら歩行が出来るようになりましたが、それも束の間、六十三歳にして家族に見守られながら来世へ旅立っていきました。神の恵みの薄かった母、ひたすら苦勞しに此の世に生れてきたような母、そんな母が哀れでなりません。「でもお母さん娘達三人、仲良く暮らしていますよ。安心して」

亡き母の詠める

相模原支部 鈴木 勝（子）

戦没者 鈴木 興作

戦没地 フィリピン沖

うす茶色に変色した小冊子「青山」、母千代が戦死した父の霊に捧げんと、昭和三十八年に発行したものだ。随想と短歌の中から心に残る数首を紹介して、生きていれば百二歳の母と写真でしか知らない父を偲びたい。

「はじめに」

昭和八年一月あなたのもとに嫁しづいたものの、それは十年の短い縁の糸でしかなく、あなたはある大戦で子供と私を置いて南の海に散ってしまいました。その日からは一本の香をたくいとまも許されぬ忙しきときびしい日々でした。（中略）今ここに退職辞令を手にして、今日からはゆつくりと経も読み香もたける安らぎを覚え、新しくあなたのおそばへ坐ったような気持ちにされました。二十一回忌を迎え、青山の思い出の一つを記してあなたのご冥福をお祈りいたします。

千代

ベル悲し 旗波がくれ出征の 夫の姿は 見えつかくれつ

夢ならず 夢にあらずなと 祈りつゝ 夢なりしかも 夫の帰還は

今日よりは 大きな海原 吾子と行く われまもりませ 君がたましい

戦死せる 夫の遺骨を 迎えむと 雨の降りしく 横須賀に來し

—妹（叔母）の詠める—

波路遠く 今かえり來ぬ 白妙の み箱にそそぐ 雨一しきり

子らの為 茨の道も 越え行かん くずれんとする 心むち打ち

亡き夫を 恋しく憶う 今宵なり 遠くにきこゆる 祭りの囃子に

—三人の息子を詠む—

時雨降る 休日一日 奥にありて 一雄は囲碁の 秘手をひもとく

解禁を 前に竿の 手入れする 国雄はも早 鮎のかゝりし顔

丹沢の キャンプファイヤーに 頬を照らし 勝は唄に 酔ひつゝ居らん

うら盆会 波路はろけく 越えて来し 夫がみたまか 水色の蝶

吾が職場 最後を弾ける 鍵盤に 秋しのびよる 土曜日の午後

二十年を 通い勤めし 吾がつとめ 退職願もて 終止符をうつ

表彰状 遺影と並べ かゝげれば 笑めるがに見ゆ 愛し吾が夫 かな

待望の わが家を建つる 槌の音 祈りと夢は 今むくいらる

紙面の都合で三十頁の中のほんの一部ですが、文や歌を読む度に涙し同時に生前の母に何の孝

行もしてあげられなかった自分を悔やむ・・・その私も母と同じ教職の道を退いて十年、古希を迎えた。

(追) 後に短歌会主宰の鈴木義人氏の詠める

歌に生き 心ゆたかな 人なりし 千代女に初春の 祈り捧ぐる

おやじ
親父どの

秦野市支部 清野 道郎（子）

戦没者 清野 知栄

戦没地 フィリピン

私の親父は三十歳にして召集され、稲穂の出始めの頃、七月三十日緑一色の山形県小国の故郷より出征して、八月一日舞鶴入隊、それから佐世保の港から戦地へ出て行つたきり二度と日本の土を踏むことも無く、遠いフィリピン・コレヒドール島で戦死しました。

戦死の公報と白木の箱には何にも入ってなかったと聞かされました。実際にどの様な所で、また本当に戦死したのかも全然わからないまま二年程過ぎた頃、たまたま同郷の人で同じ部隊で戦い運良く生きて帰って来た人が居るとどこかで聞いて祖母がたずねて行ったら、本当に同じ所で戦った人だったそうです。祖母が色々聞いた話として、私が中学生になった頃に話してくれました。佐世保から出航、途中敵に遭遇することもなく上陸することが出来たそうですが、海軍が陸に上がっても？昭和十九年頃は戦う武器も乏しく、敵の攻撃にジャングルの中を逃げまわっている様な毎日だったそうです。戦死した二十年一月二十三日、大変いい天気で食べるものを探してきて、車座になつての朝食後、自分達の故郷の話で楽しいひと時に敵の爆弾が真上から落ち

て来て、三十人位の中で運良く助かったのは三人程だったと話してくれたそうです。そんな中で、運良くその三人の中の一人が同郷の人だったので、私の親父の最期を聞く事が出来たわけです。私は中学卒業後、自立する為に今の職業（タイル職）に就きました。小さかった頃は家には祖母、叔母二人での生活でしたが近くの親戚の人達、成人となつてからも好い人達に恵まれ、親がいなくても寂しいと感じたことは少なく過ごして来ましたが、時には、こんな時、おやじが生きていたら何んて言うのかな、なんて思うことはあります。

私は走るのが好きで、各地でのマラソン大会、仲間で参加する駅伝大会などで走った夜など、「おやじ、今日はゴール前で一人抜いて入賞出来たぞ」とか、また「俺が応援している所でお前二人に抜かれ駅伝メンバーの人に対して自分が申し訳ない様な気分になったんだからな」そんな話をし乍ら酒を酌み交わすことが出来なかったのがちよつと残念だったことです。

私も親父の倍以上も年を取りました。親父のお陰かも知れませんが、いたって健康で楽しく毎日過ごしています。あと何年後かわかりませんが、私があの世とやらへ行った時に運良く親父に会えることがありましたら、そちらの世界の先輩として手招きして下さい。私は親父の顔はたった一枚の写真でしか知りません。また呼びかたも、どの様に呼んで良いか迷います。「父上」、「おとうさん」、「おとう様」やっぱり「おやじ」と呼ぶことにします。その時は私の知っているふるさと（ふるさとん）のこと、今の日本のこと、私の子供や孫のこと、おやじの孫、曾孫のことなど話して聞かせます。いつの日になるかまだわかりませんが、その日が来るまで私はこの世で頑張つて生きます。

三枚のハガキが語るもの

相模原市支部 関根 伸一（子）

戦没者 関根 栄吉

戦没地 サイパン島

朱色で大きく「返信不要」これは戦死した父の生きた証として残った三枚のハガキの一枚に書かれた文字である。

昭和十九年六月一日に名古屋の駐屯地から投函されている。その後、七月十八日戦死の報が届いており、約一カ月後には亡くなっていた事になる。四行だけの文面は、預金通帳番号、自分が元氣であること、家族に対しては体を大切にするようにと書かれてある。父は覚悟の上とはいえどのような思いで書いたのであろうか。

四月九日のハガキには「面会禁止」の押印があり出兵準備が行われていることが伺える。文面は駐屯地近くで「入学式」を目撃し、戦友達も故郷の家族に想いを馳せていた状況などが書かれている。久しぶりに世情というものを垣間みたのかもしれない。前年の二月の一通は、面会に来たときの子供のことなどについて書いてある。必ず書いてある文面は近所の知人に対する配慮の言葉であり、常に留守宅を案じていることが伺える。また、約一年四ヶ月間に投函された三通の

投函場所が異なっており、静岡県御殿場、茨城県勝田、名古屋市と転々としていたことが分かる。

この三枚のハガキは母の遺品の中にあつたもので特に印象深いものを残したのだろうか。

母が何度も読み返したためかヨレヨレになり文字も薄れ判読すら出来ない部分もあるが、父が本土を離れるまでの動向や父の深い愛を感じさせる貴重なハガキである。

父は「サイパン島」で戦死したとされているが、死亡通知では「中部太平洋方面」の戦場で戦死したとあり、日付は七月十八日となっている。サイパン島の玉砕は七月七日とされており矛盾を感じるが、母は帰還した戦友からサイパン島への上陸までは一緒であつたと聞いたようである。因みに私の誕生日は七月十五日、父は二歳を迎えたことを知り得たかは不明であるが何かの因縁を感じる。戦時であり事の真偽は質すべきもないが、父があゝ戦争で亡くなった事実は消せるものではなく既に六十五年余が過ぎてしまった。

戦後の混乱期に人並み以上の苦労を余儀なくされたかもしれない我々遺児も、高度成長という歴史を作りながら年齢を重ねてきた。戦後体験を含め記憶は徐々に薄らいできており「平和ボケ」とさえ言われる昨今ではあるが、消えることの無い事実として後世に伝えてゆくことも我々の責務かもしれない。

今年は戦後六十五年ということとでメディアが種々取り上げていたが、果たしてどれだけの人々が注目し認識を新たにすることが出来ただろうか。解って欲しいことは、赤紙の他「返信不要」のハガキを受け取りそのままとなった留守家族が多く居たこと、そしてこれは「死への道標」であつたことを忘れないでいてほしいと思う。

父亡き後の戦後の生活体験

足柄上郡支部 瀬戸 恵子（子）

戦没者 瀬戸 隆良

戦没地 ラバウル

私の父は室生神社で近所の人達が両側に並んで日の丸の旗を振って見送って下さる中を一人ひとりに母、妻、子供を頼むと声を詰まらせ出征した。

私は五歳、母の着物をこわし近所のおばさんに洋服を作ってもらい父を見送ったことが薄っすらと思い出される。ただ漠然と戦争とはこんな無残な事とは知る由もなく月日は過ぎ去った。

母は祖母、私、妹と四人家族と蜜柑八反、畑三反と細い体で無理したため胃下垂になり三日働くと三日具合が悪いという日々。小学校から帰り今日は床に臥せていないかと心配しながら玄関の鍵が締まっていれば畑仕事とホットする。母は小さな黒板に夕食のご飯三合炊く、お風呂わすす、おやつはふかしパン、ふかしいも等母は畑に行くとき記してあった。

友達に神社でかくれんぼ石ケリと遊んでいる姿を見て羨ましかった。六歳の頃、かまどに薪がもえなくいぶくて目をこすりながら、最初は固かったりしたが回数を重ねる毎にふつくと美味しく炊けるようになった。

土曜、日曜日は友達とやせんまを背負って山に杉葉拾い、薪集め、母は草刈と汗が体から流れ出ている。小さいながら私はこんなに汗が出て大丈夫かと心の中で心配していた。妹は小さな手で食事係コロッケの下準備をし、油はあぶないので母が揚げる。働いた時の美味しさは格別、妹は自信満々。母は近所の井戸端会議にも身を寄せることなくいつも小走りで働いてくれた。

父がいなくても人並みにと口にしていた。私も田植えの準備には牛の鼻どりをさせられた。祖母の編んでくれたぞうりをはいていた。廻りを見ても父親と息子、父が居たならば母は病気になるまで頑張らなくてもすんだのに。又どんなに大雨でも母は山に牛の草刈でかごいっぱい背負い、祖母はもくもくとつぎはぎのモンペをはいて母の手助けをしていた。母は何事にもたやさぬ気ばりを・・・国の為に体をささげた父を喜んで迎え、思う存分抱きしめてあげたかっただろう。

私が物心付いた時にふと見せてくれた戦地から送られてきたハガキ、細かくぎつしりと書き続けてある言葉は常に「おふくろと子供をたのむ、たのむ」と何よりも母を勇気づけていた。母にとっては宝物で必ず現地のさし絵がかいてあった。自分の事は何一つ書いてなく今思うと辛かったのだろう。

母も近所親戚の人達に親切にしてもらい、みんなに支えられ農繁期も無事に片づいていった。母は必ず恩は自分が食わなくても返していた根性ある日本女性の一人だったと感謝する。母を思うと好きな道も言い出せず、ただひたすらに私は母の片腕となり家庭を支えてきた。私達のような辛い目にあわないように次世代に渡り戦争は絶対しない明るい日本となるよう応援したい。

日中友好訪問に参加して

金沢区支部 田野井 信行（子）

戦没者 田野井 茂

戦没地 中国・湖南省

私は昭和十七年生まれ、おやじは昭和二十年十一月二十一日に中国湖北省漢口で戦病死となっている。

勿論、おやじのことは何も判らず、おやじのお墓には遺品らしき物は何もない。代わりに小さい石ころが埋葬されている。若い頃より、いつかおやじの最期となった『地』に行って自分の眼で確認をしたい。現役をはずれやっと今回その夢が実現出来ました。

九月も中旬を過ぎているのに中国の内陸部は連日熱く三十七〜四十度とのこと。おやじは輜重兵として湖北省の漢口から武昌、湖南省の岳陽、長沙、衡陽、来陽そして広東省との境界に至る鉄道、道路、空港の物資を運搬、警護する任務に携った。日本で言う、東海道線、国道一号線、羽田空港等の大動脈に相当する主要な要衝地帯であった。今でも主要市街から一步外へ出ると荒れはてた緑の丘陵が続き、ここを当時は何十キロも最終戦地に向かって行軍したとのこと、伝染病にでも掛からないことが不思議なくらい。時間の経過とともに戦況も悪化してきた。おやじは

どこで発症したか判らないがアメーバー性赤痢、外痔核を患い身動き取れない状態にあつたのではないか？ 県の戦没者原簿によると、湖北省・中支漢口の第一七五兵站病院に入院、病死となつている。発病地点と一七五兵站病院との距離は最大で七百キロにもおよぶ、この戦況の中、本当に病院迄担ぎこまれたかは疑問が生じる。これは現地に赴つての実感である。

今回、おやじの最期の地点に辿りつき、第一歩を踏みこんで「来てよかつた、ここなのか？」ホテルの一室での慰霊祭は、本当に厳肅に弔文の朗読には感無量、声にもならなかつた。当時在つたとされる第一七五兵站病院の跡地より土、水、空気を採取し日本に持ち帰つた。

早速おやじのお墓にそれらをまいて六十二年振りの帰国を果たしてやる事が出来た。おやじもこれで成仏できるだろう！ 息子として親孝行が出来たかな！

我々と同じく戦争遺児となつた仲間は数多く、現地慰霊を希望している人は多いはず、今日の日本の経済力からしても希望者の全員に叶えさせてあげたいものです。国としての責務ではないか。

悲しみを乗り越えて

逗子市支部 田村 美智代（子）

戦没者 石黒 新一

戦没地 ビルマ

今年の七月二十七日は、空は青く、雲ひとつない快晴でした。この日は父の六十五回目の命日です。毎年この日が来ると、あと一ヶ月元気でいて呉れたら終戦となり、私達母子の許に帰って来てくれたのではないかと思うものです。

父は、母と兄八歳、私五歳、妹生後五カ月の子供三人を残し召集されました。

私には、父に肩車をしてもらい上野駅で別れたことが微かな記憶として残っているだけです。「来年は幼稚園だね。お母さんの言うことを良く聞くんだよ」ビルマからの父の最後の手紙に、私のことも書いてありました。

昭和二十年三月十日東京大空襲で一面焼野原になってしまいました、昭和二十二年に疎開先より元の住所に、祖父母と私達母子四人は戻りバラックの家を建てて、父の帰りを待つことになりました。それから、母は一家が生きていくために、自分の着物をリュックに詰めて、東京近郊の農家へ米、野菜等を分けて貰うため、慣れぬ力仕事にも父の帰還を信じて一生懸命に頑張つて

いました。

その矢先、母の許に父の戦死の公報が届き、それまで気を張って頑張っていた母も過労が重なり体調を崩す様になりました。

昭和二十四年十二月上野アメ横が大火となり、我家の庇にも火の粉が飛んできて類焼となっていました。母は重なる不運にショックを受けて寝込む日が多くなり、翌二十五年一月六日三十六歳の若さで黄泉の世へと逝ってしまいました。私達兄妹はどうとう親無し子となってしまうのです。幸いにも祖父母が健在でしたので、親代わりとなり私達を育ててくれました。

私には、生涯忘れることの出来ない悲しい思い出があります。小学校六年生の社会科の時間のこと。両親が新聞のどのページを読んでいるのか？を聞いて来る様にとの宿題がありました。次の時間に、それぞれが、親の読むページについて、先生の問いに手を挙げてゆきます。手を挙げる私に、先生が「宿題を忘れて来たのか？」と皆の前で問いました。その時「お父さんもお母さんいません」と言って泣き出したことを今でも鮮明に記憶しています。

また、中学一年生の「母の日」のこと、学校で赤いカーネーションが配られました。母のいない私だけが白いカーネーションでした。白いカーネーションの謂れを祖母に話せずにカバンに入れたままにしていました。他人から見れば些細なことかも知れませんが、親の無い子はなんでもこんなに差別されるのかと、この二つの出来事は、少女時代の悔しく悲しい思い出として、人にも言えず心の片隅にずっと仕舞っておいたことです。

父母無きあと、不自由なく、大事に大事に育てて呉れた祖父母も、私の成人を待たずに亡くな

りました。今、幸せであることを感謝しつつ、二度と戦争を繰り返してはならないと強く思います。

飛ばない竹トンボ

足柄上郡支部 内藤 剛(子)

戦没者 内藤 利雄

戦没地 フィリピン

父の位牌の表には戒名のほか、「昭和二十年七月八日」裏には「故陸軍兵長・父の氏名・於比島ミンダナオ島シラクオ方面・戦病死」と記されているが実際には死亡の日も死因についても確たるものではなく、いつ、どうして死んでいったのか何も判っていないのではと思っている。

父が召集されてから戦死の知らせが届くまでの情報は極めて少ない。先ず、私自身満三歳と数ヶ月で別れた父の記憶は全くとってよいほど無い。

唯一、家の裏の竹藪から切り出した竹片を削り、私に竹トンボを作ってくれている男性の姿が記憶の隅にかすかに残っている。しかし、その男性が父であったかどうか判然としないし、竹トンボが飛んだ記憶も無い。

父は母が昭和十九年十二月生まれの妹を身ごもったことも知らずに出征し、その後の母からの手紙も受け取っていないと思われる。

父は内地で三ヶ月の教育を受けた後、家族に会うことも叶わず行き先も知らされないまま軍用

列車に乗せられたようで、列車がたまたま国府津駅に停車した際、そこに居合わせた駅員に一冊の手帳を託し、それが義理の叔父を経て家族の許に届いたが、それには主に農事の手順等が書かれ、どこに向かっているというようなことは何も書かれていなかったそうである。その唯一の遺品ともいえる手帳の在りかも、今は老いた母の記憶からは消え去っている。

フィリピンに派兵されているのを家族が知ったのは戦地から家族や親族に宛て、何通も出したのであろう内の一通が父の妹の嫁ぎ先に届いたことによるもので、それ以外は家族の許にさえ一通の便りも届いていない。

昭和二十年七月五日には米軍のマッカーサー元帥がフィリピン全土の解放を宣言した。(前年の七月七日にはサイパン島の日本軍陸海守備隊が玉砕した)とされており、父もその頃死んだものとされているが、実際にはその前に餓死していたのではないかと思っている。

なぜなら「フィリピンでの戦没者総数約五十万人は中国全土でのそれを上回る最悪の戦場。それも餓死者とゲリラ攻撃による犠牲者が多いことに特徴がある」と言われているからである。この様に過酷な戦場で、三十五歳になり、体力的にも若い兵士に劣る父が生き残ることは極めて困難で、出征前には二町歩を越える畑を耕作し、食糧生産に励んでいた人間が餓死していったと思うと悲憤の極みである。

従って、遺骨や遺品は勿論無く、墓には名前が記された一片の木端が葬られている。

こうして、十一歳を頭にした五人の子供の養育と農地の管理は母と六十歳の少し前で壮健であった祖父の双肩に重くのしかかった。

戦後、日本は酷い食糧難と物資不足に見舞われたが、幸い農家のため、都会の住民に比べれば少しはましであった。買出しに来た人達は捨てようとしていたさつま芋や里芋の葉や茎までも持ち帰り、代わりに泣く泣く手放したであろう品物を置いて行った。お陰で私は小学校の時には、こうして得たその時代には不相応な革製のランドセルを背負っていた。とは言え、叔父たちや東京からの疎開で、まだ我が家に居た私の従兄弟等を加えた大家の生活を支えるため、母や祖父は朝早くから夜遅くまで働かなければならず、姉達もその手伝いや幼い弟妹の子守にと立派な労力となっていた。

今、認知症の進んだ母は「自分一人が働いた」といつているが、実際には家族皆で出来ることをしてきたのである。特に七十七歳で亡くなる二、三ヶ月前まで働いてくれた祖父に対しては本当にありがたく思う。同時に悲惨な戦争を起こし、徒に続行させた当時の為政者に対し、強い憤りを感じている。

祈り

神奈川区支部 永井 由美子（子）

戦没者 永井 敬司

戦没地 フィリピン

平成十八年八月十六日、母は八十七才の生涯を閉じました。それはまさに戦後と共に生きてきた人そのものの人生でした。

私が十才の頃、母と共に京都へ行った事がありました。私にとっては唯の旅行でしたが、母にとっては一つの区切りをつける大切な旅でした。

父はルソン島で、多くの方々がそうだった様に終戦時に隊にいなかったとの理由だけで、遺骨も身近に確認者もない「戦死」でした。

二十七才で出征し結婚生活も一年余り、乳飲み子と共に残された母にとって、その死はとうてい受け入れられるものではありませんでした。

ジャングルのどこかで彷徨っているのではないか、現地の人に助けられて何時かは帰ってくるのではないか……喉が渴いているだろう、お腹をすかせているだろう、と多量の水と陰膳を供え父の無事帰国を祈る日々が十年続きました。

十才になった私は、母にとって唯一頼る事の出来る存在だったのでしよう。「由美ちゃんお父さんはやっぱり亡くなったのね、きちんと供養してあげましょう。その前にお母さんの気持ちを整理する為に一緒に旅行に行つてね。」

その時の母の気持ちがどれ程の決心だったのか、当時の私に分つていたのかどうか定かではありませんが、その時の言葉と旅の思い出は今でも鮮明に覚えています。

それから母の人生は、父への祈りそのものでした。

戦後間もなく教職に就き、小学校の教員として三十数年無事勤め上げ、私の夫も養子縁組をしてくれ、孫も男の子二人、ひ孫も男女一人ずつ生まれ、人様から見れば苦勞の甲斐があつた幸せな半生だったかも知れません。唯私には、本当に母は幸せだったのだろうかという思いが、いつも心の片隅から離れません。

毎朝毎晩父の為に読経し、片時も父の事を忘れた事のなかつた心の中に、六十一年間共に暮らした私にも量る事の出来ない深い悲しみを、終生抱えて生きて来たのだと思います。

母に限らず人は多くの悲しみ、苦勞を背負つて生きています。母が亡くなつて母が通つて来た道を歩きながら、強くその悲しみを思うようになりました。

常に私の幸せを祈つてくれた母でした。

今、私は毎朝仏壇に手を合わせ、「お父さんと逢えましたか、幸せに過ごしていますか」と母の成仏を祈る日々です。

父の戦死 家族 そして今思う事

鎌倉市支部 中村ヤスヨ（子）

戦没者 吉田 西松

戦没地 旧満州

私の父は昭和十九年に出征し、二十年に戦死したと聞いております。私が四才で弟が二歳の年でした。父は常日頃からお国の為に役立ちたいとの願望を持っており、晴れて出征できる事に誇りを持って戦地へ赴いて行ったと、私が大きくなってから母より聞きました。今私が大人に成って考えますと、妻と母親そして幼子を置いて戦地へ赴く心中はいかばかりかと察し、涙がこぼれます。私には父の思い出は無く、顔さえも覚えておりません。祖母から聞いた話では、父は電機会社に勤務しており八人の部下を束ね係長として立派に役職を果たし、将来を嘱望されていたとの事です。そして家庭では人一倍子煩悩であったようです。

昭和二十年の戦死の知らせがあった時でしょうか、母と祖母が声を上げて泣いていた家の廊下での光景を、私はキョトンとして見ていた記憶だけが鮮明に今も残っています。我が家に一大事が起きた事も分からない子供でした。今振り返って見ますと、父の戦死の後、祖母と母は必死になつて私達を育ててくれました。特に母は苦労のあと五十二才で亡くなる迄、辛い辛い人生では

なかったかと今にして思いを寄せております。この度記念誌に投稿できますチャンスを頂きまして事で、亡き父母への思いに向き合える事に成り感謝でございます。私は靖国神社への参拝の折「お父さん」と心の中で呼びながら深く深く頭を下げます。そして父の心安かれと祈っております。これ迄色々と遺児としての気持、そして母や祖母のお話を致しました。

ふと現在の日本の状況を省みると暗澹たる気持になってしまいます。日本国の未来の為に自らの命を捧げた父達は、この日本の今を見たらどの様に思われるでしょうか。現状は国民が戦争のあった事すら忘れ、新聞等のマスメディアは日本が悪かったと宣伝し、国民の代表である総理をはじめ閣僚達が靖国神社への参拝を中止する。どうしてこの様な情けない国になってしまったのか、英霊の嘆きが聞こえます。A級戦犯が合祀されているとして参拝しないよう中国、韓国から云われ反論もなしでやめてしまう日本の指導者はあまりにも残念な方々です。

A級、B級、C級戦犯という言葉は日本にはありません。東京裁判で戦勝国がつけた名称です。戦争には勝と負があります。だからと言って勝った方が勝手に断罪する事は許されるはずがありません。

昭和二十八年八月の閣議で日本には戦犯はいないと言う決議が、社会党、共産党を含め全会一致で承認されています。戦勝国もこれを認めています。この重い決議を今こそ内外に示し、日本国民共通の思いとすべきだと思います。日本国が悪かったのだと唱える進歩的文化人の方達に、戦後の自虐史観は間違いだと勇氣を持って正して行く必要があります。それでなければ、父をはじめ靖国神社に祀られている英霊が安らかに鎮まる事はありません。主義主張を超えて政治を司

る人々が、日本国の為に命を捧げた方々に「ありがとうございます」と感謝の気持ちを捧げてほしいと願っております。英霊と私達の心安まる靖国神社は大切な所でございます。

面会した父は雄々しかった

都筑区支部 野崎 逸郎（子）

戦没者 野崎 利守

戦没地 フィリピン

父が三十五歳で戦死して、今年で六十五年経つ。ひとり残された母は、父のあまりにも早かった死で、その寿命の残りを全部もらったのであろうか、百歳を目前にして三年前に他界した。父が三十四歳で応召した頃、私たち一家は九州の北端、当時の門司市（現北九州市門司区）に住んでいた。母は三十五歳、私は国民学校（現在の小学校の当時の呼称）五年生であった。

この港は、明治二十七年（一八九四年）の日清戦争から、中国大陆への門戸として、貿易港としての発展を遂げていた。中国大陆に戦火が広がり、さらに太平洋全域に戦場が広がるにつれて、門司港は軍事輸送の拠点となり、輸送船の出港地としてフル活動した。

父が兵隊に取られてから、父と面会したのはこの関門海峡を挟む南北の港、下関港と門司港の二度だけである。自宅で別れていらい一度も面会できなかったご遺族も多くおられるのに、輸送船の出港地であるという偶然が幸いして、父と会うことができたのはせめてもの幸せであった。昭和十八年六月十七日、私は学校から急遽呼び戻された。父から、「下関から満州に出征する

から面会に来い」と連絡があった。母と私は、あたふたと関門連絡船で対岸の下関駅に渡った。熊本の野砲連隊に入隊したのが同じ月の三日、まだ二週間しかたっていない。行き先は不明とかで教えてもらえず、結局分かったのは七月六日に届いた軍事郵便で、駐屯地は満州の北の端、ハラルというソ満国境の町だと分かった。

下関駅の引き込み線での面会時間は三十分。そのとき母は父に尋ねたのは、私的制裁で何度くらい殴られたかということだった。「兵隊は殴られれば殴られるほど強くなる」と平成の今日でも戦友会や追悼式に出席の生還者が、このような言い方をされる。戦争中の留守家族は、夫や息子や兄や弟が、兵役と言う名の拘束の環境の中で、どんなにつらい目に遭っているかを耳学問で良く知っていた。自分の夫や息子が、どのような失敗で殴られているかをいちばん心配していた。庶民から突然召集されて、人殺しの訓練を受けさせられ、その出来が上官のお気に召さねば、見せしめに殴られるということは当時公然とではないが国民周知のことであつた。こともあろうに、母はそんなことを父に尋ねた。父はきつとして「馬鹿野郎」とひとこといった。「そんなことを俺がお前に言えると思うか」そういう意味の「馬鹿野郎」だったのだろうと幼い私は受取った。その一年五カ月後、父は再び関門海峡を経由、今度は門司港から行き先を告げずにルソン島マニラに向かい、中部ルソンの国道三号線上で米軍戦車と交戦して死んだ。^{めかり}母とともども、中隊の海路平安と武運長久を祈りに参拝した和布刈神社の境内で握った父の手がとても温かかった。

短歌

相模原市支部 野澤 とみえ（子）

戦没者 廣木 虎雄

戦没地 東部ニューギニア

おくつきも 千鳥ヶ淵も靖国も 父の影無く巡拝の旅に出ず

無き母が 父を慕いて一日も忘れえぬ国 東部ニューギニア

巡拝の機上で「あれが坂東川」 案内聞けど空しき流れ

A級の戦犯なれど遺骨あり 英雄と讃えられても紙切れ一つ

次世代に引き継ぐこと

鎌倉市支部 野田頭 佑（子）

戦没者 野田頭 剛

戦没地 トラック島

終わっていない戦争の傷跡

終戦時私は五歳、妹三歳、弟は出生直後でした。戦後六十五年、あつという間の出来事のように、人生も終盤を迎えつつあります。

夢中で生きてきた現在、私には言い残すことが数々あります。

まず、駆り出された私達の親父や、ご兄弟が命を張り、祖国や家族の安泰を願い散ったはずの事実が、果して祖国にどのように反映されているか、ということです。ひとくちに言えば、結果は我が国に平和をもたらしましたが正しい評価のないままの現在に、怒りさえ覚えます。

長いあいだ黙して語らずの直接の関係者や各機関は、重く固い口をやつと開き、亡き戦没者に代わり、真実を語り始めました。

しかし、実態を語ることはかなりの勇気がある訳で、当然です。時にラジオ、テレビなどに苦

泣の声や顔で、「硫黄島では、生き延びるために、血混じりの泥水を口に、身体に湧いた蛆虫を食べ、また、自分のウンチを食べ生き延びた」などの報告があり、まるで生地獄です。

さらにショックなのが、食糧のない元ビルマのインパール作戦での生き残りの兵士の話として、仲間の兵士が作戦中敵弾に倒れた時「俺の身体が温かい内に喰ってくれ」と言って息絶えたことなど、生々しい証言があり、まさに人間のすることではありません。

戦争は、まさにこのように平和な社会には有り得ない事であります。人間性を捨て、相手を一瞬でも早く殺さなければ、自分が殺されてしまうのが戦争であるからで、このように戦争はむごいのです。

一方、残された遺家族、特に我々遺児は就職時に完全にハンディを負わされたのでした。特に、一次試験にパスしても、二次試験の面接で、片親を理由に不合格。という結果を目の当たりにしたのです。片親だと万一、会社に損害を与えた場合補償できない、また片親の境遇だから悪いことをするのでは、などが告げられたとの報告が沢山寄せられたのでした。

これほど悲しいこと、悔しいことはありません。情けない事実でした。しかし、私たちは、周りの人達の応援もあり、頑張りました。英霊たちのお陰で現在は平和です。

しかし、山野に眠る遺骨の収集など一刻も早く完了しなければなりません。戦後は終わっていないのです。

今後は、これらの事実を後輩たちに語り、戦争の悲惨さを語り継ぐのが我らに課せられた課題です。靖国神社の合祀、分祀問題の今後について、折角築いてくれた先人の遺徳を無駄にせず、

さらに唯一の被爆国の事実などなど、我々はイデオロギーを超え、いのちと平和のため声を大きく訴えて参りましょう。

戦争に思う

相模原市支部 秦 範子（子）

戦没者 秦 甚太郎

戦没地 フィリピン

遠くに目をやり、若い頃の懐かしい歌を口ずさむ母も今年で九十一歳を迎えます。

昔は時々「お母さんはね、お父さんが戦死と分った時はこれからどうやって二人の幼子を育てて行くのかを考えると涙も出なかったわ」と話していました。本当に困った時は涙も出ないものなんでしょうか。出るうちは世の中や家族に甘えているのかもしれないね。その様な経験のない私にはその時の母の気持を今の年齢になっても理解するのが難しいです。そんな母もアルツハイマーになり、家では日々唱歌を歌い手拍子を叩き、体操をして楽しく過しています。一日でも多く幸せを感じて欲しいと思っています。

若い頃の父は支那事変、国境事変と二度の出征をして戻り母と結婚致しました。二人は仕事の関係で東京に所帯を持ち、結婚生活は四、五年でしたがその後三度目の出征をしました。私が丁度二歳を過ぎた頃から戦争が一段と激しくなり母は私を連れて父の実家のある藤野へと疎開致しました。その後東京は大空襲になり私達親子は運良く逃れる事が出来ました。

そして昭和二十年五月戦死の公報を受け取り比島ルソンに於いて父三十二歳で終焉を迎える事になりました。

私は父の面影も抱かれた記憶も無く東京での出征前の二枚の写真だけが父との思い出です。二十年生れの妹は父と一緒に写った写真すらも無く本当にかわいそうに思います。

戦後の私は幼かったので余り記憶はありませんが、品物もお金も無い時代で配給の缶詰と家で作った野菜を食べ、母は幼子を育てる為に一生懸命に働き努力して参りました。その様な母親に感謝の念でいっぱいです。

戦争とは何と無慈悲な事なのでしょう。若くして戦地に赴く人、残された妻、その子供達の人生を大きく変える恐ろしい出来事なのです。今でも地球上には戦争に苦しむ人が沢山います。何の罪も無い人が悲しみ苦しんで亡くなって行くのが戦争です。

曾^{ひい}ば^いの おでこを撫でる 孫三つ 平和の日々よ 永久^{とわ}にと願う

積年の思いよ届け

港南区支部 広瀬 文子（子）

戦没者 大崎 晴一

戦没地 旧満州

父は五つの時に出征。家族は祖母、姉、弟と私、母の五人。貧乏な農家で、母は寝る間も惜しんで働き私達を育ててくれました。

玉音放送の日、弟は村に蔓延した疫痢で死んで仕舞いました。「長男を死なせて仕舞って、お父さんに済まない。」と、母は号泣しました。姉も私も慰めながらオロオロです。

その日から母は狂いました。毎日オモチャを買ってきては弟のお墓に行き腹這いになって遊ぶのです。家の事は何もしません。働き手のなくなった畑はどの畑も草ぼうぼうです。九つの姉と二人で毎日暑い中、草を取るのですが幾らも捗りません。大嫌いな芋虫と闘いながらの日々でした。そんな時お父さんがいたらと心で泣きました。

間なしに母も元気になり、相変わらぬ貧乏でした。勉強の好きな私は、ノートを買って、鉛筆を買ってとなかなか言い出せませんでした。それどころか学校を帰ると「どこそこの畑に来い」と必ず置手紙、鞆を置いてすぐ畑に。暗くなるまで手伝いました。私は後日勤めに出ましたが日

曜はいつも手伝い、青春など皆無でした。父が恋しかったです。

そんな父を戦後九年待ちました。ある日の引揚者名簿に黒枠で囲まれ「大崎晴一」戦死、とありました。生きているとばかり思い、皆で待ったのに……。私は友に囲まれながら泣き泣き学校へ行きました。可哀想なのは母でした。十九で嫁ぎ、赤紙でとられ二十七の別れでした。以後、寡婦として頑張り、私達を育て上げ九十三才で健在、曾孫二人は大学生です。

さて、一昨年満州の父の墓参が叶いました。一行二十名は「此処はお故郷を何百里……」を胸に、その地、その地で泣きながら廻りました。思うに戦争の遺児は「同志」なのですね、今でも仲良しです。極寒の地で誰にも看取られもせず逝った父：御免なさいね。

その時は空に赤トンボが一杯群れていました。その時作った句です。

つわもの
兵の 墓に幾万 トンボ群る

国境の 父恋ふ木霊 こたま 惜しむ秋

父逝きし 荒野に盆の 月ひとつ

お父さん達の尊い犠牲のお陰で、日本は今平和です。平和ボケで収まり付かない部分もあり、

罰があたりますよね。

さて、私事ですが、今私は分かりのいい夫と仲良く二人暮しです。子供は二人で、長男は私の憧れの東大に入り活躍中、娘も新聞記者に…。孫は四人出来ました。

お父さん、生んでくれて有難う。

誰もが哭く戦争…。この恐い引き金を誰も引いては不可いけませんね。

私の戦争体験

瀬谷区支部 溝口 愛子（子）

戦没者 溝口 孝平

戦没地 青森県

戦後六十五年を迎え、平和で飽食の日本で暮らす毎日であつてもあの残酷な戦争を忘れることはない。

一九四五年（昭和二十年）夜半、B29の爆撃機の焼夷弾投下により我が家も全焼しました。当時は浜松市鴨江町で祖母と妹、私の三人暮らしでした。

母は昭和十六年五月に他界し、父はその年の十二月に出征しました。そして妹と私が祖母に引き取られて二年、その時私は国民学校の一年生となっていました。が、くる日も来る日も警戒警報発令の中を防空頭巾をかぶつての登校！

しかし途中で空襲警報となつて防空壕へ逃げ込む破目となり、勉強など出来る筈もなく恐ろしい思いばかりでした。

時には低空飛行で襲い掛かる米軍の艦載機に狙われて、木の下や土手に伏せたりしたこと幾度もあり、寝る時も着のみ着のまま（衣服のまま）布団に入る毎日でした。

昭和二十年のその夜も浜松市は大空襲の被害に遭いました。雨のように降りかかる焼夷弾であつと言う間に街は火の海、大勢の人が逃げ惑い、私達三人も離ればなれにならないよう、どこをどのように走ったのか分からないまま逃げました。

我が家の近くに裁判所と無線電信基地があり、そちらの方向に逃げたようですが、年寄りと子供達だったので逃げ場を失い右往左往している時、丁度兵隊さんらしき人に助けられ大きな防空壕へ押し込まれました。

空も街もあたり一面真っ赤に染まり、子供心にも唯々恐ろしくてガタガタ震えていたことを今でも覚えています。

朝方になり一面の焼け野原と焦げ臭い中を焼け落ちた我が家に向かうと、日蓮宗のお寺の住職をしていた伯父が心配して探しに来てくれ、寺島町にあるお寺の方に移るよう促してくれました。しかし、お寺に行ってみると本堂も庫裏も爆風で被害を受けており、防空壕が一番安全な場所ということで防空壕の中の生活が始まりました。

防空壕の中には日蓮大菩薩のお像も一緒に、狭いながらも安心できる場所でしたが、雨が降るとスノコの下の水が増して、水を外に出す作業も手伝いました。

戦いも増々厳しさを増す中、艦砲射撃のあつた夜には約一時間半の間、防空壕がゆりかごのように揺れ、ヒュ〜ヒュ〜と不気味な音のする中で伯父と祖母が今夜が最後になるかもしれないと話しており、伯父と一緒に南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経とお題目を唱えながら朝を迎えたことを鮮明に記憶しています。

明け方、静かになって壕のフタを持ち上げてみると、まわりは破片だらけであたりに家は見当たらず、大きなスリバチ状の穴が見えました。

お寺も庫裏は吹き飛ばされ、本堂だけがポツンと残っていました。その本堂も軍艦からの艦砲射撃の破片が柱に、畳に、壁にと無数突き刺さっていました。

その日からお寺の境内には焼け爛れた死体が次々と運ばれ、鼻をつく異臭と悲惨な光景に眠れず、食べられない状態が何日も続いたことを思い出します。

父も終戦の年二十年七月十五日に戦傷死、祖母も昭和二十一年七月十五日に他界して私と妹は戦争遺児となり、私と妹はそれぞれの人に育てられ数十年後にやっと再会することが出来ましたが、多難な戦後をたどる戦争犠牲者となってしまいました。

こんな私達よりもっとつらい体験をお持ちの方々が大量おられると思いますが、戦争だけは絶対にやってはいけません。戦争は人の命を奪うだけでなく、残った人々の人生までも不幸にしています。そしてそのようにしないため、させないためにも、このような体験を次の世代に語り継ぐことが大切ではないでしょうか。

母を偲ぶ

旭区支部 村上 保子（子）

戦没者 鈴木 保三

戦没地 フイリピン

母が結婚したのは昭和十五年で、当時父は横須賀の海軍工廠に勤めていた。翌年の十二月に真珠湾攻撃があり、直後に兄は生まれた。戦時体制になってゆく中、横須賀の海辺の街で、まだ穏やかな生活だったようだ。

父が十九年六月に出征した時に、私は母のお腹にいた。母は大きなお腹をかかえ、三歳の兄を連れ千葉の津田沼の兵舎まで面会に行った。もう面会はいいから大事にしてくれと言われたそう。七月に私が生まれ、八月には父がフィリピンで戦死してしまった。その時の母の落胆ぶりはすさまじいものだったと聞いている。母乳は止まってしまい、私はどのように育ったのか、母から聞かされたはずだが記憶が遠い。

父の実家に親子（私は乳飲み児）三人身を寄せた。実家も伯父がすでに戦死していたにもかかわらず、伯母、従兄、従姉、祖父が温かく迎えてくれ、それ以来この地で私達は暮らすことになった。他にもう一人の伯父家族と強制疎開の家族も受け入れ、双方夫が戦死の状況で、伯母や母

が戦中戦後の物もない中を生き抜くのは、想像を絶するものがあつたと思う。母も私を背負い下駄の行商したり、近所や行商先の反物の仕立てを頼まれて、わずかばかりの収入で何とか生活してきたそうだ。

私が小学校に入る前に母は人の世話で中学校の用務員として横浜市の職員になれた。母が出勤してしまつと、私と兄は父の実家（本家）で過ごすことがほとんどで、そんなに寂しい思いをした記憶はない。私も学校に入学し、運動会や入学式、卒業式には、母の学校と重なってしまい来てもらえず、そんな時、他の家と違うのだということ、父親が家には居ないことを段々意識するようになった。しかし、父親の役もする気丈な母のもとで私達は育つた。

人一倍向学心の強い母は子供の頃裕福ではなかつたので小学校しかゆけなかつた為か、私達に對しては行ければ上の学校へ行きなさいと夢を託した。兄も大学の工学部に入り、家計も大変だつたと思うが、働く張り合いがあつたと思う。

さてこれからという時、二度目の悲劇が母を襲つた。兄が山岳部の合宿中遭難、母と私の前から去ってしまった。高校三年だつた私は母の嘆き悲しみをもろに見ることになった。母はどうにかなつてしまふのではないかと周りが皆心配した。勤務先へは一ヶ月以上も行けず、しかし職場の方々はじつと母の復帰を待っていて下さつたそうだ。

私も自分の人生が大きく変わったが縁あつて結婚し、三人の子供に恵まれた。そして母はずつとそばに居て、一緒に子育てを手伝つてくれた。ある日「この三人の孫のおかげで私は悲しみが癒えた。ありがとうネ」と言ってくれた時、これで大丈夫だと思つた。

六十才の定年まで勤め、孫達の結婚を見届け、ひ孫まで見る事ができ、九十才で穏やかに父のもとへ旅立って行った母、老後は少しは幸福だったのではないか。私は父からの贈り物だと思う。

戦争責任

多摩区支部 村山 矩子（子）

戦没者 村山 徳栄

戦没地 ガダルカナル島

昭和二十年八月十五日、真っ青に晴れ渡った空の下、長く暗かった戦争は終わった。私は疎開先の群馬県の前橋市で終戦を迎えた。今日からは、毎日鳴り響く警戒警報のサイレンも、雲の上のB29の爆音も、夜の薄暗い生活もなくなるのだと思うと、何ともいえぬ解放感が全身をよぎった。十日前の五日に前橋市はB29の爆撃で全焼し、翌六日に広島に原爆が落ちた。

まだ火の熱さでくすぶる焼跡に、茫然と立ちすくむ私達家族（祖父母、母）に神の手のように迎えに来てくれたおじいさんがいた。道路一つと、風の向きで類焼をまぬがれた祖父の同郷の納豆屋さんだった。昔、祖父に恩になったからというのだ。この時程、日頃の行いの大切さと人の情のあり難さを感じた事はない。

通学していた家の前の女学校では、上級生達がアメリカへ飛ばす風船爆弾の風船を体育館で作っていたので爆撃の標的にされ、我が家同様、大きな校舎は跡形もなく焼け落ち、焼土と化し、授業は勿論出来なく、十日後終戦を迎えたわけである。本土空襲が始まる前までは、毎日庭の手入に来てくれるお百姓さんが、一年中色々な物を作ってくれていたもので、夏になればとうもろこ

し、大きな杏子の木からは、毎朝大きな笹に一杯の杏子が取れ、秋には子供の私でも手のとどく所に「百匁の甘」の柿が色づいて、小学生の空腹を満たしてくれるには充分だった。

その庭も一夜にして焼土と化し、大きな八重桜の木も、桃の木も、りんごの木も、何一つ跡形もなく灰になってしまいました。根まで熱の為に燃えてしまったのか、その後、何年経ってもそこから木は生えて来なかった。

父の戦死の公報を受けたのは、遺骨迎え盛んな昭和十八年の初めの頃だった、戦死したという実感が家中湧いて来ないのも、毎日ラジオから流れてくる戦況の激しさで、悲しがっている余裕がなかったというのが本当の所かも知れない。

その頃私達小学生は、学校の授業などはせず、駅から戦死者のお宅までの道の両側で、日の丸の小旗を振って遺骨迎えをするのが毎日の日課だった。父の遺骨迎えの日も、それにたがわず、前橋市全小学校の一年生から六年生までが、駅から家までの道路の両側をうめつくして迎えてくれた。私達親戚一同は、前橋市のバスを借り切り、速度は少し落としてはいたが家路に着いた。長い間立つて待っていてくれた友人達に、子供心にも申し訳ないと思ったのを今でも、はっきりと憶えている。

私は公報の届く少し前にきれいな小川の河畔に置かれた、風にページがなびいている本の夢をはつきりと見ている。そしてその頃、父の実家の酒倉の窓に大きな火の玉が南の空から入って行ったのを村人が見たという話を聞いているので、もう父はとづくに六千キロの海を一瞬にして渡り、内地の私達家族のもとへ帰ってきているのだと信じているので、私にとっては、こんなにも

軽い遺骨箱も、仰々しい遺骨迎えもあまり意味あるものではなかった。

その後も市では国民の戦意高揚の為、前橋一大きな会館で市葬を挙行したり、当時国はこのような行事を惜しまなかった。

世界各国のトップが、自国の国民の為、国益と称して、領土の拡大を目指す、そしてその結果話し合いがつかず、戦争になり、国民を消耗品の如き考えで戦地に送り込む、人の命の大切さ等という事は、戦争になると全く忘れ去られてしまう。これは戦死者の九割が、一九四四年から敗戦までの一年半にしているという事実でも明らかだ。

勝ち目のない終戦間際、上層部の無謀な作戦で、失われなくともよい幾万もの若い命の「日本が生まれ変わる為に、俺たちは先駆けて死ぬ」と特攻隊、回天等がうまれた。「散る桜、残る桜も散る桜」私は死んでいった人間が一番可愛そうで、生きていれば好きな事ができるのだから。自分の境遇をひきずって、自分を可愛そうがるのはつまらない事だと思う。

「兵隊になんかいかねばいいじゃない」私が戦争体験の語り部で行った、小学校六年生の男の子が云った。拒否すると非国民ということで、刑務所に入れられるしか当時は道がなかった事を説明しても、男の子達はどうしても納得できないという眼指しだった。

私達には、悲しい過去を変える事は出来ないが、二度と繰り返さない為の努力は出来る。平和の原点は、他人の痛みをわかる事、そうすれば争いはなくなり、世界中が平和になる。戦争が地球上からなくなる事を願い私のペンをおきます。「人の命は地球より重い」のだから

館 林

秦野市支部 森田 和夫（子）

戦没者 森田 隆治

戦没地 シベリヤ

群馬県館林は、私達家族が疎開した町であり、鶴舞う形の群馬県と喻えられた鶴の頭に位置する城下町である。疎開前は東京南千住に居住し、父は川向こうの向島で鉄工所を営み工作機械を製造していた。機械が完成した時の記念写真を見ると父共々癖の有りそうな職工さん達の誇らしげな顔を見る事が出来る。疎開後一度南千住を訪れたが、住んでいた家は壊され辺りは廃墟のようだった。後の東京大空襲で下町一帯が焼け野原と化したのを思えば命拾いをしたのかもしれない。父は、この館林から出征し大陸に渡って行った。

館林駅での出征兵士の見送りは記憶にある。父はその際母にそれなりの額のお金を用意して行ったようだが、その父は昭和二十一年シベリヤ抑留中に死亡した。ロシアが行った行為は許せるものではない。

私は昭和二十年四月館林小学校に入学した。直接的な戦争の記憶は、中島飛行機の工場を爆撃に向かうB29の爆音を防空壕の中から震えながら聞いていた空が赤く染まっている。

そして八月十五日、生活が一変した。それまでは出征兵士の家でもあり、疎開も父の会社が強制合併を受けてのことで、近所にはそれなりの力をみせていたことだろう。だが父の生死不明なことから今まで住んでいた家は明け渡しを要求され、近くの家の二階といっても屋根裏部屋に等しい一間に移りこの部屋から親子三人の生活が始まった。戦後のインフレで、父の蓄えなど紙切れ同然となり、母が何度か町の古着屋を訪ねていたのを記憶している。おそらく足元を見られて買い叩かれていたことだろう。

母の着物が姿を消してからは、衣類寝具がボロと化するのにさしたる時間は要していない。小学三、四年の頃か、朝食のお椀の中を見るとさつま芋の汁に団子二、三個浮かんでいるだけのもので、学校の授業は四時間目が体操で、校庭にはコークスの燃え殻が敷き詰めてあり、とても素足で歩けるものではない、級友達は其々に履物を身に着けていた。空腹と足の裏の痛さで校庭の隅でしゃがんでしていると教師の叱声が飛んでくる「森田！何をしている」胸の内で教師を罵ったところでどうにかなるわけでもなし、ただその日の朝の母の悲しそうな顔がうかんでくるだけである。この頃と思う、夕方母が共同井戸の傍らでうずくまり肩を震わせていたのを見たのは、後年母はお前たち連れて死のうかと思つた事があつたと打ち明けている。一体母はこの時期をどんな思いで乗り切つたのだろう。

その後、母子寮が建設され入寮し生活保護を受けるようになった。母は時折「生活保護なんていやだね」と口にしていた。要らぬ中傷を気にしてのことだったろう。

妹が義務教育を終了すると退寮し館林を去ることになった。その後は転居を繰り返すことにな

るが、母は新たな転居先で落ち着くと「来たよ」と云う、何のことかと聞くと父だという。どうやら父の霊か何か、父を感じ取っての事のようにだ。

母は転居の度に父の墓に住所を書いた紙切れを埋めてきたが、秦野に来るには時を要したようだ。何年か経ってやっと母の「来たよ」を聞くことができた。

その母も父のもとに逝って二十四年経つ、享年七十三歳、冥福を祈る。

終戦六十五年を迎えて

足柄上郡支部 山崎 都里子（子）

戦没者 山崎 徳造

戦没地 旧満州

思い起こせば六十五年前、父は大工で母は身体が弱く寝て過ごすことが多かった中、昭和十九年七月二十日夜中に、突然役場の方が「山崎さん赤紙です。おめでとうございます。」と赤紙を受け取った。父は三十六才、母は四十才、私は九才の時のことです。その時、子供ながらに普通の様子と違い大変な事が起こるんだと思いました。

父の出征は七月二十二日、二日間しかない中、出発の朝、母が赤飯を炊いて食事中、父の膝に座る私に「お母さんは体が弱いから面倒頼むな」と言った父からの最後の言葉でした。父は世田谷の部隊に入隊し、藤沢駅で勤務していた人が届けてくれた名刺の裏に「元気で戦地へ発つ」とあり、二日目に戦地入りしたのを知った。近所の人達も大勢出征しましたが、一週間遅かった為内地勤務でした。

日増しに戦争もひどくなり食べる物も配給制度となり、父が開墾して作物を作っていたので母の体調の良い時は毎日山へ行き食糧を持って帰りました。母の具合が悪い時は私が二度、山へ向

かうのですが、小さい身体の私は片道一時間半かかり、おさつを取っても十本抱えるのがやっとでした。父との約束を守り母の為に頑張って登りました。

母は体調の良い時は父の代わりと言って義勇隊として山へ働きに行き、私は学校から帰るとバス会社で木炭の薪割りをして働きました。母は私を育てる為、自分ほろくな物も食わず着物を売って家計を助けました。やがて母は寝たきりになり、私も母の面倒を見る為学校へはほとんど行けなくなりました。母は私に父の公報が来たらこれと一緒に入れてくれと髪の毛と爪を渡されました。

私が十八才の昭和二十八年九月十八日母は亡くなり、まもなく生きて帰ってくると思っていた父の訃報が父の知人より入りました。昭和二十年八月十一日満州で戦死したと。母が亡くなった後の昭和二十八年九月二十五日付けで父の公報が入り、横浜の野毛山までお骨を受け取りに行く、骨壺の中に「隊長 山崎徳造」と書かれた板切れが入っていました。啞然とした中、涙がとまらずに松田まで帰ってきました。その中に母の髪の毛と爪を入れ、近所の方々にお願いし葬式を済ませました。

父に來た赤紙があと少し遅かったら。母が生きていたら。今で言う遺族年金を受け取り、母と少し楽な生活が出来たのではないかと思います。戦争があつた為、人一倍の苦勞がありました。が、今七十五才、体調もすぐれない日も多いですが女性部として頑張ってる毎日です。

父

川崎区支部 吉澤 庸子（子）

戦没者 吉澤 八三郎

戦没地 フイリピン

お父さんと呼んだ記憶は余りありません、でも父に抱かれて家の庭を散歩したこと、家族で出掛けて父の背におぶさった事、炬燵の中で私が火を蹴とばして父の丹前に火が付いた事など、断片的な記憶は残って居ます。父が兵隊に行く時、昭和十九年六月十五日と聞いていますが、近くの八幡神社に沢山の人々が集まり嬉しくて喜んでいました。父の出征から一カ月後面会が許され、父の好物のぼた餅を母が作って、母、兄、姉と私四人で面会に行きました。兵舎から兵隊さんが沢山出て来るのに父はなかなか出て来ませんでした。最後に出て来たのを覚えています。幼い子供達に自分の姿を印象付けたかったのでしょうか？ 短い面会のあと赤いフンドシが渡されました。

多分南方だろうと云う憶測のもと旅立って行きました。私が五歳の時の父との永遠の別れになるうとは…その後フイリピン・セブ島のセブ市に着いたと一通のハガキが来たので役所で撮ってくれた家族の写真を母が送りましたがそのまま戻って来てしまいました。川崎も激しい戦火に見

まわれ焼野原になりました。

それから半年後終戦、必ず帰って来るとの思いで食卓には父の写真を中心に家族で食事を囲んで居りました。「陰膳」と云うのだと母が教えてくれました。私も小学生になり学校から帰ると必ず父が帰ってくると思いながら、楽しみに家路を急いだものでした。今日はまだ、じや明日かも知れないと思いながら日が過ぎて行きました。専業主婦であつた母も働く様になり、兄は新聞配達少年になり、祖母（父の母）は近所のお百姓の手伝いをする様になりました。

祖父はすでに他界して居りました。相変わらず父の写真を中心に陰膳をしていました。母は勤めの休みに京都舞鶴港へ何度か通いましたが会えることはなく終戦から三年後戦死の知らせが来ました。母は負傷してでも帰って来て欲しかったと云っていました。祖母は息子の帰りをどんなにか待ちわびていた事でしょう。口には出さなかったけど淋しく悲しかった事でしょう。息子が戦死して八年後心臓病で亡くなりました。

それから六年後父は靖国神社に祀られました。父は神様になったのです。私が二十歳の頃だと記憶しています。家族四人で靖国神社で昇殿参拝した様な気がします。勲八等白色桐葉章と云う勲章を頂きましたが、勲章よりも生きて帰って欲しかったと思いました。戦争の犠牲は二度と繰り返してはならないと思っています。

私の戦争の記憶

中郡支部 渡辺 キヨ（子）

戦没者 渡辺 梅吉

戦没地 中国・廬山

私が父の戦死の知らせを聞いたのは、小学校一年生の二学期の教室でした。昭和十三年九月三日、担任の先生から「渡辺さんのお父さんが名誉の戦死をされました。」と伝えられ「何かお手伝いすることもあるから家に帰りなさい。」と言われ家路を急ぎました。家に着くと、親戚をはじめ近所の方がいっぱいでした。告別式は町葬で多くの参列者があり、婦人会をはじめ各種団体の皆様にお世話になったそうです。

父が出征中、母は幼い三人の子供（長女の私六歳、次女五歳、三女二歳）を抱え、中風で倒れて半身不随になった姑である祖母の看病しながら、家が農家の為、朝から晩まで田畑で働いておりました。長女である私も家の手伝いに追われました。私は祖母の寝ている部屋で絵を描いたり、折り紙を折って留守番をし、妹たちや祖母の面倒を見ておりました。そんな私を親戚も、近所の方も誉めてくださったものでした。

祖母というと思い出されるのは、祖母が元気な頃、坪の間（自分専用の一坪菜園のようなもの）

に色々な花を育てていた事です。水仙、おもと等さまざな花を育てていました。その花々を生け、ほのかに匂う花の香りに幸せを感じている様子が幼い私にもよく分かりました。そんな祖母の花好きが私にも継がれ、苦しい時でも花を愛で、気持ちを切り替えて生きてこられたように思います。祖母も昭和十三年三月に家族に見守られて亡くなりました。同じ年の九月に父の戦死ですから、幼い私たちにはわかりませんでした。母の苦労は相当なものだったと思います。

父の死後、母の生活は変わらず、家の農作業、さらに共同作業の田植えの為のセング堀の清掃など、男の方に混じって一生懸命に働いていました。母との思い出の中に、父が亡くなる前の夏休みに母の実家(中井町)に行った事があります。祖父が牛車で迎えに来てくれました。本当に親子四人、久しぶりの外出に心が踊った事を覚えています。子ども達は買ってもらったばかりの麦わら帽子をかぶり、母は嫁入り道具に持ってきた日傘をはじめておろし、牛車に揺られて行っただです。湧き水で冷やしたスイカの味、山、川で遊んだこと、花を摘んだり、土手にごさを敷いて滑って遊んだ事、子ども達にはこの楽しい思い出が、母にとっては懐かしい人達からの慰めが、その後の生活の心の支えになったと思います。

やがて私が八歳の年の二月頃から、母は体調をくずし、寝込むようになりました。そんな母の様子に子ども達は世話をかけまいと、自分の事は自分でやっていました。母の体調がよい時、母は私にカマドで御飯を炊く水加減、火加減、火の始末を教えてくれました。かなり厳しかったと思います。「自分が亡くなったらおまえに頼むしかないの、」と母は涙ぐんでいました。母の病

気は結核でした。寒川の病院に入院、母と離れて暮らすようになりました。「母のいない留守をしつかり守ります」と仏壇に手をあわせる私に、叔父叔母は「これから苦勞する事が沢山あると思うけれど、近くにいたので困った事が出来たらいつでも来なさい。」と言われ励みになりました。感染の心配があるため、母とは面会できませんでした。母の具合が悪くなった時、叔母に連れられ、窓ごしに母に会いに行きました。子ども達が来た事を知らせると泣きっぱなしになるので、身体によくないと母には内緒でした。母の顔色は蒼白で、一回り小さくなっていました。今でも脳裏に焼き付いています。昭和十七年十二月十四日、母は亡くなりました。

母と離れて暮らすようになってから、お手伝いの人や親戚の人に助けられ何とかやってきましたが、母とは違います。ずいぶんさみしく辛い思いをしました。戦争は戦地で戦う人、残された家族、すべての者に苦しみを、悲しみを生じさせます。残された者にとって悲しみをこらえ生きて行く事は、終わりなく続きます。いいえ戦いに行く者、家族を残していく者にとっても同じかもしれません。父が出征していく時、まわりの者に母を、妻を、子ども達を頼むと大きな身体を小さく折り曲げ頼んで行つたと、何人もの方から聞きました。二度と戦争がおこりませんように、世界が平和でありますように心から祈ります。

ヒマワリの咲いていた日から

瀬谷区支部 渡邊 玉見（子）

戦没者 渡邊 達也

戦没地 フィリピン

空は青く晴れ渡り大輪のヒマワリの咲いた裏庭で母はたらいで洗濯をしていた。大人の様子が何となくいつもと違っていた。しばらくして戦争は終わったんだよと聞かされた。私にとって八月十五日の記憶はその程度しかない。でもその日から私達の戦後の生活が始まった。街は空爆を受けることもなく毎日の生活はそれほど変化は感じられなかった。変ったのは防空頭巾をかぶりランドセルを背負ったの登校で警戒警報発令のサイレンが鳴ると急いで帰宅させられた日々がなくなり静かな登校となった。しかし校門の横に建てられていた奉安殿がいつの間にか取り壊され校門にかけられていた「國民學校」という標札も「小学校」に変わっていった。

生活の基盤は衣食住であるが住居は焼けなかったが衣、食はきびしく「ないないづくし」だった。運動靴も新しいものは手に入らず穴あき靴も手縫いで修理され上履きはわら草履だった。洋服も兄から弟へ、上から下へとおさがりでそれもあれば良しという状況だった。市場には新しい衣類も出始めていたが粗悪品が多く高値で庶民の手に入るものではなかった。父が戦死した私達

家族はお金もなかった。父親が運送業だった友達の家では、車を運転する人も重い荷物を運べる人もなく閉店も止むなく友人の母は賃仕事に出た。子供達も力を合わせ野菜作りなど手伝ったが僅かばかりの収入では多勢の子供を養うことは難しかった。

都市近郊では食糧入手のため「買出し」が行われた。直接農家に行き米その他の農産物を購入する。お金のない時には品物との物々交換が行われた。「父親の遺品である背広もコートもＹシャツ、ネクタイ、眼鏡も帽子も靴も自転車もそして風呂桶までも全て子供達が食べてしまいました。そうして子供が成長したのです」と言ったお母さんの言葉が食糧入手が大変だった事を物語っている。田舎ではそれほど食糧のきびしさはなかったが、ある日大きな木綿の風呂敷を持ったおばさんが来て母の着物や帯などがタンスから消えて行った。母によく似合っていた着物を近所のクラスメートのお母さんが着ていたのを母に告げた時「あの着物はもう私には必要のないものだから売ったの。これからは洋服の時代だから私は洋服を作って着る」と私をなぐさめてくれた。

洋服も市場には少なく既製品の洋服はまだ高値だった。おしやれな洋服を着たい若い人達が布地を片手に母のもとへやってきた。デザイナー兼ドレスメーカー兼スタイリスト兼で夜遅くまで働く母の健康を私はいつも気づかっていた。「僕の亡きあと婚家に残り父の世話と子育てを頼む」と遺言して出征した父の言葉を胸に母は三人で生きのびる事を目標として働いてきた日々だったと思う。母のタンスから消えた着物や帯は母の洋裁学校の月謝になったのかなと今にして思う。母に聞いておけばよかった。

私達遺児（父なき子）をおそった本当の悲しさ、悔しさは就職の頃ではなかったかと思う。片親の場合は就職試験を受けることさえ拒否されたことが多かった。特に金融界、大手企業などに多かったようだ。昭和三十年代から四十年頃までの間に就職の時を迎えた人達がきびしい社会情勢にさらされた。

私も例外ではなかった。こんな仕事がしたいと希望を持って受験した時のことである。一次書類審査、二次一般教養テスト、三次専門技術テストとクリアして最後の四次は面接テストだった。どんな質問が出るかなと五人の面接官の言葉を待った。書類をパラパラとめくりはじめたその中の一人の第一声が「あつ、お父さんがいないんですね」と言う言葉だった。一斉にページがめくられた。私はその言葉に対して父は戦死した旨を告げた。しかし私の言葉は無視された。「お父さんが亡くなられた今あなたが早く結婚して家を継ぎ、おじいさんやお母さんを安心させてあげることが一番いいですね」と言われた。それに同調して他の人達も「そうですね早く結婚して親孝行することですなハハハ・・・」と言う笑い声で面接は終了した。その笑い声を聞きながらこれは不採用だな、それならなぜ一次の書類審査で落としてくれなかったのかと悔しい思いと会社に対する不信の念が強く残った。でもそんな思いに躊躇している時間はなかった。片親でも女であつても採用される仕事は何だろうと懸命に考え辿り着いたのが教職だった。当時は十二月末頃が採用試験だったので何とか願書提出が間に合い翌年三月「採用面接に来なさい」と言う通知が届き父の戦死による社会的差別を乗り越えることができたと思つた。

家族調査や親の職業を聞くこともプライバシーの侵害だと言われる平成の時代には父がいな

いことで不採用になる社会状況など想像もできないことだろう。戦争は理由は何であれ互いの人殺しでありその後に来る生活難と親を失った子供の生きのびる事の大変さを考えると戦争は絶対に避けるべきである。平和で豊かな時代に育った人達に戦後の状況を少しでも知って欲しい。

戦争は二度と起こすまじ

中原区支部 伊藤 文治（弟）

戦没者 伊藤 幸平

戦没地 西部ニューギニア

昭和十九年当時、私は十四歳、法政二中の二年生でした。

そのころ内地では、連日のように偵察機の侵入による警戒警報が発令され、いよいよ戦いが身近に迫ってきた感を深めておりました。

そのさなかに、学校周辺の生徒による「法政二中学生徒学校防衛隊」が組織され、その一員として空襲警報発令時には、学校に詰めるようになりました。

まもなく時計塔のある大学予科の建物には陸軍の本土防衛隊の一部が入ってまいりました。勉強にも身が入らない日々の暮らしの中で、二年生にも勤労学徒動員令が出されました。

中原区下沼部にある日本電気多摩川工場（現在のNEC）の真空管工場に出向き、その製造の一部に携わるようになりました。当時は大西学園中、横浜女子中などから女子中学生も出向いており、おかつば頭に日の丸ハチマキを締めて隊列を作り工場の門を行進をして入構する姿が頼もしく思えました。又、女子挺身隊として北海道より大勢の女子が私の近くにある女子寮に入居し

てまいり、共に同じ工場で働いておりました。

その後、今度は三菱重工（現三菱自動車工場）に移り、靖国神社に展示されているのと同型の人間魚雷や火薬を大量に詰め込んだ小型ボートに乗せるディーゼルエンジンの中心部になるクランクシャフトの製造に携わり、油にまみれる毎日を送りました。

その頃、戦況は一段と厳しさを増し、沖縄に米軍が上陸し戦争がますます激しくなってきました。その中で私たちは米軍の相模湾上陸に備えて、敵を迎え討つための陣地（トーチカ、塹壕）構築の作業を手伝いました。近くのお寺さんの本堂に泊りこんで、毎日太い赤松の丸太を担ぐ仕事をさせられ、米軍が上陸して来たら塹壕に隠れて、敵の戦車が攻め来たら火薬を背負って体当たりをする作戦とのことでした。若く元気な男子は皆もつと激しい戦場に行き、残された壮年以上の兵隊さんばかりでしたので、最後は我々がやる羽目になるのかとの思いで毎日の作業を続けてまいりました。

南方の島、サイパン、硫黄島の守備隊が激しい米軍の砲火の中で玉砕しました。

その後、すぐに爆撃機の発着が可能な滑走路を建設して、本土空襲の準備を着々と進めておりました。これまでの軍需工場を中心とした爆撃から、新しい戦略爆撃として夜間低空飛行による焼夷弾爆撃に切り換えられました。当時のアメリカの爆撃機は「空の要塞」といわれたB29戦闘爆撃機で、乗員は八名位乗っているとても大型の飛行機でした。

そして、二十年三月十日には、東京の下町が一夜にして焦土と化した東京大空襲が始まったのでした。皇居、明治神宮、東京駅を含め、大変な被害を受け、被災者は十万人以上の多きにのぼ

りました。

四月十五日夜には川崎、横浜にも三百機ほどのB29による大空襲があり、我が母校も木造校舎ゆえにあつという間に焼失してしまい、なすすべがありませんでした。そのため学校での授業もできなくなっていました。

工場も戦災に遭い、操業もままなくなっていました、自宅待機の日々が続くので農作業の手伝い等で過ごしておりましたが、時には我々唯一の遊び場である今井神社の境内で三角ベースの野球をしておりましたが、突然に近くにある軍需工場目掛けて米軍の艦載機グラマン戦闘機による機銃掃射を受け、あわてて拝殿の床下に潜り込みました。

ものすごい爆音と同時にバリバリという機関銃による掃射で、身体を小さくして隠れていましたが、大きな薬莢がカラカランと飛んできたので吃驚しました。

その薬莢の大きさと搭乗の飛行兵のこちらを見る顔がはつきりと見えたのをしつかりと覚えております。

戦況が一段と厳しくなり、毎日空襲警報のサイレンが鳴り、防空壕との往復が続く日々でした。いつ米軍が九州南部、又、相模湾、房総九十九里に上陸してくるかと思ひ重苦しい気分をみんなが持っていました。

八月六日に広島に新型爆弾が投下されたとのことだったが、これが世界で初めて使われた原子爆弾でした。一瞬にして広島町の町が灰燼に帰したのであります。続けて今度は長崎にも原爆が落とされ、今後この日本の国から都市というものは無くなってしまうのかと思ひでした。

世間が騒がしい数日後の八月十五日正午、天皇陛下より玉音放送があるとのことで、友人宅で少し雑音の入るラジオで聴き耳をたてて聞いておりましたが、我々には少し長く、中身が解らなかったがしばらくして、「あつ戦争に負けたのだ」と知った次第でした。

翌日からは空にサイレンもならず、高射砲の音も響かず、夜も静かに休め、やっと長かった戦争が終わりを告げたことを実感したのでした。

戦争という、大切な家族、父、兄を失い国同士がいがみ合い殺し合い、争うことの愚かさ、平和の貴さ、ありがたさを噛み締め、過ちを二度と繰り返すことのなきよう遺族の一人として少しでも残された人生を後世の人達に伝えてまいる所存でございます。

遺族会

高津区支部 小川 英子（姪）

戦没者 小川 隆夫

戦没地 南洋群島

私は叔父（父の弟）二人が戦死及び戦地から帰還途中に命を失い、その遺族として遺族会に入っております。上の叔父は二十八歳で海軍一等兵曹として「昭和十九年二月十七日、南洋群島方面ニ於テ戦死」との文言が戸籍謄本に記載され、靖國神社から「小川隆夫命」と祭神之記が届けられ、靖國神社に合祀されて神様になっています。

しかし、下の叔父は二十歳で「昭和二十年八月二十三日午前十一時、愛知縣愛知郡葉投見村大字服部字池畔（空白）ニ於テ死亡」と戸籍謄本に記載されており、「戦死」との記載がない為に靖國神社には入れません。

一刻も早く故郷に帰りたかったのでしよう、満員列車の屋根にしがみつき、振り落とされて線路脇にて絶命していたのを、服に縫い付けてあった名札から身元が判明して、家に連絡があったと母から聞いています。行旅死亡人の立場で一生を終えたのです。

両叔父は独身で亡くなり、老いた姉、妹、弟は存命していますが、やがて此の世を去ります。

英霊として上の叔父は靖國神社に生き続けますが、下の叔父は靖國神社に祭られることもなく、早晚「此の世にその人が生きていた」と覚えていてあげる人もいなくなります。墓石にしかその存在を証明出来ない叔父にとって、遺族会は自分を見護り、属せる唯一不可欠の場所として望むところでありましょう。

遺族、遺児に対する国の援護対策は、必ずしも充分と言うものではありませんが、それぞれが国難に殉じた遺族としての誇りをもって、戦後の苦難を乗り越えて来られました。

戦後六十余年経過した現在では、各々の遺族は、英霊の犠牲に報い、恥じないことを心がけて生活をしています。

今後の遺族会活動は会員の高齢化に伴う会員の減少は避けられず、新たな方向性を模索する段階に差し掛かっていると思います。

それぞれが与えられた生命、寿命を戦争や紛争により奪われることなく、その生命、寿命を全う出来る平和な世界を目指して行動すると共に、戦争の中で短い生涯を終えられた幾多の英霊の御霊の安らかなることを祈り続けると共に、愚かで悲惨な戦争を、二度と繰り返すことのないように語り継いでゆくことが、遺族である私たちの使命であるろうと思っています。

祖母の涙

中原区支部 坂本 松男（甥）

戦没者 坂本 良三

戦没地 ビルマ

見たことのない叔父の顔を私はしみじみと見つめている。

絵の好きだった私の父が描いた良三叔父さんの似顔絵が仏壇の上に掛けてある。今まで気にも止めなかった叔父の顔が丸い眼鏡の中から微笑んで実に好青年に描かれている。坂本良三 二十六才 昭和十九年七月三日ビルマにて戦死。

どのように戦い、どのように死んでいったのか今は知る術ありませんが、酷暑の中で想像を絶することの連続だったと思われる。六人兄弟の三男坊として生まれ、生きていれば九十二才、どんな人生を送ったのでしょうか…。その横に厳つい顔の祖父と、おっとりした祖母の似顔絵が並べて掛けてある。祖母は私を可愛がり、楽しみだったラジオの浪曲の声が私の子守唄だったと記憶している。その祖母が叔父良三の出征の時、涙ひとつ見せずに日の丸の旗を振って戦地に送り出したと父から聞いたことを思い出した。

夏の暑い日でした。私が小学校一年か二年生の夏休み、父と母も出掛けていて、祖母と二人でいたある日、外で遊んでいた私は窓から薄暗い部屋を覗き込むと、祖母がポツンと座っていた。後ろ姿である。寂しさを感じた私は部屋に入り「おばあちゃん」と声をかけて前に廻った時、おばあちゃんは泣いていたのだ。なにか写真のようなものを見ながら、あの優しくも強いおばあちゃんが泣いていたのです。私は驚いて、見てはいけないものを見たような、何が何だか解らない様な気持ちで外に飛び出してしまった。玄関の両脇に一本づつ植えられている立葵の赤い花と、真っ黄色の向日葵がギラギラと私の行動を見ていた。

そんな光景を夢のように思い出しながら、祖母が見ていたあの写真は良三叔父さんに間違いないと今思ったのです。そして大事な秘密を守ることのように、既に亡くなっている父にも、痴呆症になってしまった母にも、今まで誰にも話さずにいたのです。何故か話してはならないような、守ってやらなければならないと子供ごろに思ったのかもしれませんが。

そんな出来事を今まですっかり忘れていたのですが、お彼岸が近づき仏壇の掃除をしている時にふっと思い出したことです。

平成二十二年の夏は異常に暑く、九月も中だというのに遠くで蝉が鳴いているようです。

私の戦争体験記

寒川町支部 高橋 春吉

「紀元は二千六百年、ああ一億の胸は鳴る」昭和十五年神国日本の歴史を我々は、胸を張ってお祝いをしました。時すでに日支事変の真只中で私の兄も中支に出兵中でした。

私は少学校を卒業し、海軍航空技術廠に入廠し、その養成所に入り寮生活を致しました。此处は当時我が海軍が世界に誇る、零式戦闘機を作りあげた海軍の工作庁でした。その技術員を養成する為の施設です。従って、規律の厳しい寮生活の中で勉強と実習に励みました。そして、二年間の課程を修了して昭和十八年海軍工作科予備工作兵として横須賀海軍第一海兵団に入団しました。以後新兵教育を経て海軍工作学校に進み実技を習得、左の腕に桜のマークを戴き、ここで二階級の特進をし一人前の兵隊となりました。今思えば、満十七歳の可愛い兵隊さんでありました。

そして、いよいよ実施部隊に配属です。私は仲の良い同僚と別れて、厚木航空基地の三〇一航空隊に入隊しました。この部隊は、一名小園部隊と云い零式戦闘機百機を擁する進出部隊でした。軍人としての初めての働き場所です。進出部隊故にすべての事に気合が満ちており、その闘魂精

神の注入教育は厳しいものでした。毎晩整列があり、精神棒がうなりを立てて尻を叩かれたものでした。

やがて此の部隊は、先発、本隊と南方に向かって進出しました。私は残務整理のため後発隊として進出命令を待機していましたが、一向に其の気配がなく、その内に横須賀航空隊において再編成とのことでした。後で聞いた話では、三〇一航空隊はレイテ島に向かって進行中全滅したとのことでした。

今度の部隊は、南方海軍航空と称し、日本の全知全能をかけた最新鋭機「雷電」を保有する部隊でした。私達は海軍でありながら第三種軍装に身を固め、身も心も凛々しい気概に包まれた進出部隊です。厚木基地で送った「ゼロ戦機」も今、又送り出す「雷電」の若きパイロットも死をものともせず勇躍、私達が帽子や手を振って送る前を南に向かって飛び立ったものでした。そして、私達は昭和十九年三月輸送船七隻の船団で横須賀を出港しました。私達には何処に行くのか解りませんでした。ところがすでに戦況は敗戦の色濃く、海も敵潜水艦の跳梁は我が本土の近海まで迫っていました。

従って、私達の船団が観音崎を過ぎて早くも嚴重な見張りをしなくてはならず、五分交替で見張りをし進行了しました。やがて先方に父島が午後の陽射しの中に見えた時「雷跡、雷跡」と見張り声、上甲板にいた私は五、六条の白波を立てこの船に向って来るのを見た瞬間、船橋で「取り舵一杯」の号令で船は魚雷と魚雷の間に「ググッ」と向きを変えて入りました。魚雷は両舷をかすめて過ぎました。私は只呆然としてその操舵術の見事さに感心するとともにホット胸を撫で下

ろしました。

それから、此の先には進めないとの事で徹夜で荷降ろし作業に掛かりました。すると今度は空襲になりました。夜を徹しての執拗な敵機の攻撃に船団は湾を出て近海に逃れましたが、すべて撃沈されました。そして島の切り通しの防空壕を見ると空襲での負傷者や戦死者で一杯となり苦しむめく者、すでに息を絶えている者、正に生き地獄の状況でした。私は初めて戦争の恐ろしさで凄惨さを目のあたりにいたしました。

それから幾日か敵の様子をうかがい機を見て夜行で小舟で硫黄島に上陸しました。島に着くとやたらと友軍機の残骸ばかりでした。私達はその片付けと飛行場の爆撃の穴埋めと整備が仕事でした。友軍機は二、三機でその後は遂に一機も補充はありませんでした。皆一様に友軍機の飛来を今日は来るか、明日は来てくれるのか待っておりまして。その間も敵機の空襲は度を増し、加えて艦砲射撃も熾烈を極めてきました。その度に負傷者が出、銃撃に倒れる者が出てきました。そうした状況の中で、応召されて来た年輩の兵隊さんは毎日泣いて居りました。私の隊の専任下士官もその一人で空襲になると一目散に防空壕に逃げ込んで行く、これが負け戦の実態です。

今、私達が妻子を置いて戦に出て何時も死を目前にしておればきつと同じであろうと思います。当時私はそうした中で案外冷静で余り恐ろしい、怖いという事を思いませんでした。それは若かった故であつたでしょう。戦は若者でなければ戦えません。こんな事もありました。分隊で滑走路の整備中空襲になり小さい防空壕に入っていた時、上官が「此処は危ないから二、三人ずつ逃げ出せ」との事で、私が先ず飛び出して浜の方に駆けました。ふと見ると後ろから一人の兵が「待

ってくれ」と云つて泣き出していました。仕方がなく小さい木の陰の蛸壺に入りこんで腹這いになつて空襲の終わるのを待った。つくづく戦争は若い者でなければと思つた。その補充兵の顔は今でも忘れられない。

そうした中、九月頃であつた硫黄島守備隊最高司令官栗林中将、海軍総司令官市丸海軍大佐は、陸海軍全員を集め決死の訓示をされました。「遂に祖国日本の防衛の最前線は此の島となつた。此の島が敵の手中に落ちれば此処を基地として、本土の空襲と上陸を容易にする、全軍玉砕して此の島を死守すべし」と訓示をされました。私も或いは自決用なのか手榴弾を一発渡されました。此の時ばかりはさすがに胸がしめつけられるようでした。その後は敵の攻撃はその度を加え海からも、空からも休みなく続けられ特に島を一巡しての艦砲射撃は身の毛も縮む思いでした。終わつて悠々と島を離れて行く敵の艦隊を木陰で見ている時の悔しさは何も譬えようがありませんでした。

私はふとしたことで医務室に行った折、左右胸膜炎と診断され内地送還を命ぜられ敵の攻撃の間を見て帰れとのことでした。十日間位医務室の防空壕に入室しておりました。ここも戦死者と負傷者で一杯でした。やがて「明朝舟が来るので支度せよ」との事でした。しかし、私が一番若い兵であり皆帰りがたがって泣いている人の前に何で挨拶が出来るでしょうか、大変悩み複雑な思いでした。それ故に友人、先輩にも言葉もかけず夜そつと荷物を纏めて早朝一目散に浜辺に向つて駆けだしました。

舟は小さな木造船でした。途中二、三度敵機の攻撃を受けましたが小舟が故に逃げる事が出来ました。着いた所は横須賀海軍病院の一室でした。今考えれば、何で此のような戦をせねばならなかったのでしょうか。私の兄は遂に帰っては来ませんでした。

海老名市支部 井出 こま（妻）

昭和十九年、終戦までの一年余りの日々を十五、十六歳の若者が戦争と向き合い、必死に生きてきた。その体験は戦没者の弟妹の戦中の思い出に重なる。

戦地に赴いた若者の代わりに、国を支えてきた学徒たちの生活も語り継ぎたいという思いを戦中、戦後を共に過ごした友人・中村とし子さんに託します。

学徒勤労働員

中村 とし子

昭和十六年に始まった太平洋戦争は、十九年に入ると太平洋の島々の玉砕が続き厳しい戦局になっていった。

昭和十九年三月には、全国の中学三年以上の学生に「学徒勤労働員」が発令された。戦地に赴いた若者の代わりに、約三百万人の少年少女達が学業を中断して兵器増産等に従事することになった。

厚木高女三年、四年の約三百名もこの動員令を受けて、昭和十九年七月、川崎市溝ノ口にある日本工学川崎製作所に配属された。日本光学は、レンズで有名な会社で、南武線を挟んで海軍と陸軍管轄の工場が並んでいた。主に航空機用の爆撃照準器を造っていた。五万機の航空機生産を目標に掲げる軍部にとって重要工場の一つだった。

工場には既に日大、米沢高専、小田原中、厚木中、高津高女等の学徒が大勢働いていた。のんびりした田舎の女学生の生活は一変した。私達は通勤生、寮生に分かれ「厚木高女生らしく誇りを持って」との先生の教えを胸に、ひたすら工場に通った。この時から昭和二十年八月十五日までの一年余りの日々は、多感な十五、六歳の少女にとって強烈な体験で、六十数年経た今でも鮮やかに蘇る。

「勤労働員で何が大変でしたか」とよく尋ねられるが、大変なことはいくらでもあった。生活必需品の欠乏：米、味噌等の配給以外売っているものは何もなかったので、ブラウスやモンペは手作りだった。靴だけはどうにもならず、編上靴が支給されるまで下駄で通った。依知から本厚木駅まで歩いた友達は、予備に藁草履をカバンに入れていた。

工場で：みんな慣れない仕事に一生懸命取り組んだ。機械課や硝子課等の現場に所属した人達は特に苦労が多かった。モーターが唸る大騒音の中で油まみれになりながら、誤差百分の数ミリの精度を要求される部品作りを必死で覚えた。光学花形の硝子課の作業場は二重窓になっている。冷房のない部屋の暑さは半端ではない。不良品を作らないように緊張の毎日だった。

通勤：窓からの出入りは日常茶飯事の超満員電車。アルミのお弁当箱が潰れる凄さだった。朝

はともかく帰りがなかなか乗車できない。当時の小田急線小田原行きは二十分に一本で四両編成だった。何時に家に帰れるのか、みんなで歌いながら次の電車を待つのだった。

二月の大雪の日、本厚木駅に着いたのは真夜中で心配した家族が迎えに来ていた。

寮生活：大豆の方が多いご飯、冷たい味噌汁。蚊や蚤に攻められる夜、火の気のない厳寒の寮舎。でも時にはレコードコンサートがあり、ザリガニ捕りをして栄養補給をした日もあった。

寒い日：昭和二十年は、気象台で関東大震災の年と並んで特記される寒い年だった。日頃温暖な横浜でも一月の平均気温はマイナス三・一度、雪もよく降り最高四十五センチも積もった。

暖房もなくしんしんと冷える工場や寮舎、オーバーもなく多摩川の川風にさらされながら電車を待ち続ける女学生達、みんな大変だった。

空襲：十九年十一月末から空襲が始まった。サイパン島から発進したB29が百機二百機と編隊を組んで攻めてきた。東京大空襲や横浜大空襲も含めて東京百回、神奈川五十二回、川崎二十回が記録されている。激しくなる空襲に寮生達は靴を履いて寝るようになった。四月十五日の空襲ではみんな「もう、だめだ」と覚悟をした。地元の方が大勢亡くなられたが、避難の途中先生の機転で近くの防空壕に飛び込み命拾いをした。そのうち艦載機が朝から襲ってくるようになった。低空で列車や人を狙うのでとても恐ろしかった。急停止した電車の窓から飛び降り雑木林に逃げ込んだことが何回もあった。六月十一日小田原中の「鍵和田武男」さんが工場で銃弾を受け亡くなられた。

「動員が始まる前に、先生達みんなで三百人全員の顔と名前を覚えたんだよ」と戦後寺田先生

から伺った。若手の先生が召集された後の少ない人数で、生徒を守るのに必死だった先生方の御苦勞を思った。

級会で「学徒勤勞動員について一番言いたいことは」と聞いてみた。「学校でしつかり勉強できなかつたことが一番残念」という意見が圧倒的だった。まともに学べたのは二年生まで。英語は一年で中止になりその遅れを取り戻すことは出来なかつた。何でも吸収できる時を無為に過ごしたことが本当に悔いが残るということだった。

私達は七十歳を記念して『学徒勤勞動員の記』をまとめ学校や図書館に寄贈した。資料をいろいろ調べたが、戦闘や空襲で亡くなられた方達のあまりの多さに驚いてしまった。

理不尽な時代の波に沈められた方達の無念を忘れてはいけけない。残された日を大切に「戦争の愚かさ」を語り継ぎたいと思っている。

心ばいしたよ、おじいちゃん

厚木市立緑ヶ丘小三年 野口 聖菜（曾孫）

南区支部 森本 浩吉（子）の孫

戦没者 森本 利雄

戦没地 東部ニューギニア

「やつと、おじいちゃんが、パプアニューギニアから帰ってきたよ。」お母さんが、おばあちゃんの電話で教えてくれました。「ゆうべ、おそく元気に帰ってきたんだってよ」そう聞いて、わたしは、いつもよかったなとホッとしします。私の、おじいちゃんは横浜に住んでいます。あそびに行くと、そつとおこづかいをくれたり、運動会を毎年見に来てくれるやさしいおじいちゃんです。ふだんは、む口なおじいちゃんですが、パプアニューギニアから帰ってきた時には、いろいろなことを教えてくれます。

写真を見ながら、わたしと同じくらいの子どもたちのことを教えてくれたりします。

なぜ、おじいちゃんがパプアニューギニアに行くのかというと、それは、せんそうで死んだ人たちのいこつのちようさやしゅう集のためです。わたしのひいおじいちゃんがそこでせん死しているそうです。いこつしゅう集とは、せんそうでなくなった日本の人たちのほねをさがして、日本にもって帰えることだそうです。パプアニューギニアは日本から、とてもとおい国だそうです。

おじいちゃんに教えてもらうまで、その国のことを知りませんでした。パプアニューギニアは日本のようにきれいな道ろはないそうです。川にもはしがかかっていなかったり、車がやつとの細い山道のところが多いそうです。だから、車がひっくりかえりそうになったり、ボートがてんぷくしそうになったりしながら、ジャングルの中や海の近くの村をたずねて、村の人たちにいこつ話をきくのだそうです。

パプアニューギニアの人たちも、ジャングルの中などで見つけたほねをほかんしておいてくれたり、ほねのある場所をおしえてくれたり、あん内してくれたりするそうです。そうやってくろうして見つけたほねが、動物のものだったりすることがあるので、そのほねが、日本人のほねなのか、はくぶつかんの人がしんちようにけんさをするそうです。

おじいちゃんが、何回もパプアニューギニアにいこつのちようさやしゅう集に行っても、せんそうでなくなった人達のほねは、まだまだたくさんこのっているそうです。

おじいちゃんに見せてもらった写真には、たくさんの人たちの頭のほねや足のほね、体のぶ分の細くなったほねが写っています。かわいそうだなあとかなしくなります。

おじいちゃんの話を書いたり、写真を見せてもらったりして、せんそうはこわいなあ、と思いました。もう、ぜつたいにせんそうはしてはいけないと思いました。おじいちゃんたちもそう思いながら、いこつのちようさやしゅう集をしているはずです。せんそうでなくなった、たくさん日本人の人のいこつが早く日本に帰ってこられたらいいなあと思いました。

パプアニューギニアから三週間ぶりに帰って来たおじいちゃんに、横浜に家ぞくで会いに行き

ました。まっ黒に日やけたおじいちゃんは、くたくたにつかれて少しやせたように見えました。私が生まれるずっと前におきたせんそうのことで、今も、いっしょうけんめいがんばっているおじいちゃんたちを、わたしは、すごいなと思います。そして、ひいおじいちゃんのいこつが、もう日本に帰ってきていたらいいなと思いました。

お母さんから、「また、らい月パプアニューギニアへおじいちゃんは、ちようさに行くんだって」おばあちゃんから電話があつたよ、と教えてくれました。

私は、また心ばいだなあ、と思いました。

(夏休みの宿題より)

戦死がなければ

旭区支部 福井 恵美子（子の妻）

戦没者 福井 辰次

戦没地 フィリピン

我が家では、義父（夫の父）とその弟二人の三人が出征し、義父と一番下の弟にあたる叔父が戦死しております。

義父は三十一歳で、妻と夫と三歳下の弟の三人を残してレイテ島にて玉砕しました。

叔父は、二十六歳の若さでまだ独身でした。敵の魚雷攻撃を受けてフィリピン沖にて一生を終えています。

未亡人となった三十二歳の姑（義母）と、夫と弟の二人の遺児、祖父、江戸時代生まれの曾祖父母、二十歳代になったばかりの二人の叔母という家族構成になりました。

江戸時代から続いた旧家で、土地も小作人に貸してある程なので、土地などを売って生活し、跡取りで、大黒柱でもある義父がいなくても金銭的な苦労はなかったそうです。

大家族の上に親戚や昔からのつきあひがあり、今とは比較にならないほどの交わりがあったので義父や叔父が死んでもそれほど淋しくなかったようです。

男手が足りない部分は、青森から夫婦で出稼ぎに来た人に畑を手伝ってもらい、この夫婦とは、その後も交流が続きリンゴが送られてきていました。

終戦となり、義父と、一番下の弟の戦死の公報が届いたそうですが、すぐ下の弟はシベリヤに抑留されていることが判ったそうです。やがて、叔父は無事シベリヤから祖国へ帰還することが出来ました。

帰国した叔父は、姑（義母）と再婚することになり、夫にとっては叔父さんが、お父さんとなり、新しい家族の生活が始まり、やがて、弟が生まれ、兄弟は三人となりました。

その姑も平成十五年元日の夜、八十八歳で他界しました。義父は奇しくも、姑の後を追う様にその一週間後に亡くなりました。

戦争によって、今まで築かれた互いの人生が変わってゆく、現代の世相から考えると想像がつかないことでしょうが、当時は、それぞれの家の事情もあり、この様なことは珍しいことではなく、他にも生活のため子供のために、いろんな結婚があったと聞きます。

これからの世代には、戦争のもたらす犠牲により、幸せな家庭や夫婦が引き裂かれたりすることがない様、この平和のバトンを、次の世代へと引き継いでゆくことが、私達の使命であると思うものです。

未来に向かって

小田原市支部 山田 和子（妹）

戦没者 山田 勇造

戦没地 フィリピン

戦後六十五年になり、神奈川県遺族会の妻の方はじめ、遺児の皆様の記事が事業部と女性部の人達による本が出版される事になり、年月の過ぎ去った思い出が夢のようであります。

小田原でも、平成十九年五月に六十年史が発行され、譲原会長はじめ当時の小澤市長と議員の皆様方や僧侶の方々のお言葉をいただき、又、二十四支部の遺族の思いを記事にさせていただきました。

妻の方は、幼い子供を育てながら夫の帰りを待ち望んでいた事でしよう。終戦になり帰ってこないと知らされた時は涙を流し悲しまれた事と思います。でも、その親の姿を見て育っているの で心の強い遺児になっているのではないでしようか。

現在、役員の人達と毎月理事会で行事をいろいろと決め実施しております。年々遺族会を辞める人も出て来て少なくなりました。妻の方々は高齢者で老人ホームへ入っている方や亡くなられた方など、数年前とは大分変ってきております。でも、靖国神社には毎年春には小田原市ではバ

スが七台出て参拝しております。

市の慰霊塔や二十四支部にある忠魂碑なども参拝し、安らかに眠って下さいと祈っております。その気持ちが大切でいつまでも忘れないで下さいと言いたいです。

今、当時の事を忘れがちですが、あらためて振り返り六十五年もたち思い出が浮かぶ気持ちになりました。

これからの若い人達にも伝えていかなければいけないと思います。ずっと平和で良い日本を築き上げて行ってもらいたいと政治家の方々に申し上げたいです。

靖国の さくら満開 咲きほこる 体で感じる ここちよさかな

過ぎ去りし 戦後に思う 食料の 今考える 未来食なり

過ぎ去りし 六十五年 今平和

今もなお 忘れられない 戦時中

日本国 皆んなの苦勞 思い出し

鎮魂、報恩、感謝の念をもつて

小田原市支部 譲原 武彦（弟）

戦没者 譲原 純一郎

戦没地 中国・河南省

先の大戦終結から既に六十五年、将に「光陰矢の如し・歲月人を待たず」と言われますが、今日の平和と繁栄を享受しながらも、思い起こせば、幾多の春秋に富みし諸霊が、往時、秋^{とき}ありて、大命を奉じて国家の干城となりますや、家族郷党の絶大なる期待と名誉を担い、故郷を後に、勇躍して国土防衛の任に、或いは、遥かなる異国の戦場に上られました。

時、恰も戦火の拡大に伴い、北は酷寒のシベリアに、広漠たる中国大陸に、或いは、炎熱酷暑の南海の島々にあつて、苛烈なる戦闘に身を挺し、病魔飢餓とも戦いながら、武運叶わず、懐かしの我が家に帰ることなく、最愛の妻子、父母、兄弟姉妹等に相ま見ること無く、万感の思いと、悲痛な叫びを遺して逝つたであろう、その無念さを思い遣ります時、或いは、戦火戦災に見舞われて、尊い犠牲となられた諸霊に思いを馳せます時、唯々、首^{こうべ}を垂れて合掌し、痛惜痛恨の情と、戦争の虚しさ、平和の尊さを知るのみであります。

諸霊が生前の面影や、元気な声は、今更、見る術も、聞く術もありませんが、其の忠烈と顕彰は、齊しく世人の崇敬致すところであります。

当遺族会に於いても、創立六十周年を記念して、去る平成十九年五月、「小田原市遺族会六十年史」を発刊致しました。各界代表者の、祝辞と平和へのメッセージ、それに、遺族六十一名の方からは、恐らく六十年目にしてであろう今、語り継ぎたい平和の尊さ、命の尊さ、遺族の思いの数々を寄稿して下さいました。

私事で恐縮ですが、長男であった兄は、戦時、北支派遣軍の一将校として、中国は河南省における、最前線の警備隊長であった昭和十七年十二月二十三日未明、現地での戦闘で寡兵よく奮戦するも、武運叶わず、銃弾を浴びながら壮烈なる戦死を遂げ、時に享年二十二歳でした。

現地の本部から送られてきた遺骨、戦死時の血の付いた軍服や遺書、生前と軍隊関係写真、軍隊日誌等の遺品類、戦死を報道された現地の東亜新報、国内各社の新聞報道等は、貴重な資料として、今尚、大切に保存してあります。

又、私も、お陰様で地元の小田原市遺族会会長と、財団法人神奈川県遺族会副会長を務めさせて頂いて居りますが、何時の世に在っても、国難に殉じられた御魂の御遺徳と、お心を偲びながら、遺族の絆を深め合って、英霊の顕彰と、奉賛敬慕の事業や行事に、一層の努力をして参る所存で御座います。

終りに臨み、今は亡き御魂の、安らかならんことを、ご祈念申し上げますと共に、更なる御加護を賜りますよう、恭しく敬虔の至情を捧げ、ここに、自作の拙い短歌と漢詩を捧げます。

惜別の 吾に托せし 言の葉の 耳に尽ききぬ 軍用列車
殉國の 炎と燃えし 英魂の 声なき声を 吾は聞くなり
砲煙と 銃火交ゆる 戦場に いのち煌めく^{きら} 死生一如

英霊を偲ぶ

英霊 純忠 護国の志 家郷 遠く離れて 異国に埋むる

悠久の 魂魄 身命を捧げて 靖国の榮照 永久^{とわ}に願わん

編集作業を終えて

平成二十一年秋、戦後六十五年の節目の年度を前にして、女性部と事業委員会は、対話集会を催し、年々鬼籍に入られ減少の著しいお母さん会員（戦没者の妻・遺児達の母）の方々の、ご主人との別れ、戦後のご苦勞等についての証言を内容とする記念誌の作成を節目の年度の事業として取り組むことを合議決定しました。女性部長と事業委員長連名にて会長に計画を具申し、理事会、評議員会を経て、平成二十二年度の事業計画と予算措置が承認されました。

女性部会と事業委員会それぞれの役員改選後、新スタッフに事業計画を説明し、記念誌発刊に向けてのキック・オフを致しました。

双方から編集委員を各五名ずつ選出し編集委員会を発足させ、発刊を三月二十四日の県遺族会記念日を目標としてスケジュールを設定し、九月末締め切りとして原稿募集を行った結果、八十六編の応募を頂きました。

手書きの原稿等をパソコンに入力し電子データ化の作業は、事業委員会から作業部会を編成して自宅での作業をお願いしました。

編集委員会と作業部会は合同会議を行い、互いに補完しながら、全原稿について読み合わせを行い、誤字、脱字、表現方法、発刊趣旨との兼ね合い等について、忌憚のない意見交換を行いながら精査を実施、内容の一部を修正させていただいた原稿は、ご本人様に確認を取らせていただいたものもあります。

合同会議は、午前十時半に開始、午後五時を過ぎたことも再三であり、手弁当での協力を願う十五回を超える開催でした。

編集委員会・作業部会の方々は、それぞれに素晴らしい才能を持っておられる方ばかりで、遺族会の底力を見た感じです。多くの方との連携協力によって一つのものが成し遂げられることを再認識しました。日頃の活動にも、多くの会員の意見を幅広く汲み上げ、新しい発想も受け入れることが望まれます。

終わりに、投稿いただきました方々、それぞれが愛する人への尽きぬ思慕の念が行間にまで溢れ出しておりましたことを受けて、記念誌の表題は、夫に、父に、兄弟に、それぞれの想いを込めて「逢いたかった」とさせていただきました。

戦争により、幸せな家庭が壊されることが二度とない様、恒久平和を遺族会として希求してゆくことが使命であると強く感じました。

この記念誌は、女性部と事業委員会のチームワークと汗の結晶です。今後も互いに補完協力し合いながら、諸活動にこの経験を生かしてゆきたいと思えます。

尚、前女性部長小峰様にご助言ご指導を、事務局には種々の便宜供与をいただきましたことを申し添えます。

戦後六十五年記念誌編集委員長

事業委員長 森本 浩吉

追記

三月十一日発生 of 東日本大震災の日も合同会議中でした。発刊日が迫っていることもあり、余震、停電の中でしたが十七時半迄会議を継続したために、会議出席のメンバーは帰宅難民となっていました。

その結果、自宅や家族を心配しながらも、止む無く会館に宿泊や、横浜迄二時間以上歩いて駅周辺での宿泊を余儀なくされてしまったり、更に数時間掛けての徒歩帰宅となってしまうたメンバーが大半となったことは、記念誌発刊に際して忘れること of の出来ないこととして追記しておきたいと思います。

被災された皆様に心からお見舞申し上げます。

(三月十五日 森本記)

編 集 委 員 会

副
委
員
長

委
員
長

渡
邊
玉
見

脇
坂
郁
子

山
田
和
子

森
本
浩
吉

別
所
宏
美

平
山
一
美

田
村
美
智
代

遠
藤
陽
子

植
松
幹
枝

青
木
康
浩

作 業 部 会

脇
坂
宜
志

森
本
浩
吉

森
久
保
幸
也

平
山
一
美

富
永
正
敏

久
保
田
昌
司

大
越
幸
雄

石
井
昭
男

赤
松
良
紀

逢いたかった

戦後六十五年を迎え

発行 平成二十三年三月二十四日

財団法人 神奈川県遺族会

〒233・0007

神奈川県横浜市港南区大久保一・八・一〇

電話 045(842)4243、5323

定価 1,000円

印刷・製本 情報印刷株式会社

〒213・0031

神奈川県川崎市高津区字奈根718・15

電話 044(850)8861

